

熊野遺跡Ⅶ (立堀地区の調査)

お手長山古墳 (発掘調査/確認調査)

2007

深谷市教育委員会

熊野遺跡Ⅶ (立堀地区の調査)
お手長山古墳 (発掘調査/確認調査)

2007

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。合併後の深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊富な農産物があり、自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代晩期から弥生時代初期の土器を出土した四十坂遺跡・上敷免遺跡や、古代榛沢郡・幡羅郡の役所と推定される中宿・幡羅遺跡などは、埼玉県の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡と言えるでしょう。

深谷市では、合併以前から、こうした貴重な遺跡群を保護するために鋭意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成元年度に民間会社の受託事業として、実施した調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、平安時代の竪穴住居跡をはじめ、市指定史跡「お手長山古墳」の周溝確認など地域史解明の上では、大きな成果を得られたものと確信しています。本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成19年2月

深谷市教育委員会
教育長 猪野幸男

例言

1. 本書は、以下の発掘調査・確認調査の報告書である。

発掘調査	熊野遺跡（立堀地区）	調査期間	平成2年11月1日～平成2年12月27日実施
〃	お手長山古墳	〃	昭和63年5月1日～昭和63年5月15日実施
確認調査	お手長山古墳	〃	平成2年11月1日～平成2年12月27日実施
2. 熊野遺跡（立堀地区）の調査は、当初、立堀遺跡として実施したが、熊野遺跡と同一遺跡（埼玉県遺跡登録番号No.63-17）であるため本書では熊野遺跡（立堀地区）の調査として取り扱う。また、開発予定地内に隣接して深谷市指定史跡（発掘調査当時：岡部町）「お手長山古墳」が所在しており、周溝の一部が予定地内にはいることが予測されたため、併せて確認調査も実施した。

お手長山古墳の発掘調査については、昭和63年度墳丘に隣接する個人住宅建設に伴い、岡部町教育委員会が実施したものである。
3. 熊野遺跡立堀地区の発掘調査は、岡部町遺跡調査会が、新神戸電機株式会社埼玉工場の委託を受け実施した。その後、平成17年12月をもって岡部町遺跡調査会が解散したことにより、整理・報告書作成作業は、深谷市教育委員会が引き継いだ。

お手長山古墳の確認調査・発掘調査は、岡部町教育委員会が実施した。平成18年1月に深谷市・岡部町・花園町・川本町一市三町の合併に伴い、整理・報告書作成作業は深谷市教育委員会が引き継いだ。
4. 出土品の整理及び図版作成は、鳥羽政之・宮本直樹・竹野谷俊夫が行った。
5. 本書の編集・執筆は、鳥羽政之が担当した。
6. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。
7. 本報告書作成にあたり以下の機関・個人より御教示・御協力をいただいた。

埼玉県教育委員会生涯学習文化財課 ㈱埼玉県埋蔵文化財調査事業団 金子彰男 駒宮史朗
坂本和俊 菅谷浩之 山崎武

凡例

1. 発掘調査位置図は(旧)岡部町都市計画図 1/2,500及び1/10,000を、縮小し使用した。
2. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。

組織

1. 平成18年度

教育長	猪野幸男	主査	鳥羽政之
教育次長	古川国康		森田富雄
教育委員会次長	中村信雄		宮本直樹
(深谷市教育委員会岡部事務所)		臨時職員	竹野谷俊夫
所長	柳田一郎	〃	黒澤 恵
所長補佐	鈴木八十子	〃	佐藤由江
主査	根岸 宏	〃	布施みゆき
	金井登美子		

目次

序

例言・凡例

—目次—

I	調査に至るまでの経緯	1
II	遺跡の地理・歴史的環境	4
	（1）地理的環境	4
	（2）歴史的環境	4
III	熊野遺跡（立堀地区）の調査	9
	（1）発掘調査地点の位置	9
	（2）調査の経過	9
	（3）発見された遺構と遺物	9
	A. 竪穴住居跡	9
	B. 竪穴遺構	23
	C. 土壙	32
	D. 溝跡	41
IV	お手長山古墳の調査	49
	（1）発掘調査・確認調査の経緯	49
	（2）発掘調査・整理報告書作成の経過	49
	（3）昭和63年度の発掘調査で発見された遺構と遺物	49
	（4）平成2年度の確認調査で発見された遺構と遺物	57
	（5）発掘調査・確認調査から推定されるお手長山古墳の規模と年代	58
V	まとめ	63
	（1）熊野遺跡立堀地区の調査	63
	（2）お手長山古墳の発掘・確認調査	63

<挿図目次>

第1図	熊野遺跡の範囲とお手長山古墳の位置	3	第41図	17号土壌	37
第2図	熊野遺跡(立堀地区A~C地点)とお手長山古墳	3	第42図	18号土壌	37
第3図	古墳時代後期の遺跡分布(集落跡・その他)	7	第43図	19号土壌	37
第4図	古墳時代後期の遺跡分布(古墳・古墳群)	7	第44図	20号土壌	37
第5図	飛鳥~奈良/平安時代の主要遺跡分布	8	第45図	21号土壌	39
第6図	グリッド配置図	10	第46図	22号土壌	39
第7図	A区全測図	11	第47図	23号土壌	39
第8図	B区・C区全測図	13	第48図	24号土壌	39
第9図	1号竪穴住居跡	14	第49図	25号土壌	39
第10図	1号竪穴住居跡カマド	14	第50図	26号土壌	39
第11図	1号竪穴住居跡出土遺物(1)	15	第51図	27号土壌	40
第12図	1号竪穴住居跡出土遺物(2)	16	第52図	28~36号土壌	40
第13図	1号竪穴住居跡出土遺物(3)	17	第53図	土壌出土遺物	41
第14図	2号竪穴住居跡	19	第54図	1号溝	42
第15図	2号竪穴住居跡カマド	19	第55図	2号溝	43
第16図	2号竪穴住居跡遺物分布状況	20	第56図	3・4号溝	44
第17図	2号竪穴住居跡出土遺物(1)	21	第57図	5号溝	45
第18図	2号竪穴住居跡出土遺物(2)	22	第58図	6号溝	46
第19図	3号竪穴住居跡	24	第59図	7号溝	46
第20図	3号竪穴住居跡カマド	24	第60図	溝出土遺物(1)	47
第21図	3号竪穴住居跡遺物分布状況	25	第61図	溝出土遺物(2)	48
第22図	3号竪穴住居跡出土遺物(1)	26	第62図	お手長山古墳発掘調査全測図(昭和63年度調査)	50
第23図	3号竪穴住居跡出土遺物(2)	27	第63図	お手長山古墳土層断面図・エレベーション図	51
第24図	1号竪穴遺構	28	第64図	お手長山古墳周溝出土遺物(昭和63年度調査)	52
第25図	2号竪穴遺構	28	第65図	お手長山古墳周溝出土遺物(昭和63年度調査)	53
第26図	3号竪穴遺構	29	第66図	お手長山古墳周溝出土遺物(昭和63年度調査)	54
第27図	4号竪穴遺構	29	第67図	お手長山古墳周溝出土遺物(昭和63年度調査)	55
第28図	5号竪穴遺構	30	第68図	お手長山古墳第1トレンチ	57
第29図	竪穴遺構出土遺物	31	第69図	お手長山古墳第2トレンチ	57
第30図	1・2号土壌	33	第70図	お手長山古墳第3トレンチ	59
第31図	3号土壌	33	第71図	お手長山古墳第1トレンチ出土遺物	60
第32図	4・5号土壌	33	第72図	お手長山古墳第2トレンチ出土遺物	60
第33図	6・7号土壌	35	第73図	お手長山古墳第3トレンチ出土遺物(1)	61
第34図	8・9号土壌	35	第74図	お手長山古墳第3トレンチ出土遺物(2)	61
第35図	10・11号土壌	35	第75図	お手長山古墳墳形復元図	64
第36図	12号土壌	35			
第37図	13号土壌	36			
第38図	14号土壌	36			
第39図	15号土壌	36			
第40図	16号土壌	36			

<写真図版>

(写真図版1)	A区全景	調査風景(南より)	A区西部の遺構群	1号住居跡	1号住居跡カマド遺物出土状況	2号住居跡遺物出土状況	3号住居跡遺物出土状況	3号住居跡カマド遺物出土状況	(写真図版2)	1号竪穴遺構・1号溝・3号土壌(西方より)	1号竪穴遺構・1号溝・3号土壌		
	2号竪穴遺構	3・4号竪穴遺構	5号竪穴遺構	11~3・21号土壌	4・5号土壌	6・7号土壌・2号溝	(写真図版3)	13号土壌	2号溝跡	3・4号溝	C区土壌群と7号溝	お手長山古墳現況	
	周溝完掘状況(西方より・昭和63年度)	周溝完掘状況(北方より・昭和63年度)	第1トレンチ(南方より)	第2トレンチ(北方より)	第3トレンチ(北方より)	第3トレンチ突出部確認状況(東方より)	第3トレンチ突出部確認状況(西方より)	(写真図版4)	1号住居跡(No.1)	1号住居跡(No.3)	1号住居跡(No.12)の線刻)	3号住居跡(No.9)	3号住居跡(No.10)
	1号住居跡(No.15)	1号住居跡(No.16)	1号住居跡(No.14)	1号住居跡(No.20)	1号住居跡(No.24)	(写真図版6)	2号住居跡(No.1)	2号住居跡(No.7)	2号住居跡(No.8)	2号住居跡(No.9)	3号住居跡(No.1)	3号住居跡(No.2)	3号住居跡(No.8)
	3号住居跡(No.10)	(写真図版7)	お手長山古墳周溝出土遺物(No.10)	お手長山古墳周溝出土遺物(No.11)	お手長山古墳周溝出土遺物(No.12)	第1トレンチ(No.8)	第2トレンチ(No.2)	第2トレンチ(No.3)	第2トレンチ(No.5)	3号住居跡(No.8・内面)			

I 調査に至るまでの経緯

平成18年1月1日、深谷市、岡部町、川本町、花園町の一市三町が合併し、人口約14万6千人、総面積137.58k㎡の新「深谷市」が誕生した。

このうち旧岡部町域は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、前期末～中期にかけての弥生土器を出土した四十坂遺跡、県内屈指の副葬品を有する四十塚古墳、榛沢評・郡家と推定される熊野・中宿遺跡など、各時代を通して著名な遺跡が多く、関係する発掘調査も数多く実施されている。遺跡数は、旧岡部町域で、145箇所が確認されている。

熊野遺跡（立堀地区）の発掘調査は、平成2年度に工場建設にともなう緊急調査として岡部町遺跡調査会が実施したものである。岡部町遺跡調査会は、平成17年12月をもって解散し、その事業は深谷市教育委員会へ引き継がれることとなった。

以下に報告書刊行までの経緯を記す。

熊野遺跡（立堀地区）の発掘調査

熊野遺跡（県遺跡登録番号63-17）は、JR高崎線岡部駅の北方約0.9kmに位置する。遺跡は、昭和53年度の岡部西小学校建設に伴う発掘調査を嚆矢として数多く実施されている。特に平成4年度以降実施された岡中央土地区画整理事業を中心とする発掘調査は、現在まで162次を数える。

今回報告する調査地は、平成2年度当時は、立堀遺跡として調整～発掘調査が実施されているが、遺跡としての範囲は、熊野遺跡内であり、今回混乱を避けるため熊野遺跡（立堀地区）として取り扱うこととする。

また、本報告の発掘調査は、新神戸電機株式会社埼玉工場（以下事業者と記す）による工場建設に伴う緊急発掘として実施されたものである。

事業者は、平成2年9月10日付で、岡部町教育委員会に、開発予定地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて照会した。これに基づき教育委員会では埋蔵文化財の詳細を確認するために試掘調査を実施した。試掘調査では、工場予定地より堅穴住居跡、土壙、溝等が検出された。

この結果を受け、岡部町教育委員会では、確認された地点について開発計画予定地から除外することが望ましいが、現状変更する場合は、事前に

埋蔵文化財発掘届を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある趣旨の回答をした。

その後、事業者及び教育委員会の協議の結果、発掘調査は、岡部町遺跡調査会に委託することとなった。事業者よりの発掘届は、平成2年11月1日付けで提出され、また岡部町遺跡調査会でも、同日に発掘調査の届出を行った。

発掘調査は、平成2年11月1日から平成2年12月27日にかけて実施された。調査では、堅穴住居跡3軒、堅穴遺構5基、土壙36基、溝7条、ピット等が検出された。堅穴遺構としたものは、カマドの存在が明確でなく、遺物も極く少量であり、時期の比定が難しい。中世の所産であろうか。このうち、2号、3号、5号堅穴遺構では、主要ピットが、壁際に1対掘られる特徴的な遺構であり、周辺遺跡でも検出されていることから、本地域に特徴的な遺構として注目する必要がある。

堅穴住居跡は、3軒が検出されている。いずれも東壁にカマドを設置するものであり、平安時代のものである。1号住居跡では、カマドに埴輪片が構築材として用いられており、円筒埴輪、形象埴輪が検出されている。

2号住居跡、3号住居跡は、遺物も豊富に出土した。時期は、9世紀後半代であろう。

お手長山古墳の発掘調査・確認調査

お手長山古墳（県遺跡登録番号63-18）は、熊野遺跡の範囲内にあり、昭和54年度に町史跡に指定されている。本古墳の発掘調査は、昭和63年度に実施されている。発掘調査は、個人住宅建設に伴うもので、岡部町教育委員会が実施した。史跡指定となっている墳丘南側の周溝部分の調査である。調査面積は487㎡である。調査では、後円部の周溝約16%が検出されている。周溝からは、土師器・須恵器片が多量に出土している。以上の調査をお手長山古墳1次調査と呼称する。本古墳の確認調査は、熊野遺跡（立堀地区）の調査と併行して行った。調査期間は平成2年11月1日から平成2年12月27日にかけてである。

調査では、第1～第3トレンチを設定し、墳丘及び周溝の状況を確認した。この確認調査をお手長山古墳第2次調査と呼称する。第1次及び第2次の調査により、墳形がほぼ確定した。

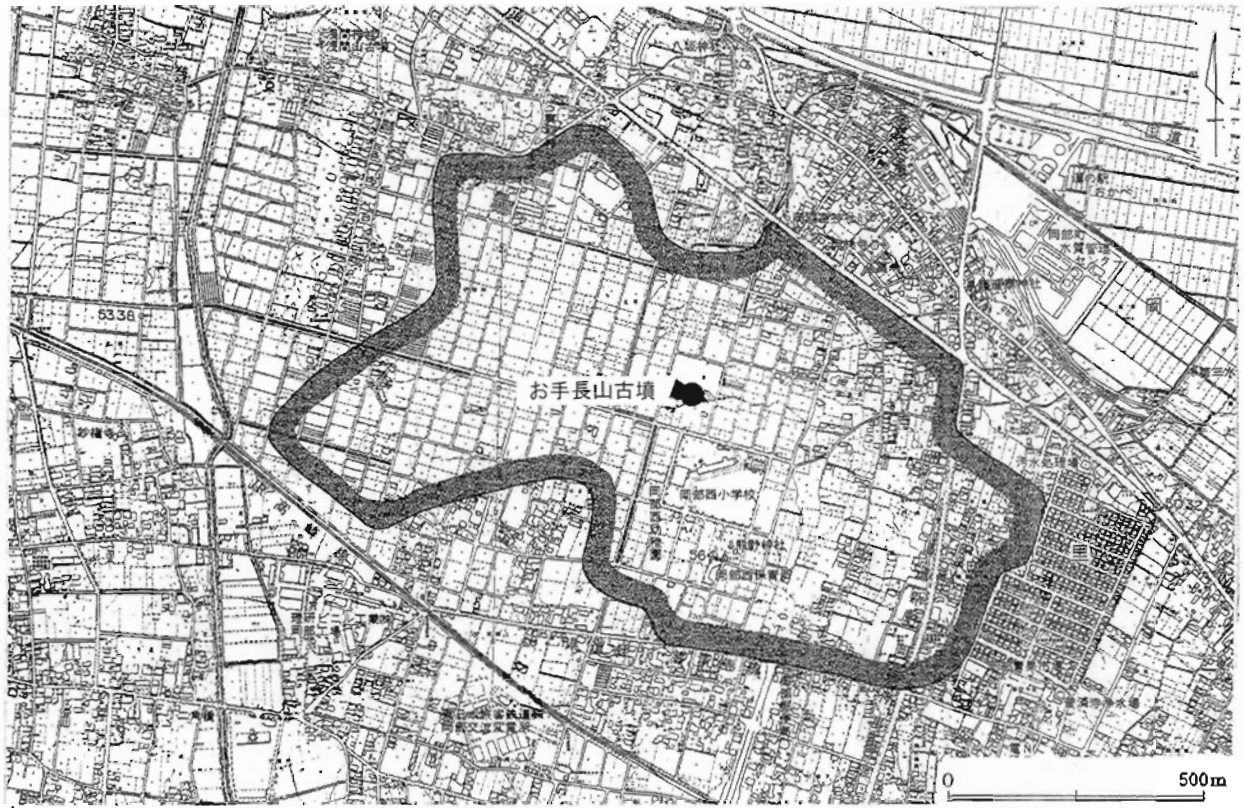
整理・報告

整理・報告は、熊野遺跡（立堀地区）・お手長山古墳1～2次調査を併せて行った。

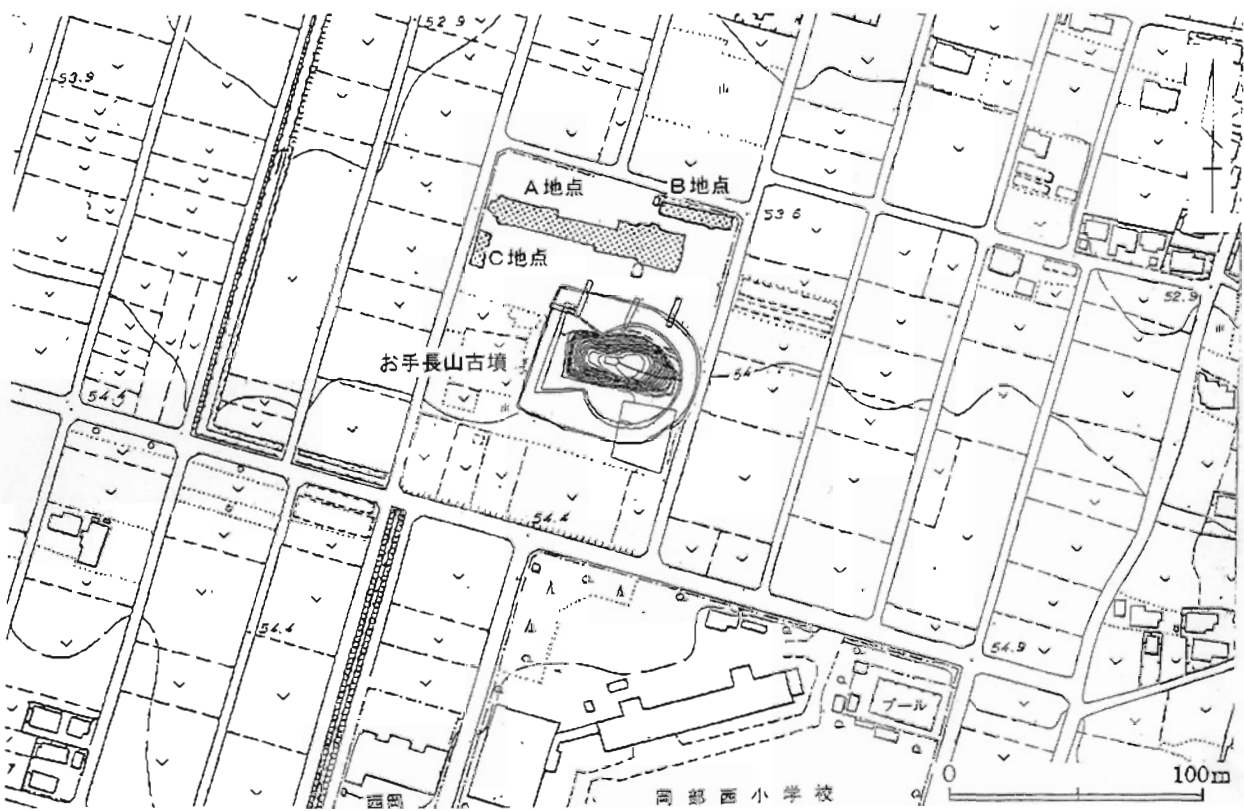
調査により検出された遺構・遺物の整理・報告書作成作業は、発掘調査実施後、諸般の事情により中断していたが、平成18年4月1日から再開した。遺物の水洗・復元・実測作業等は、旧岡部町

時代に終了していたことから、平成18年4月以降、図面の整理作業、原稿執筆作業を中心に行った。

図面の整理を平成18年4月～8月、トレース作業を9～10月、原稿執筆・図版作成等を10月～12月、印刷・製本作業は、平成19年1月～2月にかけて行った。報告書刊行日は、平成19年2月28日である。



第1図 熊野遺跡の範囲とお手長山古墳の位置



第2図 熊野遺跡(立堀地区A～C地点)とお手長山古墳

II 遺跡の地理・歴史的環境

(1) 地理的環境

熊野遺跡(立堀地区)・お手長山古墳は、調査時点では岡部町大字岡に位置していたが、平成18年1月1日に深谷市、岡部町、川本町、花園町の一市三町が合併し、新「深谷市」がスタートした。ここでは、合併後深谷市の地理的環境を概観する。

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地、本庄台地、妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地、山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川右岸付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100m程、扇端部は35~50m程である。また、当台地は、荒川の流路変更により形成された段丘が発達し、その形成過程により、櫛挽面、寄居面に大別される。

櫛挽面は武蔵野面に対比され、岡部町、深谷市東半をのせる。台地上には、藤治川、針ヶ谷堀川、西川、上唐沢川、押切川、下唐沢川等の中小河川が北流する。これらの河川は、扇中央部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、その他の埋没谷による緩やかな起伏があり、その景観は、櫛で挽いた如くである。

寄居面は、櫛挽面以降に形成された段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面に区分される。前者は御威稜ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が随所に認められる。さらに、寄居面形成以降、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御威稜ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷堀以西の地域(旧岡部町榛沢地区)である。台地上には、見馴川(小山川)・志戸川、女

堀等の中小河川があり、この河川の流域は、沖積地が形成されている。

妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛挽台地と接する。旧岡部町北部、旧深谷市北部が該当し、低地内では中州的な微高地があり、遺跡の立地にも大きく関連している。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山(標高約117m)・諏訪山丘陵(標高約109m)、櫛挽面に仙元山丘陵(標高約98m)と呼称される残丘上の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持付近では標高140m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45mを測る。この段丘面は、江南面と呼称され、櫛挽面以前に形成されたものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。江南台地上から下段の段丘面(寄居面)にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域には狭小であるが沖積低地が形成されている。

(引用・参考文献)

- 籠瀬良明 1975「自然堤防」古今書院
川本町 1991「川本町史一通史編」
埼玉県 1978「埼玉県市町村誌第14巻一岡部町」
埼玉県 1986「埼玉県史別編3一自然」
深谷市 1969「深谷市史」
" 1980「深谷市史一追補編」
寄居町 1986「寄居町史一通史編」

(2) 歴史的環境

深谷市域における弥生・古墳時代以降の遺跡分布及び河川・丘陵・台地等の地理的条件を勘案すると複数のグルーピングが可能である(註1)。

このうち、熊野遺跡(立堀地区)・お手長山古墳はI地域にあたる(第5~7図)。当地域は、櫛挽台地北縁から妻沼低地(小山川右岸)にかけての範囲であり、中央部を福川が北流する。以下ではI地域に所在する古墳時代以降の遺跡群の動向について触れる。

古墳時代における櫛挽台地北縁部は、重要な古墳・古墳群が数多く調査されている。四十坂遺跡は弥生時代前期末～中期にかけての遺構・遺物群が検出された遺跡として著名であるが、平成2年度に実施された発掘調査では、五領～和泉期にかけての墳墓群が検出された(註2)。当遺跡は四十塚古墳群の範囲にあり、当古墳群における調査例としては最古段階に位置づけられ、現状では古墳群開始の起点となるものである。その後、5世紀末頃には、横刳板鋸留短甲・五鈴付鏡板等の出土で知られる四十塚古墳が成立する(註3)。

当古墳は、現在のところ榛沢郡域最有力の古墳と推定され、郡域において福川上流域の優位性が顕著となる時期である。四十塚古墳群中には、その後6世紀後半段階で寅稻荷塚古墳が築造され(註4)、郡域最有力の古墳群としての位置が継続していることが明確となっている。

また、寅稻荷塚古墳に後続する有力墳として、お手長山古墳が築造される。お手長山古墳は昭和63年度、平成2年度に周溝の調査が実施されており(本報告分)墳形がほぼ確定している。全長49.5mの帆立貝式古墳であり、現状では埴輪が伴わないと考えている。寅稻荷塚古墳とは近接するものの四十塚古墳群の範囲からは逸脱しており、この点は、在地での新たな関係が成立したことに起因するものであろう。

その後、約400m東方に内出八幡塚古墳(円墳33m)が築造される。当古墳は周溝の調査等が継続的に実施されており、墳形及び規模が確定している。また、古墳削平(昭和8年)の際の詳細な記録(註5)から石室、出土遺物の状況等が明確となっている。当古墳の時期については7世紀前半代と考えられる。

愛宕山古墳は、内出八幡塚古墳の東北約1.2kmに位置する。発掘調査等は実施されていないが、現在の墳形から終末期方墳と考えられる(註6)。

規模は一辺37mである。また、普濟寺～岡部地区に所在する上原古墳群では、終末期古墳2基の調査例がある(註7)。

四十塚古墳→寅稻荷塚古墳→お手長山古墳→内出八幡塚古墳→愛宕山古墳と有力古墳が継続的に築造される状況から櫛挽台地北縁部は、古墳時代在地首長層の伝統的勢力基盤であったことが明確な地域である。

この他、1地域内の古墳群として上敷免古墳群、

戸森古墳群、普濟寺古墳群等がある。上敷免古墳群では、明治42～43年に円筒・人物埴輪・土師器・須恵器等が出土している(註8)。この他、昭和60年～62年にかけて、国道17号線深谷バイパス建設予定地の発掘調査が実施され、古墳時代前期の方形周溝墓及び古墳跡が検出されている。古墳跡は径44m(推定)の大型円墳である(註9)。戸森古墳群中に所在する戸森松原遺跡では、和泉期後半～鬼高期にかけての墳墓群13基が検出された。墳丘は残存せず、周溝のみの調査であったが方形→円形へと墳形が推移する状況が確認されている(註10)。普濟寺古墳群は、台地末端に所在する。大正10年に馬形埴輪等が出土した(註11)。この他、堂山古墳は、径31mと推定される円墳であり勾玉等の出土が伝えられている(註12)。

また、榛沢郡正倉に比定される中宿遺跡からも下層より方墳跡が調査されている。規模は一辺が14m程であり、出土土器は和泉期前半に位置づけられる(註13)。

古墳時代の集落跡の調査例も近年増加しつつある。古墳時代前～中期の集落跡として戸森松原遺跡、起会遺跡(註14)、矢島南遺跡(註15)、深谷町遺跡(註16)、森下遺跡(註17)、岡部条里遺跡(註18)、砂田前遺跡(註19)、戸森前遺跡(註20)、上敷免遺跡等がある。これらの集落は、比較的小規模なものであるが、上敷免、砂田前、岡部条里遺跡などの集落跡は、後期初頭頃にいたり規模を拡大する。また、深谷市高畑付近は、土師器片が広域に採集でき、大規模な集落遺跡の存在が予測される(註21)。

古墳後期の集落跡として、前代から継続するものの他、上宿遺跡(註22)、中宿遺跡、町田西遺跡(註23)等があげられる。

飛鳥時代後半(7世紀後半)には、櫛挽台地上に熊野遺跡が成立する。当遺跡は、初期評家と推定される遺跡であり、成立当初から大規模な掘立柱建物群や石組井戸、連房式鍛冶工房、道路遺構など傑出した遺構群が成立し、畿内産土師器が多量に搬入されるなど大きな変化がなされた時期である。畿内産土師器の年代観は7世紀第3四半期であり、熊野遺跡の成立時期もこの頃である。熊野遺跡では、7世紀末～8世紀初頭頃には堅穴住居跡主体の集落遺跡へと変化する。この頃の評・郡家は、中宿遺跡倉庫群南方付近へと移転するものと考えられるが、郡庁院の位置については未確

定である(註24)。

中宿遺跡倉庫群は、概ね4段階の変遷を遂げ、最終段階には、すべて礎石建物となる。倉庫群の終焉の時期は明確ではないが、10世紀後半段階には倉庫群内に集落跡が形成されることから、この時期には確実に廃絶されたものと考えられる。倉庫群が最も整備される時期は、8世紀後半頃であろう。

中宿遺跡に隣接する岡麿寺(註25)は、軒丸瓦の年代観から8世紀前半頃の創建と考えられる。遺構としては、掘込地業を伴う礎石建物跡が検出されているが、伽藍配置は不明である。

熊野・中宿・岡麿寺は、櫛挽台地上にあり、榛沢評・郡家及びその周辺を象徴する官衙・寺院遺跡であるが、これらを取り巻くように集落遺跡も展開する。白山(註26)・新田(註27)・上宿・塚東遺跡(註28)などが、その代表的遺跡である。

また、榛沢評・郡家関連遺跡から1.2km東方に位置する菅原遺跡(註29)では、平安時代の集落跡の他、10世紀代と推定される半地下式堅型炉が構築され、鉄生産の拠点的位置を占める。この時期、官衙の衰退・終焉と呼応するように、郡内各所に鉄生産の拠点的位置を占める遺跡が形成されることは、古代榛沢郡の大きな特徴のひとつである。

(註)

- 1 詳細については深谷市教育委員会2006「下道南遺跡」を参照されたい。
- 2 岡部町遺跡調査会2003「四十坂遺跡」
- 3 岡部町教育委員会2005「四十塚古墳の研究」
- 4 埼玉県立本庄高等学校考古学部1975「いぶき8・9合併号」
岡部町教育委員会2001「町内遺跡Ⅱ」
- 5 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 6 埼玉県立本庄高等学校考古学部1975「いぶき8・9合併号」
深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 7 岡部町遺跡調査会1986「上原遺跡」
- 8 塩野博2004「埼玉の古墳」さきたま出版会
- 9 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993「上敷免遺跡」
- 10 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1995「森下・戸森松原・起会」
- 11 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 12 〃
- 13 岡部町教育委員会1995「中宿遺跡-推定榛沢郡正倉跡の調査」
岡部町遺跡調査会1997「中宿遺跡Ⅱ」
岡部町教育委員会1999「中宿遺跡Ⅲ」
- 14 註10に同じ。
- 15 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994「矢島南遺跡」
- 16 深谷市教育委員会1985「深谷町遺跡」
- 17 註10に同じ。
- 18 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999「岡部条里/戸森前」
- 19 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991「樋詰・砂田前遺

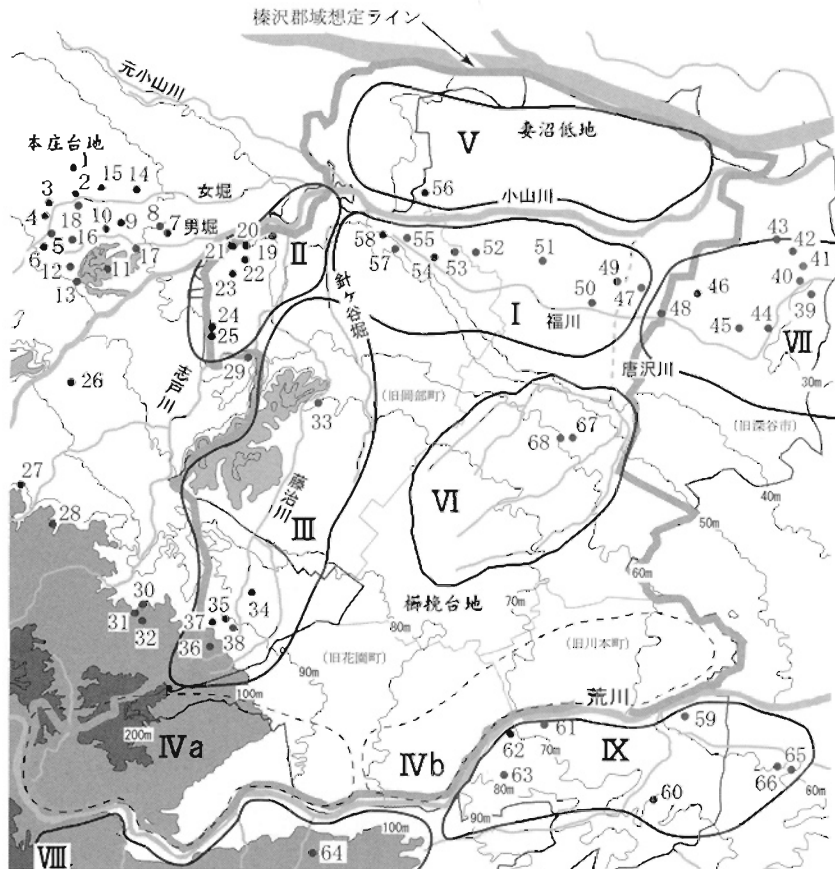
さらに、菅原遺跡より、東方3kmにある花小路遺跡(註30)も台地末端に位置する遺跡であるが、9世紀後半~10世紀にかけて堅穴住居跡、仏堂施設と推定される掘立柱建物跡等が検出されており、菅原遺跡例とあわせて、在地社会の構造的変化を象徴する現象と把握したい。

一方、妻沼低地上では、中宿遺跡直下の滝下遺跡において、従来の河川を大規模に掘削したと推定される河川跡(滝下河川跡)が検出されている(註31)。掘削時期は7世紀末~8世紀初頭である。河川跡からの出土遺物として木製農具、祭祀具、鉄滓、土師器・須恵器等が検出されている。

また、岡部条里遺跡では、7世紀後半頃には、正方位より30度ほど触れる斜行溝が掘削されており、8世紀中頃には、条里型地割が確認できる。8世紀後半段階には条里型地割内に居宅跡が確認できる。

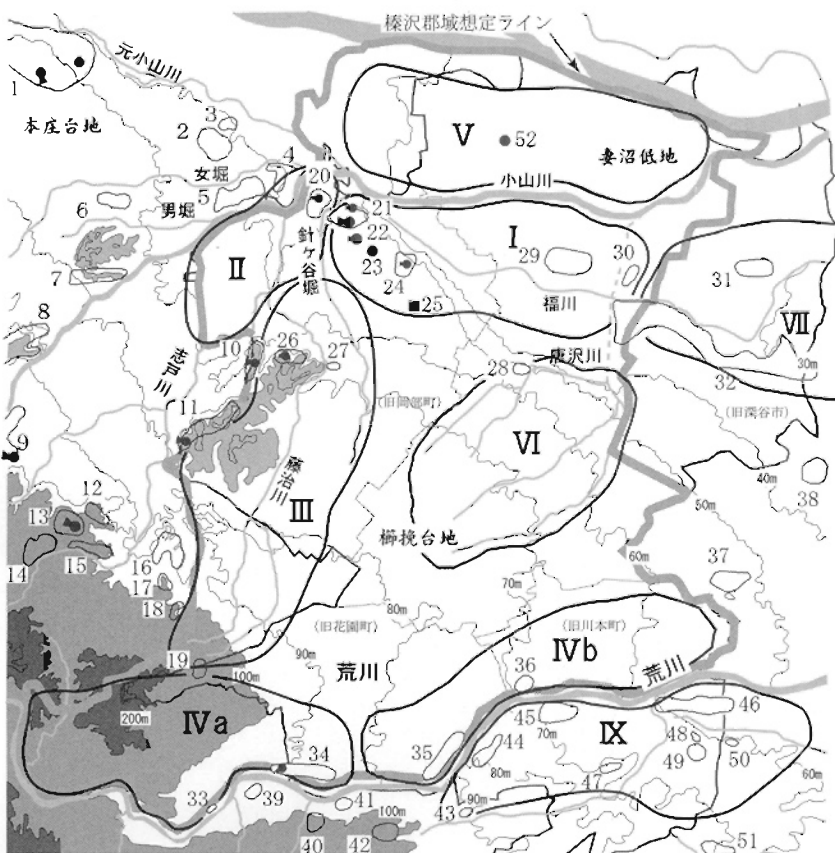
この他、矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、上敷免遺跡、上敷免森下遺跡(註32)等で、当該期の集落跡、条里型地割が検出されている。

- 跡」
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「砂田前遺跡」
- 20 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999「岡部条里/戸森前」
- 21 平成18年度深谷市教育委員会にて調査。
- 22 岡部町遺跡調査会2005「上宿遺跡A地点」
岡部町遺跡調査会2005「上宿遺跡B地点」
岡部町遺跡調査会1998「上宿遺跡F地点」
- 23 深谷市教育委員会1995「町田西遺跡」
- 24 岡部町遺跡調査会2000「熊野遺跡Ⅰ」
岡部町遺跡調査会2003「熊野遺跡Ⅱ」
岡部町教育委員会2004「熊野遺跡Ⅲ」
岡部町遺跡調査会2004「熊野遺跡Ⅳ」
深谷市教育委員会2006「熊野遺跡Ⅴ」
- 25 深谷市教育委員会2006「岡部町史-原始・古代資料編」
- 26 岡部町教育委員会2005「町内遺跡Ⅵ」
- 27 埼玉県教育委員会1989「白山遺跡」
岡部町教育委員会2004「町内遺跡Ⅶ」
深谷市教育委員会2006「白山遺跡Ⅱ」
- 28 岡部町遺跡調査会1991「新田遺跡」
岡部町遺跡調査会1999「新田遺跡Ⅱ」
埼玉県埋蔵文化財調査事業団2000「熊野/新田」
- 29 岡部町遺跡調査会2004「塚東遺跡-第1次調査」
- 30 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1996「菅原遺跡」
- 31 平成18年度深谷市教育委員会にて調査実施。
- 32 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993「原ヶ谷戸/滝下」
岡部町教育委員会1997「滝下遺跡」
- 33 深谷市教育委員会2005「森下遺跡」



第3図 古墳時代後期の遺跡分布（集落跡・その他）

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 社具路遺跡 | 35 用土前峯遺跡 |
| 2 西富田・四方田
条里遺跡 | 36 用土北沢遺跡 |
| 3 地神・塔頭遺跡 | 37 用土台遺跡 |
| 4 今井条里遺跡 | 38 出羽塚遺跡 |
| 5 後張遺跡 | 39 前遺跡 |
| 6 川越田遺跡 | 40 屋立遺跡 |
| 7 久下前遺跡 | 41 城北遺跡 |
| 8 久下東遺跡 | 42 柳町遺跡 |
| 9 七色塚遺跡 | 43 砂田遺跡 |
| 10 下田遺跡 | 44 東川端遺跡 |
| 11 大久保山遺跡 | 45 宮ヶ谷戸遺跡 |
| 12 飯玉東遺跡 | 46 新屋敷東/本郷前
遺跡 |
| 13 雷電下遺跡 | 47 上敷免遺跡 |
| 14 笠ヶ谷戸遺跡 | 48 八日市遺跡 |
| 15 雄堀遺跡 | 49 森下遺跡 |
| 16 四方田遺跡 | 50 戸森前遺跡 |
| 17 東谷遺跡 | 51 起会遺跡 |
| 18 九反田遺跡 | 52 矢島南遺跡 |
| 19 六反田遺跡 | 53 樋詰遺跡 |
| 20 桶荷塚遺跡 | 54 岡部条里遺跡 |
| 21 大寄遺跡 | 55 砂田前遺跡 |
| 22 西浦北遺跡 | 56 町田西遺跡 |
| 23 宮西遺跡 | 57 中宿遺跡 |
| 24 石崎遺跡 | 58 上宿遺跡 |
| 25 地神紙遺跡 | 59 鹿島遺跡 |
| 26 樋の口遺跡 | 60 権現堂遺跡 |
| 27 ミカ神社前遺跡 | 61 川端遺跡 |
| 28 宇佐久保遺跡 | 62 如意・如意南 |
| 29 白欠遺跡 | 63 畠山館跡 |
| 30 鍛冶尾峯遺跡 | 64 むじな塚遺跡 |
| 31 川向遺跡 | 65 宮下遺跡 |
| 32 森後遺跡 | 66 権現堂遺跡 |
| 33 柳原遺跡 | 67 割山遺跡 |
| 34 南藤田遺跡 | 68 割山西遺跡 |



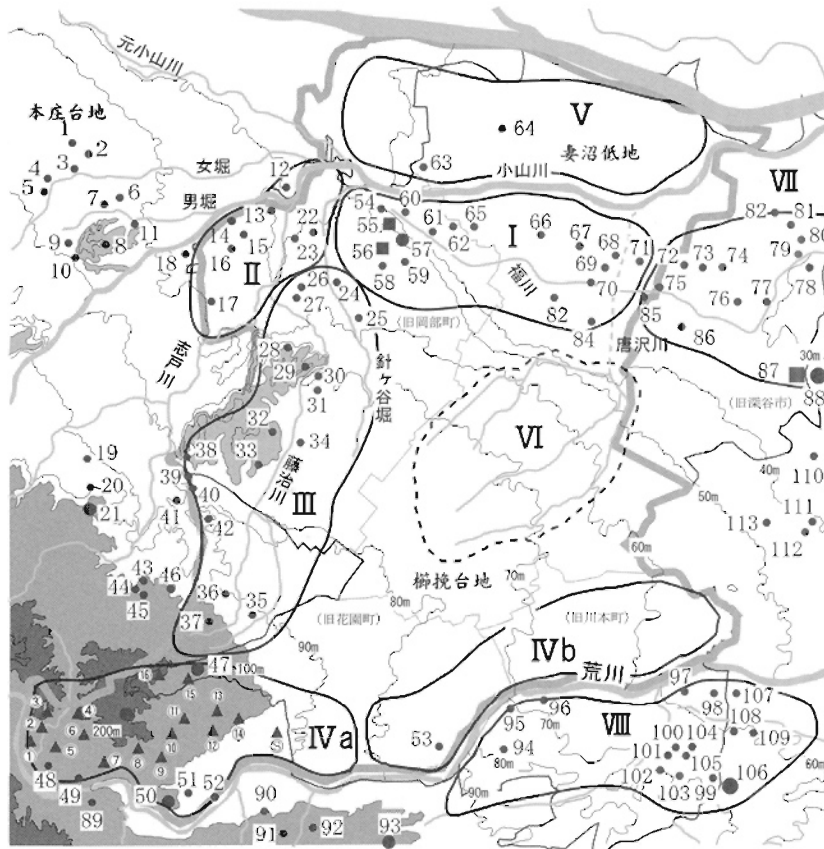
第4図 古墳時代後期の遺跡分布（古墳・古墳群）

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 旭・小島古墳群 | 27 茶臼山古墳群 |
| 2 塚合古墳群 | 28 菅場古墳群 |
| 3 御堂坂古墳群 | 29 戸森古墳群 |
| 4 東五十子遺跡
(古墳群) | 30 上敷免古墳群
(古墳群) |
| 5 西五十戸古墳群 | 31 上増田古墳群 |
| 6 東富田古墳群 | 32 木ノ本古墳群 |
| 7 塚本山古墳群 | 33 樋ノ下古墳群 |
| 8 生野山古墳群 | 34 小前田古墳群 |
| 9 広木大町古墳群 | 35 黒田古墳群 |
| 10 西山古墳群 | 36 見目古墳群 |
| 11 諏訪山古墳群 | 37 三ヶ尻古墳群 |
| 12 中里天神山古墳群 | 38 玉井古墳群 |
| 13 大仏古墳群 | 39 立ヶ瀬古墳群 |
| 14 白石古墳群 | 40 上郷古墳群 |
| 15 羽黒山古墳群 | 41 小園古墳群 |
| 16 普門寺古墳群 | 42 伊勢原古墳群 |
| 17 猪俣北古墳群 | 43 赤浜古墳群 |
| 18 猪俣古墳群 | 44 箱崎古墳群 |
| 19 飯塚古墳群 | 45 塚原古墳群 |
| 20 原ヶ谷戸古墳群 | 46 鹿島古墳群 |
| 21 四十塚古墳群 | 47 上大塚古墳群 |
| 22 お手長山古墳 | 48 平方前古墳群 |
| 23 内出入幡塚古墳 | 49 清水山古墳群 |
| 24 白山古墳群 | 50 姥ヶ沢古墳群 |
| 25 愛宕山古墳 | 51 板井古墳群 |
| 26 千光寺古墳群 | 52 下手計西裏遺跡 |

(注)

榛沢郡域を示すラインは近世の郡域を参照したものである。古代では、自然条件その他の関係で、異なる部分があったと推定される。特に、利根川流域は、利根川・烏川等の乱流により近世以前の国境(郡境)は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流動的である。

0 5km



- | | |
|-----------|--------------|
| 1 社具路遺跡 | 58 新田遺跡 |
| 2 南大通線内遺跡 | 59 白山遺跡 |
| 3 西富田遺跡 | 60 砂田前遺跡 |
| 4 地神・塔頭遺跡 | 61 岡部奈里遺跡 |
| 5 今井奈里遺跡 | 62 樋詰遺跡 |
| 6 七色塚遺跡 | 63 町田西遺跡 |
| 7 下田遺跡 | 64 下手計西浦遺跡 |
| 8 大久保山遺跡 | 65 矢島南遺跡 |
| 9 飯玉東遺跡 | 66 起合遺跡 |
| 10 雷電下遺跡 | 67 戸森松原遺跡 |
| 11 東谷遺跡 | 68 森下遺跡 |
| 12 東五十子遺跡 | 69 血沼西遺跡 |
| 13 六反田遺跡 | 70 戸森前遺跡 |
| 14 大寄遺跡 | 71 上敷免遺跡 |
| 15 西浦北遺跡 | 72 本郷前東遺跡 |
| 16 宮西遺跡 | 73 新屋敷東遺跡 |
| 17 石壽遺跡 | 74 新田裏遺跡 |
| 18 古川端遺跡 | 75 八日市遺跡 |
| 19 北貝戸遺跡 | 76 宮ヶ谷戸遺跡 |
| 20 木部原遺跡 | 77 東川端遺跡 |
| 21 大仏庵寺 | 78 前遺跡 |
| 22 水窪遺跡 | 79 居立遺跡 |
| 23 新井遺跡 | 80 城北遺跡 |
| 24 下道南遺跡 | 81 柳町遺跡 |
| 25 西龍ヶ谷遺跡 | 82 砂田遺跡 |
| 26 中南遺跡 | 83 花小路遺跡 |
| 27 地福院遺跡 | 84 深谷城跡遺跡 |
| 28 千光寺遺跡 | 85 城西遺跡 |
| 29 石原山瓦窯跡 | 86 社前遺跡 |
| 30 西谷遺跡 | 87 幡羅遺跡 |
| 31 柳原遺跡 | 88 西別府庵寺 |
| 32 藤ノ木遺跡 | 89 折原石道遺跡 |
| 33 寺山遺跡 | 90 甘粕原遺跡 |
| 34 伊勢方遺跡 | 91 露梨子遺跡 |
| 35 出羽塚遺跡 | 92 むじな塚遺跡 |
| 36 用土前峯遺跡 | 93 東伴場地遺跡 |
| 37 用土北沢遺跡 | 94 島山重忠館跡 |
| 38 北坂遺跡 | 95 如意/如意南遺跡 |
| 39 平原遺跡 | 96 川端遺跡 |
| 40 沼下遺跡 | 97 鹿島遺跡 |
| 41 中山遺跡 | 98 鹿島平方裏遺跡 |
| 42 甘粕山遺跡 | 99 百済木遺跡 |
| 43 鍛冶屋峯遺跡 | 100 竹之花遺跡 |
| 44 川向遺跡 | 101 白草遺跡 |
| 45 森後遺跡 | 102 円阿弥遺跡 |
| 46 上野遺跡 | 103 西反歩北・東遺跡 |
| 47 吉野庵寺 | 104 荷鞍ヶ谷戸遺跡 |
| 48 城見上遺跡 | 105 諺光寺庵寺 |
| 49 箱石遺跡 | 106 寺内庵寺 |
| 50 寄居庵寺 | 107 新田裏遺跡 |
| 51 大正寺南遺跡 | 108 西原遺跡 |
| 52 樋ノ下遺跡 | 109 富士山遺跡 |
| 53 台耕地遺跡 | 110 龍原裏遺跡 |
| 54 上宿遺跡 | 111 樋之上遺跡 |
| 55 中宿遺跡 | 112 辻遺跡 |
| 56 熊野遺跡 | 113 三ヶ尻遺跡 |
| 57 岡庵寺 | |

第5図 飛鳥~奈良/平安時代の主要遺跡分布

(注1)
 榛沢郡域を示すラインは近世の郡域を参照したものである。
 古代では、自然条件その他の関係で、異なる部分があったと推定される。
 特に、利根川流域は、利根川・鳥川等の乱流により近世以前の国境(郡境)は大きく変動している。したがって地域区分Vの範囲は流動的である。

(注2)
 第13図のうち▲は末野窯跡群支群の位置を、○付数字は支群番号を示す。
 ◎は、桜沢支群を意味する。



Ⅲ 熊野遺跡（立堀地区）の調査

（1）発掘調査地点の位置

発掘調査地点は、深谷市岡2003番地である。

小字名は立堀であり、このことから当初は立堀遺跡として調査を実施した。ただし、本調査区は、熊野遺跡の範囲にあたり埼玉県遺跡登録番号は、No.63-17であることから、今回の報告では、熊野遺跡「立堀地区」と呼称することとする。熊野遺跡では、数多くの調査が実施されており、本調査区の南部には、昭和52～53年度調査地点（岡部西小学校敷地内）が、東部には、岡中央土地区画整理事業地があり、多種・多様な遺構・遺物が検出されている。

また、発掘調査地点に隣接して、深谷市指定史跡「お手長山古墳」が存在しており、本調査と併行して確認調査が実施されている。周溝が確認されており、昭和63年度の個人住宅建設に伴う発掘調査成果と併せ墳形が確定している。

（2）調査の経過

発掘調査は、平成2年11月1日から12月27日にかけて実施した。調査地点は、A、B、Cの3地点ある。A地点は850㎡、B地点は145㎡、C地点は75㎡の面積を有す。発掘調査地点の分割は、当初の開発予定地が3箇所に分散していることによる。

調査地周辺は、砂利敷の簡易舗装を行う計画であり、遺構、包含層には影響を及ぼさない工事であると判断し、調査対象から除外した。また、調査対象地域とはならないが、申請地域内には市指定文化財（当時は町指定）「お手長山古墳」の周溝が存在することが予想されたことから、この確認調査についても事業者の了承を得、併せて実施することとなった。周溝確認のためのトレンチは3ヶ所に設定した。調査は、まず立堀地区A～C地点の表土除去作業から開始した。表土除去にはバックホー0.4を使用した。遺構確認面は、地表から30～50cm下層のソフトローム層とし、引き続きお手長山古墳周溝のトレンチについてもバックホーによる掘り下げを行った。

表土除去及びトレンチ掘削後、遺構確認作業を行った。A～C地点及びトレンチの遺構確認作業は、3日ほどの期間を要し終了した。

この結果、竪穴住居跡3軒、竪穴遺構5基、土

堀37基、溝7条、ピット等が検出された。

これらの遺構については、断面図及び遺構分布図作成と併行させながら掘り下げを行い、11月末には、終了した。その後、遺構図の作成、カマドの掘り下げ等を行い、12月27日には、発掘作業の全行程が終了した。

（3）発見された遺構と遺物

A. 竪穴住居跡

本調査では、3軒が検出されている。出土遺物はいずれも豊富である。住居跡の時期については、9世紀後半～10世紀前半代と思われる。

【1号住居跡】

A区西端のB～C-2グリッドに位置する。長軸は4.02m、短軸は3.72mである。主軸方位は、N-98°-Eである。確認面から床面までの深さは12cmである。床面は若干の凹凸がある。床にはピットが検出されているが、明確な支柱穴は確認できなかった。5号溝との切合い関係を有しており本遺構が古いことが判明している。

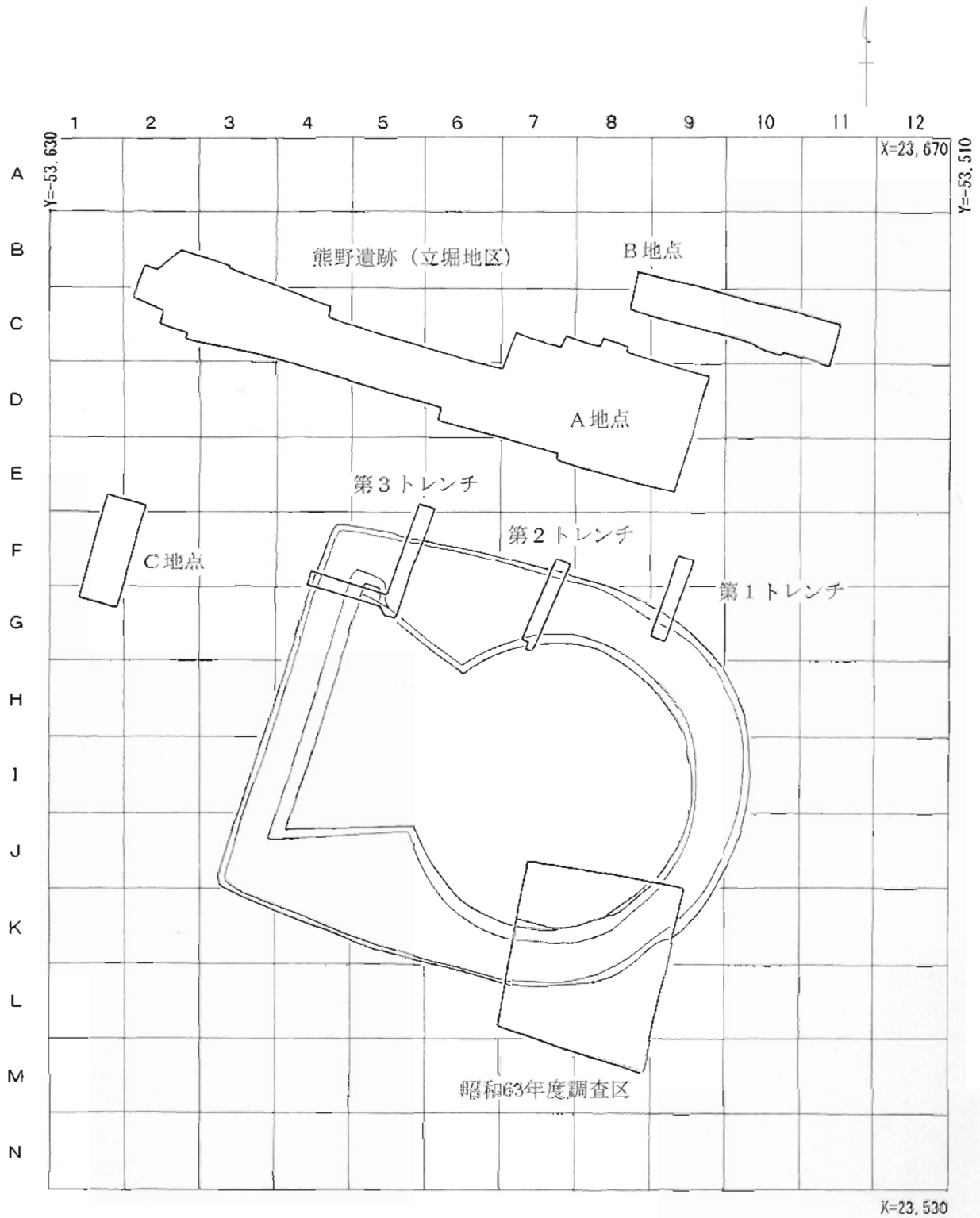
カマドは、東壁北よりを1.2m掘り込んで構築されている。袖については、確認できなかった。カマド構築材として埴輪片が多量に使用されていた。出土した土器類は、時期の幅が大きく、年代比定の明確な根拠を欠くが、主要な遺物から9世紀末～羽釜出現期の10世紀前半頃と推定する。

【2号住居跡】

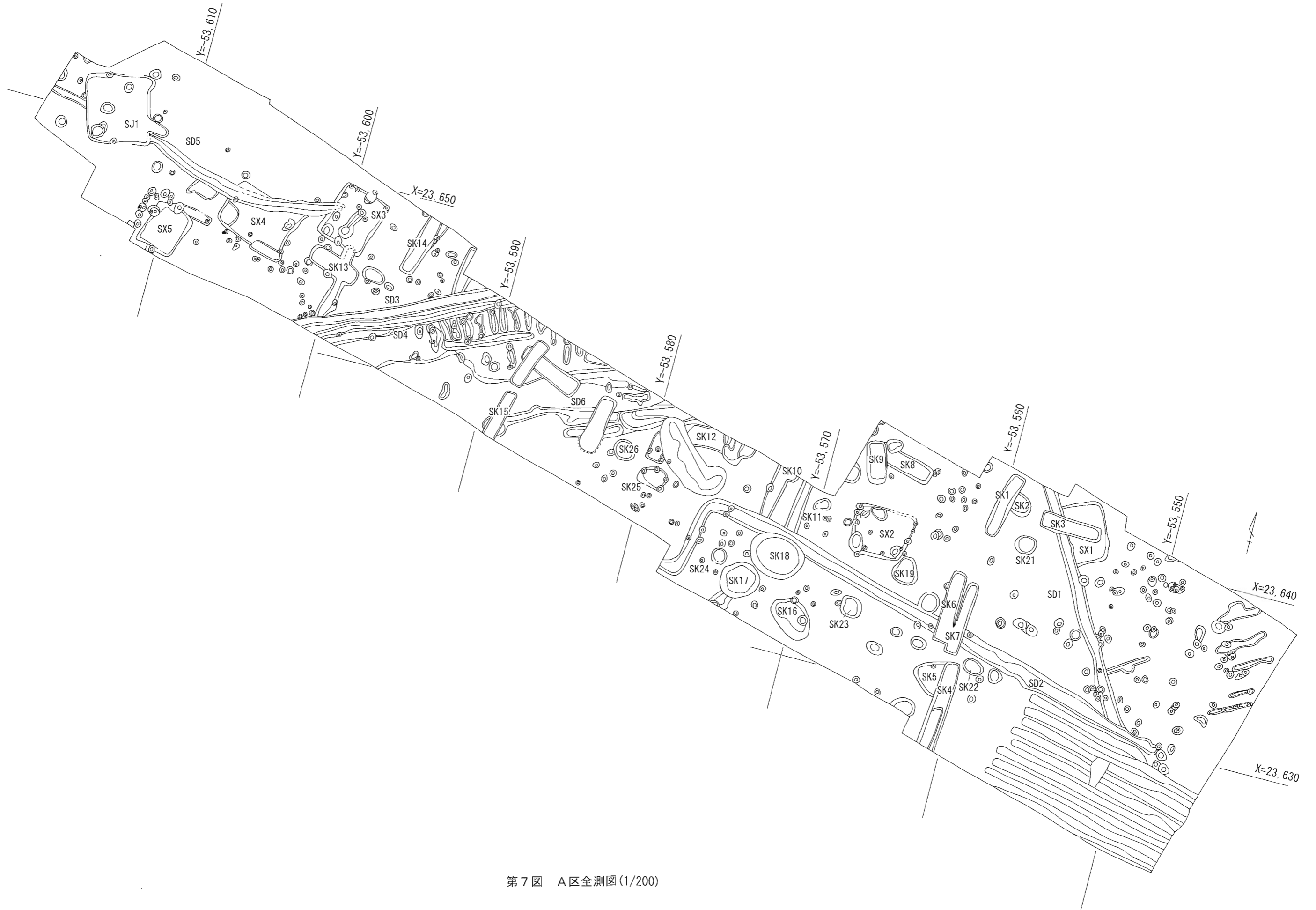
B区中央のC-10グリッドに位置する。長軸は3.42m、短軸は2.34mである。主軸方位は、N-70°-Eである。確認面から床面までの深さは16～30cmである。床面は、ほぼ平坦である。明瞭な支柱穴は確認できなかったが、しっかりとした壁溝が周囲を巡る。他の遺構との切合い関係は無い。

カマドは、東壁やや南よりに24cm掘り込み構築されている。前庭部にはピット及び土壌が検出されており、カマドに関わる施設と考えられる。

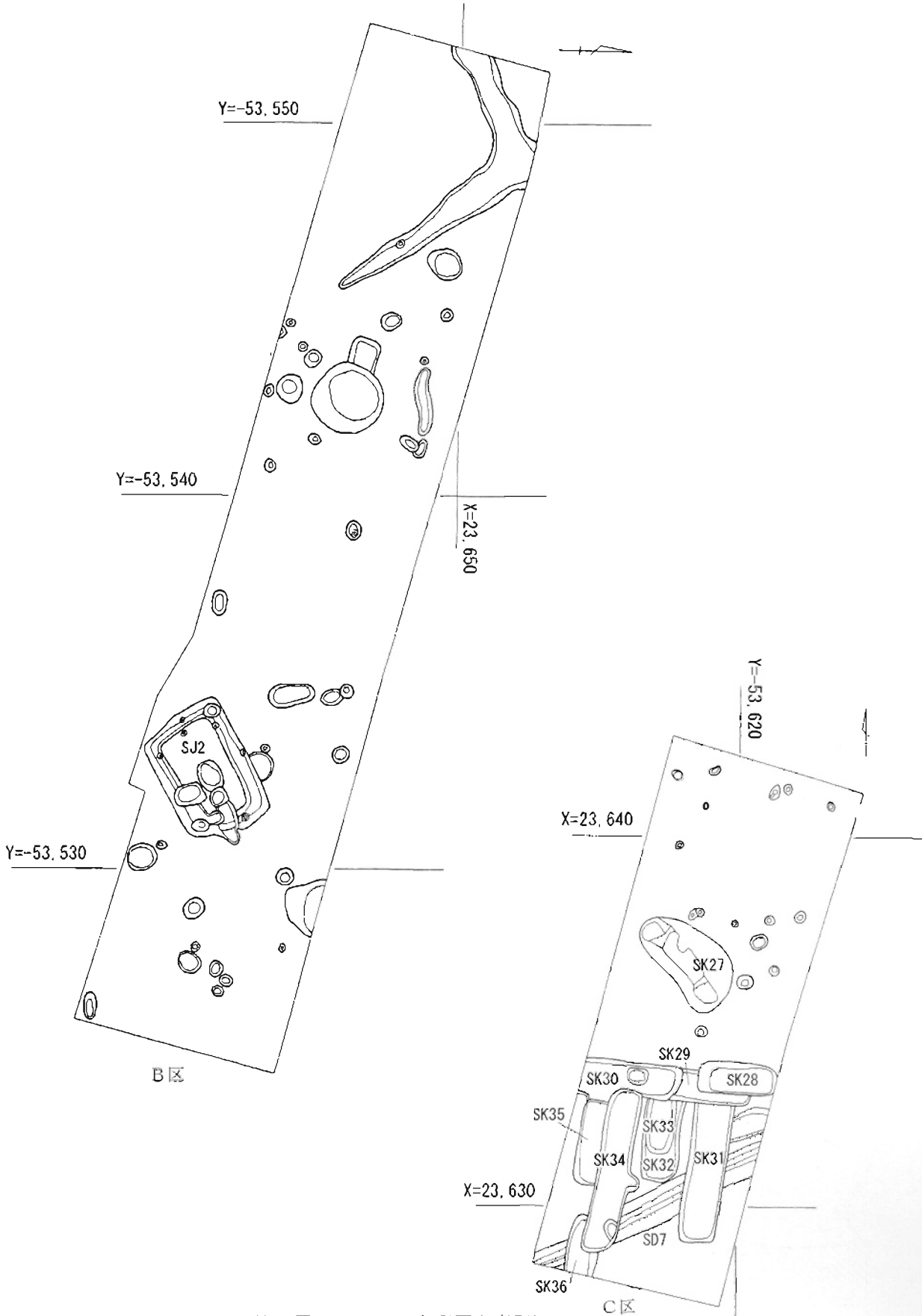
遺物は住居内から比較的多く検出されている。土師器、須恵器の土器類の他に、砥石、鉄製品（釘?）、磨石が検出された。



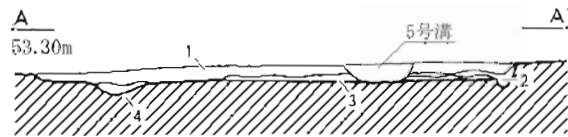
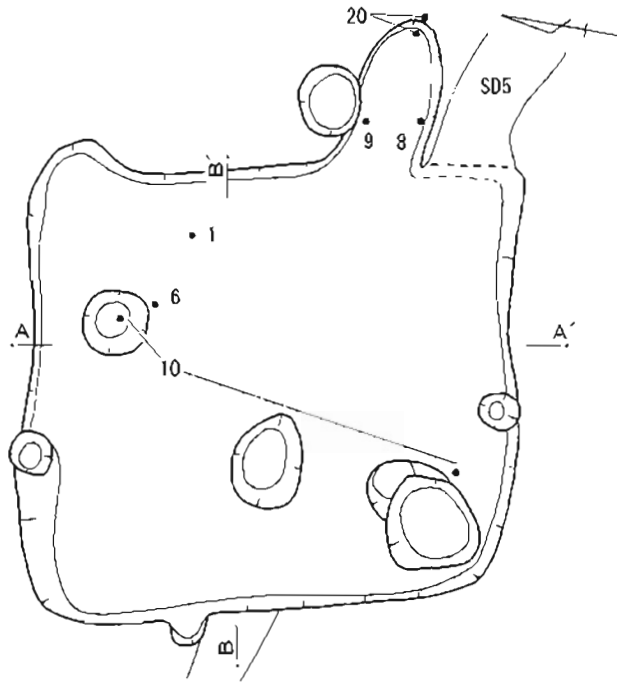
第6図 グリッド配置図(1/800)



第7图 A区全测图(1/200)



第 8 图 B · C 区全测图 (1/150)

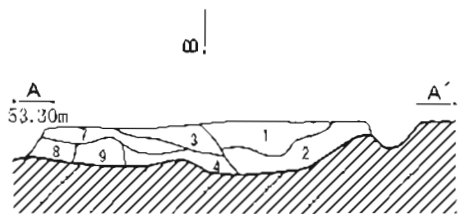
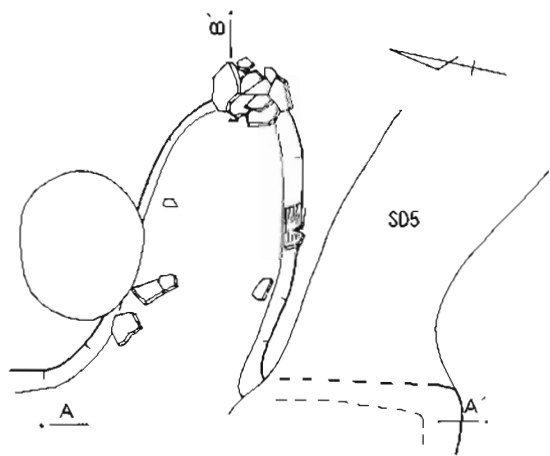


第9図 1号竖穴住居跡

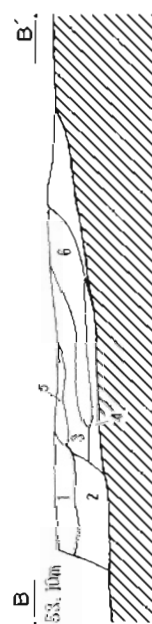


【1号住居跡土層説明】

- 1 黒褐色土 ローム粒、白色バミス多量含む。
- 2 " " ローム粒、焼土粒、炭化物粒少量含む
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。やや硬質。
- 4 " " ロームブロック少量含む。軟質。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロック少量含む。



第10図 1号竖穴住居跡カマド

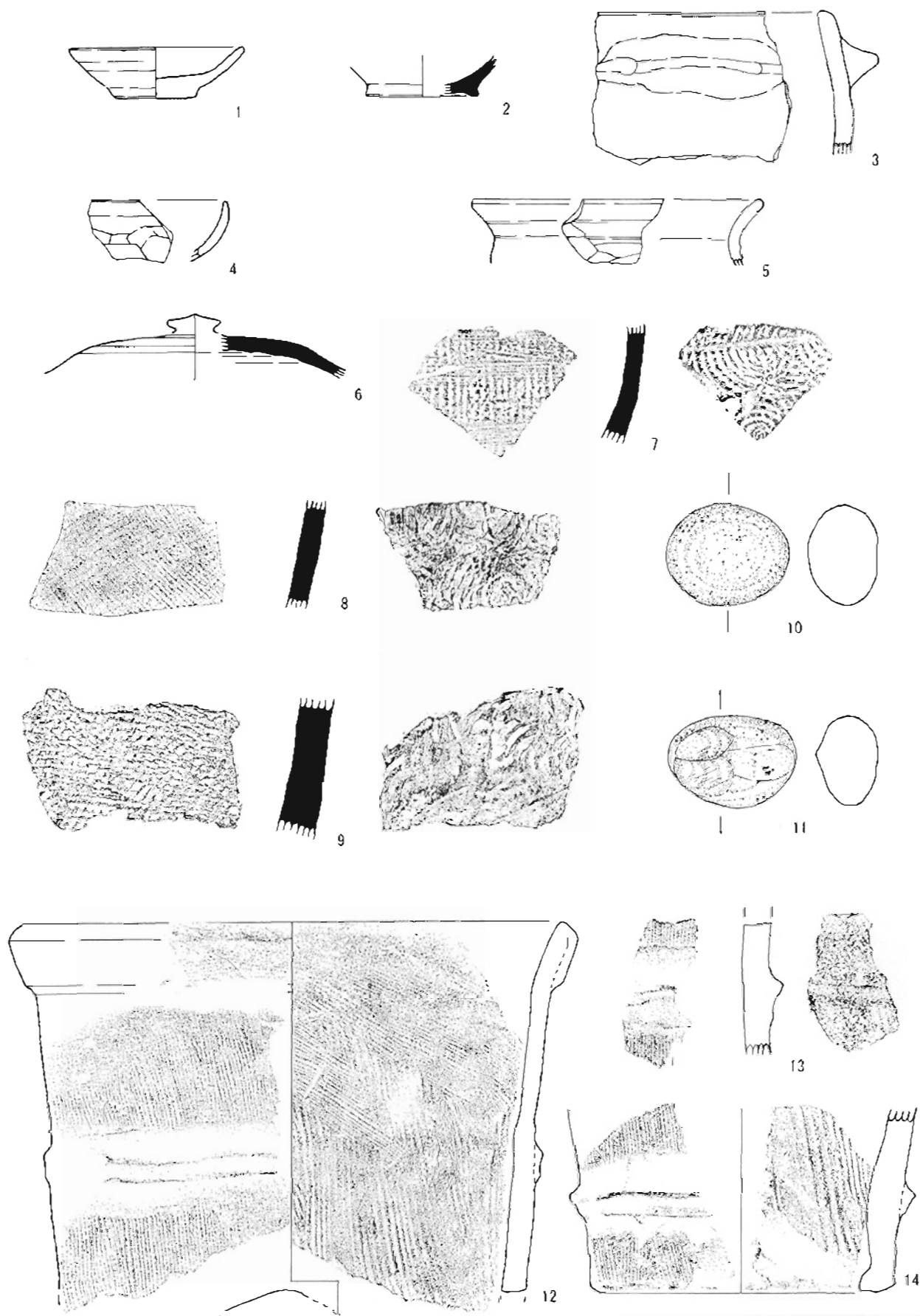


【1号住居跡カマド土層説明】

- 1 暗灰褐色土 浅間A軽石を主体とする。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒少量、炭化物粒若干含む。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒若干含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒、焼土粒多量含む。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒少量含む。
- 6 黒褐色土 浅間A軽石、ロームブロック少量含む。
- 7 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒少量含む。
- 8 暗茶褐色土 ローム粒多量、炭化物、灰白色粘土粒少量含む。
- 9 暗灰褐色土 粘土ブロック主体。焼土粒、黒色土粒若干含む。カマド袖の一部。

※1、2層は、5号溝覆土

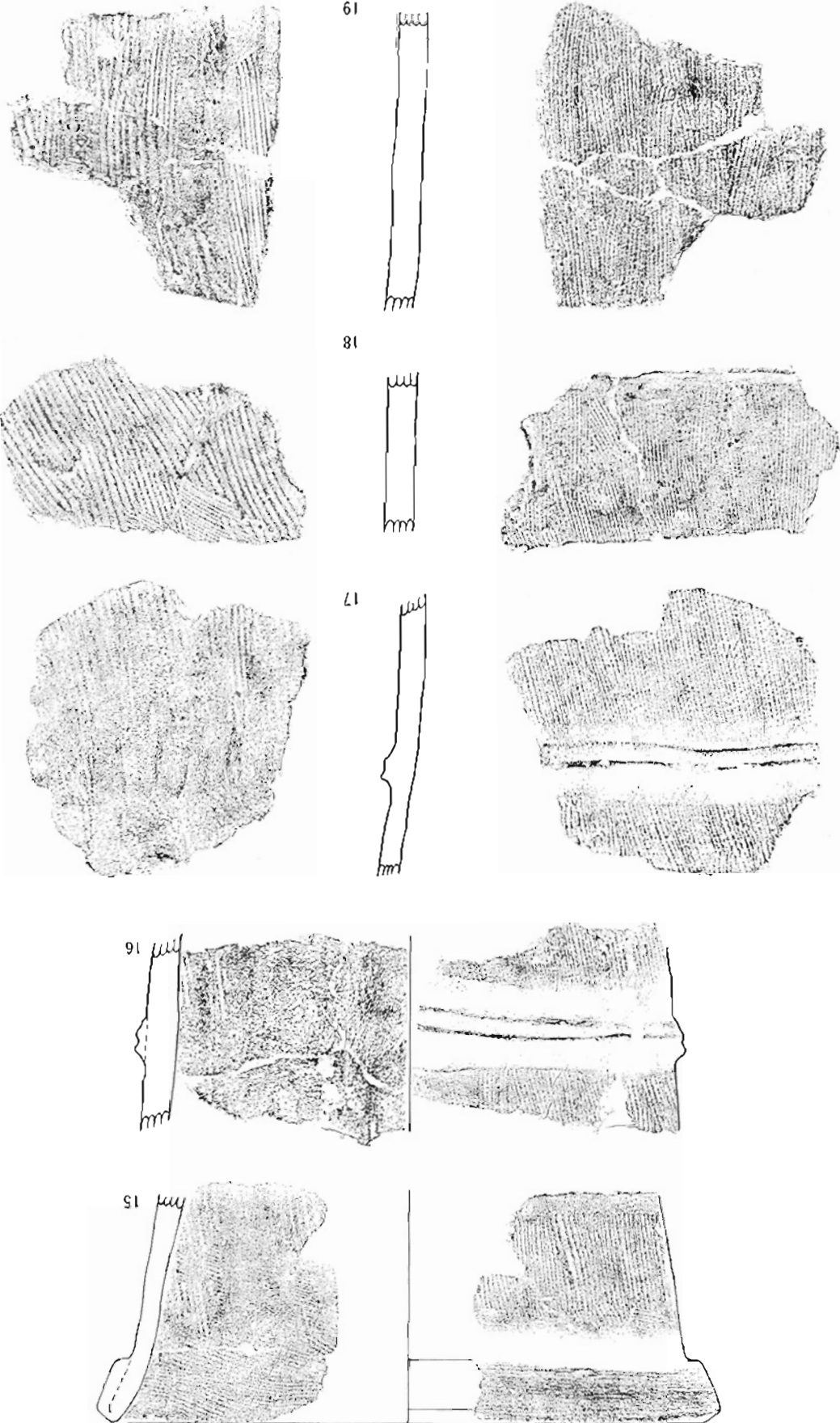


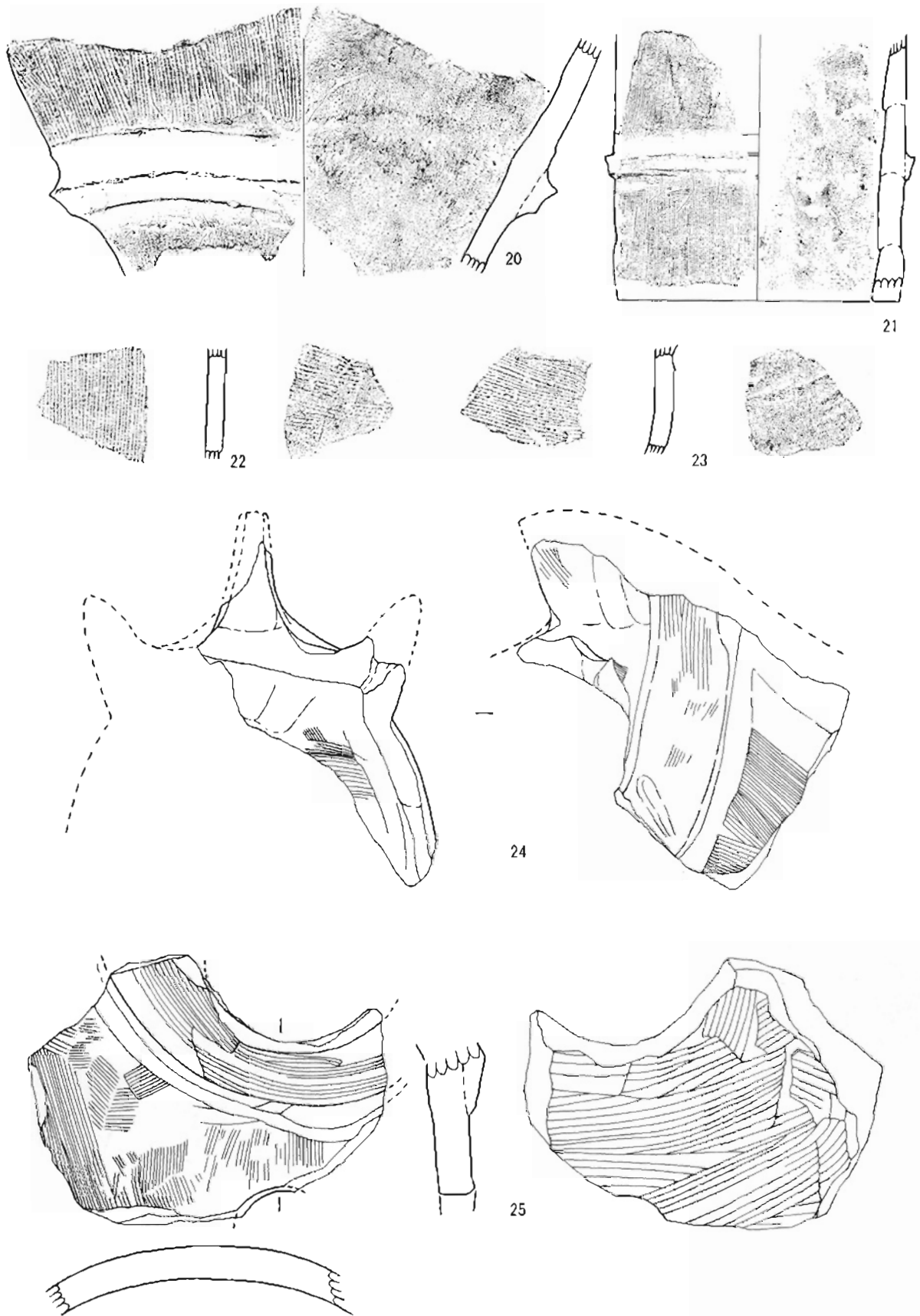


第11图 1号竖穴住居跡出土遺物(1)

第12圖 1号壑穴住居跡出土遺物 (2)

0 10cm





第13图 1号竖穴住居跡出土遺物(3)

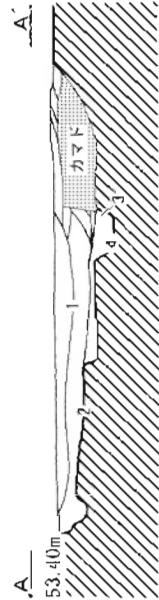
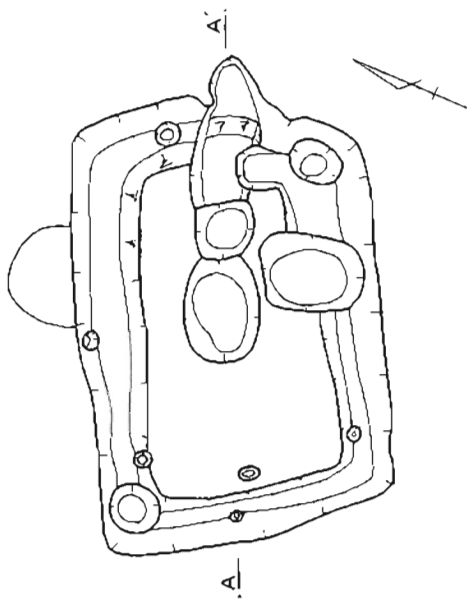
0 10cm

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小皿	(9.0)	2.7	4.4	灰黄褐色	普通	石英、雲母、微砂粒、酸化鉄粒	図示45%	図示、底部回転系切り未調整
2	高台埴	-	《2.1》	(5.8)	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	覆土
3	羽釜	-	-	-	暗赤褐色	やや悪	石英、角閃石、チャート、長石	破片	図示、外面に煤付着
4	坏	-	-	-	淡橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示7%	図示
5	甕	(15.0)	《3.5》	-	橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示10%	覆土
6	蓋	-	-	-	灰色	良好	石英、片岩、白色粒	図示30%	図示
7	甕	-	-	-	灰白色	やや悪	石英、黒色粒	破片	カマド、平行+回転ナデ、内面青海波
8	甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	カマド、外面平行、内面青海波
9	甕	-	-	-	暗灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	カマド、外面平行、内面青海波
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	-	石材	残存率	備考
10	磨り石	6.4cm	5.4cm	3.7cm	107.8g	-	角閃安山岩	100%	図示、楕円状で全面磨耗
11	磨り石	6.7cm	4.8cm	3.5cm	74.4g	-	角閃安山岩	100%	図示、楕円状で全面磨耗

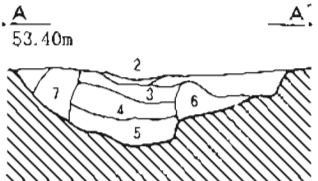
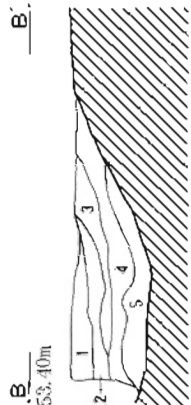
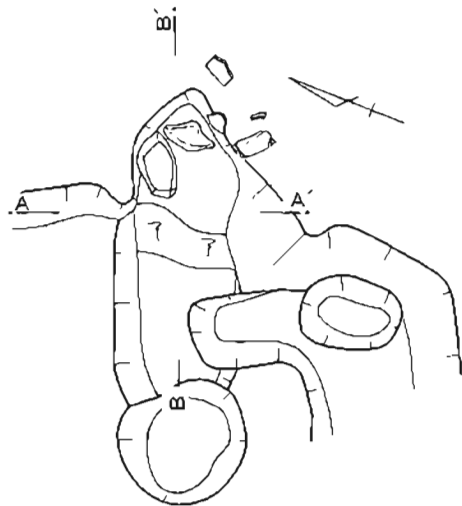
1号住居跡出土埴輪観察表

番号	種別	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	残存率	備考
12	円筒	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	縦ハケ6本/cm、 口縁横ハケ	斜位ハケ6本/cm 縦3本/cm	図示20%	カマド内
13	円筒	明赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、パミス	縦ハケ6本/cm	縦ハケ後ナデ	破片	覆土
14	円筒	明茶褐色	良好	石英、角閃石、長石、パミス	縦ハケ6本/cm、ナデ	縦ハケ3本/cm	図示15%	覆土
15	円筒	灰赤褐色	良好	石英、角閃石、パミス、砂粒	縦ハケ6本/cm、 口縁横ハケ	斜位ハケ6本/cm、 縦4本/cm	図示15%	覆土
16	円筒	明赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、砂粒	縦ハケ6本/cm	縦ハケ4本/cm	図示20%	カマド内
17	円筒	明赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、砂粒	縦ハケ6本/cm	縦ハケ3本/cm	破片	カマド内
18	円筒	暗赤褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、パミス	縦ハケ6本/cm	斜位ハケ 3本/cm~6本/cm	破片	図示
19	円筒	橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	縦ハケ6本/cm	縦ハケ4本/cm	破片	カマド内
20	円筒	橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、チャート	縦ハケ6本/cm	斜位ハケ、縦ハケ3本/cm	図示30%	カマド内、朝顔形
21	形象	赤褐色	良好	石英、角閃石、パミス	縦ハケ10本/cm	ナデ	図示15%	カマド内
22	形象	明赤褐色	良好	石英、角閃安山岩粒、パミス	縦ハケ6本/cm	斜位ハケ5本/cm	破片	図示
23	形象	淡赤褐色	良好	石英、角閃石、パミス、砂粒	斜位ハケ6本/cm、ナデ	ナデ	破片	図示
24	形象	暗褐~ 橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、片岩、 パミス	ハケメ6本/cm、指ナデ	ハケメ4本/cm、ナデ	破片	カマド、馬形の鬣
25	形象	橙褐色	普通	石英、角閃安山岩粒、 砂粒(粗い)	ハケメ6本/cm	ハケメ3本/cm	破片	カマド、馬形の鞞



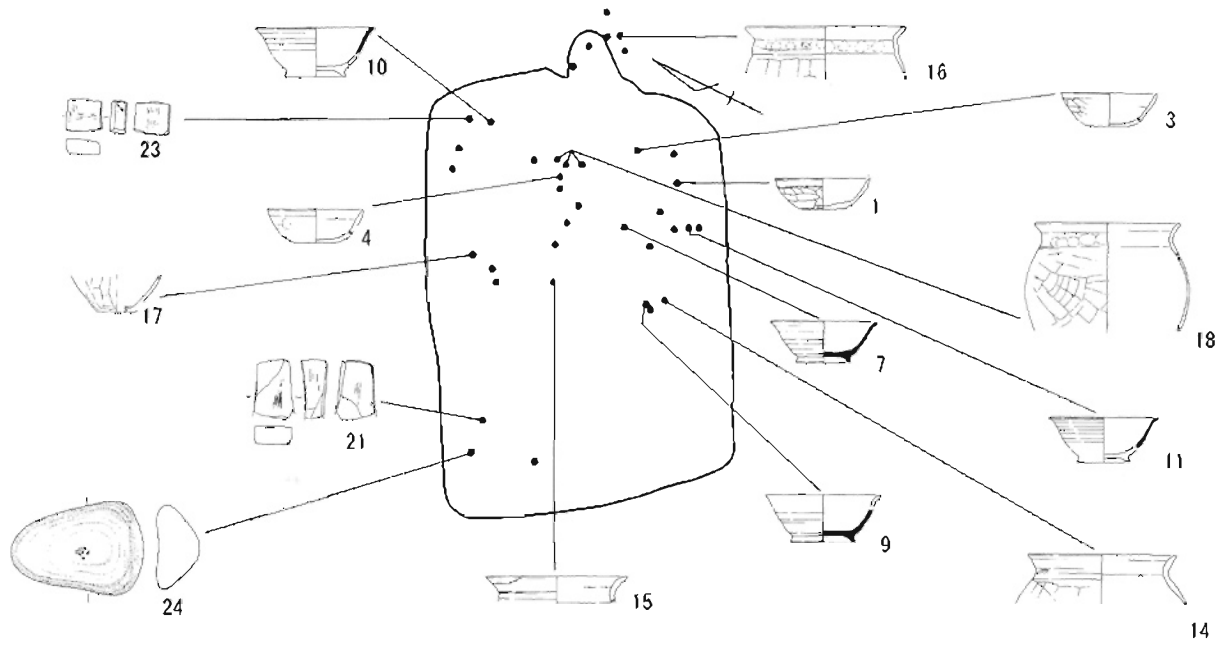
- 【2号住居跡土層説明】
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量
 - 2 暗黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒、炭化物粒少量含む。
 - 3 黒褐色土 焼土ブロック多量、粘土ブロック少量含む。
 - 4 " 炭化物、焼土粒少量含む。
- 0 2m

第14図 2号竪穴住居跡



- 【2号住居跡土層説明】
- 1 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒少量。
 - 2 黒褐色土 ローム粒多量、焼土粒、炭化物粒少量含む。
 - 3 " 焼土ブロック多量、粘土ブロック少量含む。
 - 4 " 炭化物、焼土粒少量含む。
 - 5 " ロームブロック、ローム粒若干含む。
 - 6 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量、粘土ブロック少量含む。
 - 7 " 白色粘土ブロック、焼土ブロック多量含む。
- 0 1m

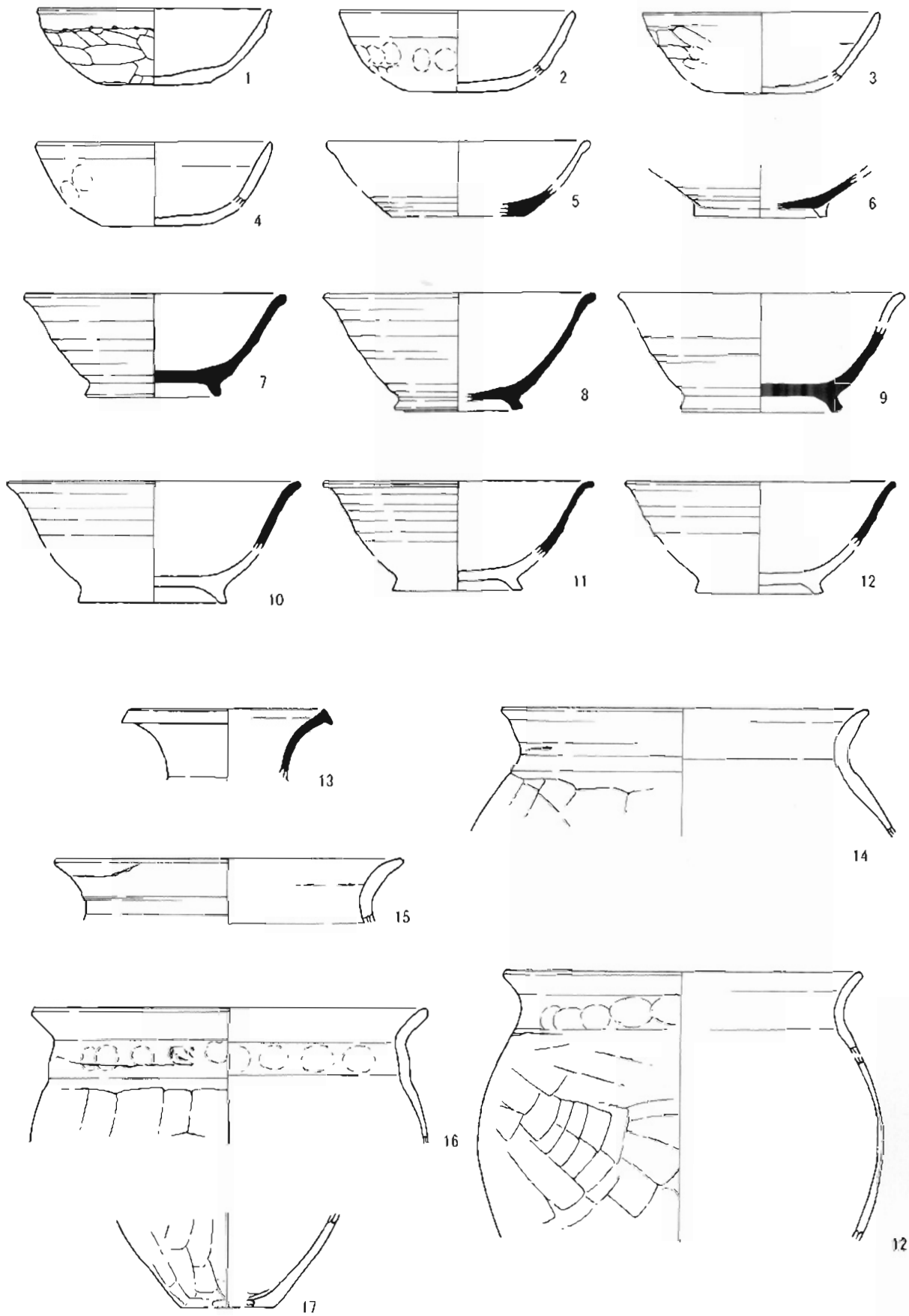
第15図 2号竪穴住居跡カマド



第16図 2号竪穴住居跡遺物分布状況

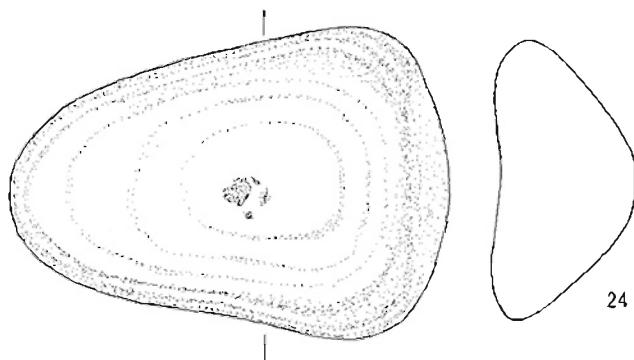
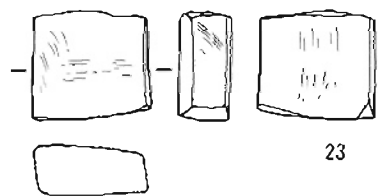
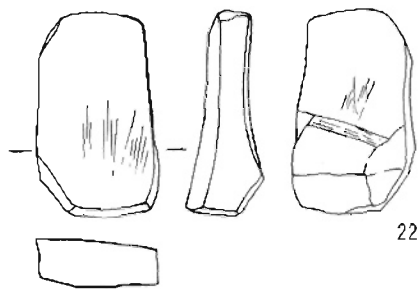
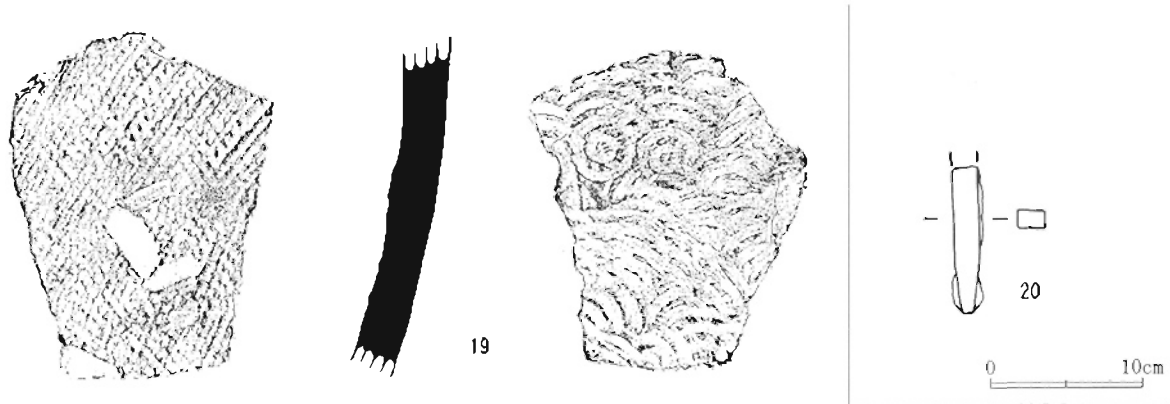
2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(12.2)	4.0	6.0	暗赤褐色	良好	石英、長石、雲母、微砂粒	図示30%	図示
2	坏	(12.3)	《3.4》	-	灰赤褐色	やや悪	角閃石、雲母、(精良)	図示20%	覆土
3	坏	(12.3)	《3.7》	-	赤褐色	普通	石英、雲母	図示10%	図示
4	坏	(12.3)	《3.4》	-	赤褐色	普通	角閃石、片岩、砂粒	図示10%	図示
5	坏	-	《1.7》	(7.0)	明灰色	普通	長石、片岩、酸化鉄粒	図示15%	覆土、底部回転糸切り未調整、末野
6	高台付皿	-	《1.9》	-	明灰色	良好	石英、長石	図示15%	覆土、南比企か?
7	高台塊	(13.6)	5.5	7.1	暗黄灰色	普通	石英、酸化鉄粒、(粗い)	図示40%	図示、末野
8	高台塊	(14.1)	6.2	(6.6)	暗橙褐色	不良	石英、酸化鉄粒	図示25%	カマド、酸化焙、内面に重ね焼き痕
9	高台塊	-	《4.5》	(8.2)	灰黄褐色	やや悪	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示30%	図示、末野
10	高台塊	(15.7)	《3.6》	-	灰白色	不良	微砂粒、酸化鉄粒	図示10%	図示、末野
11	高台塊	(14.0)	《4.1》	-	暗灰色	良好	石英、片岩、黒色粒、(粗い)	図示20%	図示、末野
12	高台塊	(14.1)	《3.5》	-	灰赤褐色	不良	石英、酸化鉄粒、(粗い)	図示10%	覆土、末野
13	平瓶?	(10.3)	《3.8》	-	灰黒色	良好	長石、片岩	図示15%	覆土、末野
14	甕	(19.1)	《6.8》	-	赤褐色	普通	石英、長石、砂粒	図示20%	図示
15	甕	(18.3)	《3.5》	-	赤褐色	普通	石英、砂粒	図示20%	図示
16	甕	(20.6)	《7.2》	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、長石	図示20%	カマド
17	甕	-	《4.8》	(5.0)	暗褐色	不良	石英、角閃石、酸化鉄粒、白色粒	図示30%	図示
18	甕	(18.6)	《4.4》	-	灰黄赤色	普通	角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示25%	図示
19	甕	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、末野、外面平行、内面青海波
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	-	石材	残存率	備考
20	釘?	3.9cm	0.7cm	0.5cm	3.3g	-	-	破片	覆土、角棒状
21	砥石	7.9cm	5.3cm	3.4cm	160.8g	-	凝灰岩	-	覆土
22	砥石	8.0cm	4.8cm	3.1cm	109.3g	-	凝灰岩	-	覆土
23	砥石	4.3cm	4.7cm	2.1cm	75.8g	-	凝灰岩	-	図示
24	磨り石	17.3cm	11.0cm	6.2cm	1.66kg	-	砂岩	-	図示



第17图 2号竖穴住居跡出土遺物(1)

0 1.0cm



第18图 2号竖穴住居跡出土遺物(2)

0 10cm

【3号住居跡】

お手長山古墳周溝確認のために設定された第1トレンチから検出された。F-9グリッドに位置する。規模は、東壁で2.58m、南壁で2.22mが検出されており、確認面から床面までの深さは25cm程である。住居跡は全体の1/3程が検出されている。主軸方位は、N-90°-Eである。東壁にカマドが設けられている。

カマドは、燃焼部で長さ75cm、幅60cmを測る。前庭部から燃焼部中央が浅く掘り窪められている。カマド内及びその周辺から多量の遺物が検出されている。特にカマド南側に位置するピットは貯蔵穴と推定され、須恵器甕・坏・土師器甕等が比較的まとまって出土している。カマド内では、台付甕が良好な状態で検出されている。

B. 竪穴遺構

調査では5基が検出されている。土層断面等から判断し、中世の遺構群と認識した。3号、5号など南北の壁際中央付近に一对のピットを設ける遺構群が、熊野遺跡周辺で調査されており、いずれも中世の所産とされていることから、この点が裏付けられる。また、遺物は、極く少量の破片が検出されているが、古代の遺物が中心であり、中世の遺構群形成にあたり、混入したものと考えられる。本遺構群に限り出土遺物から存続時期の特定を行うことは困難である。

【1号竪穴遺構】

C~D-8グリッドに位置する。長軸は3.48m、短軸は2.40mである。主軸方位は、N-22°-Wである。平面形は長方形と考えられるが西壁については検出されていない。

1号溝、3号土塙と切合い関係を有し、本遺構が最も古いことが確認されている。床面は、若干凹凸があり、確認面からの深さは、15~20cmである。出土遺物には土師器坏、須恵器坏、甕の破片があるが、いずれも混入品と考えられる。

【2号竪穴遺構】

D-7グリッドに位置する。長軸は、3.72m、短軸は2.76mである。主軸方位は、N-90°-Wである。平面形は台形である。

土塙、小ピットが伴うが、いずれも浅いものである。確認面から床面までの深さは、15cmである。

出土遺物には、須恵器碗の破片があるが、混入品と考えられる。

【3号竪穴遺構】

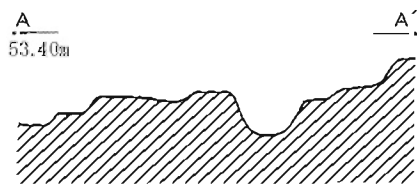
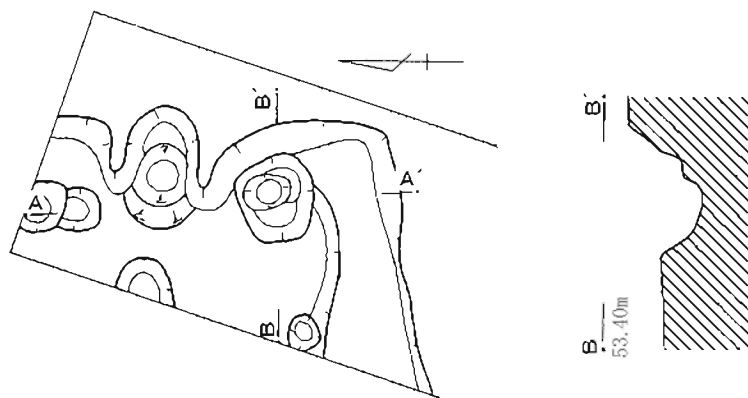
C-3~4グリッドに位置する。長軸は、3.42m、短軸は2.88mである。平面形は長方形を呈し、主軸方位は、N-20°-Eである。南壁及び北壁中央付近に深めのピットが一对確認されている。この形態は、5号竪穴遺構と共通する。この対ピットは、斜めに掘り込まれていることが確認されている。確認面から床面までの深さは24~30cmである。床面及び壁際にはピット及び土塙が検出された。鉄滓及び土師器片が検出されている。

【4号竪穴遺構】

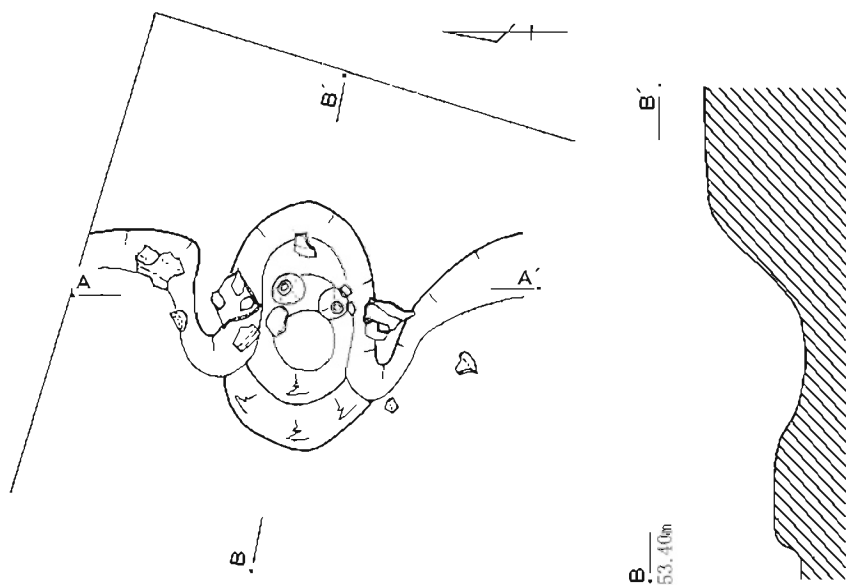
C-3グリッドに位置する。長軸は、4.14m、短軸は2.82mである。主軸方位は、N-70°-Wである。5号溝と切合い関係を有し、本遺構が古いことが判明している。確認面から床面までの深さは10~28cmである。周囲には土塙及び小ピットが伴うが性格については明確ではない。

【5号竪穴遺構】

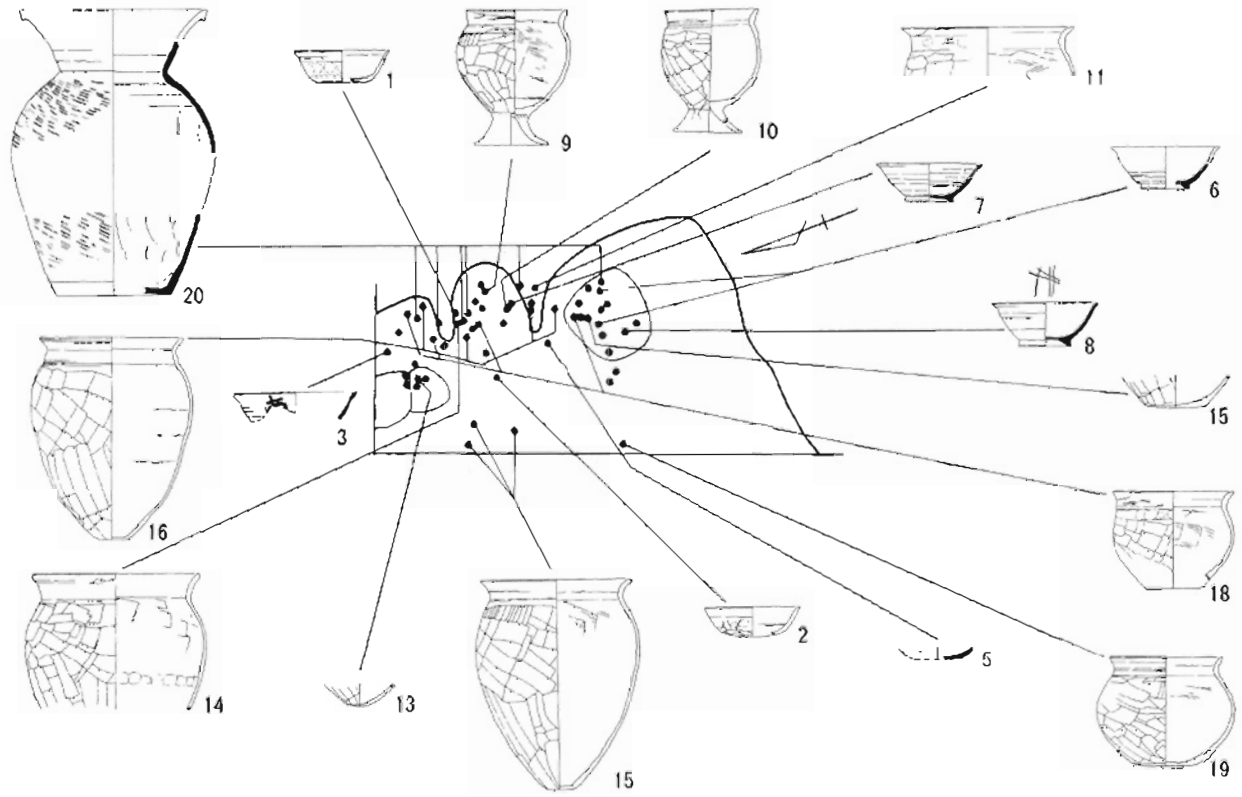
C-2~3グリッドに位置する。長軸は、2.82m、短軸は2.22mである。平面形は、長方形を呈する。主軸方位は、N-16°-Eである。南壁及び北壁中央付近に深めのピットが一对確認されている。この対ピットは、垂直に掘り込まれている。この他に西壁にもピットが検出された。確認面から床面までの深さは10~30cmである。床面は、やや凹凸がある。



第19図 3号竖穴住居跡



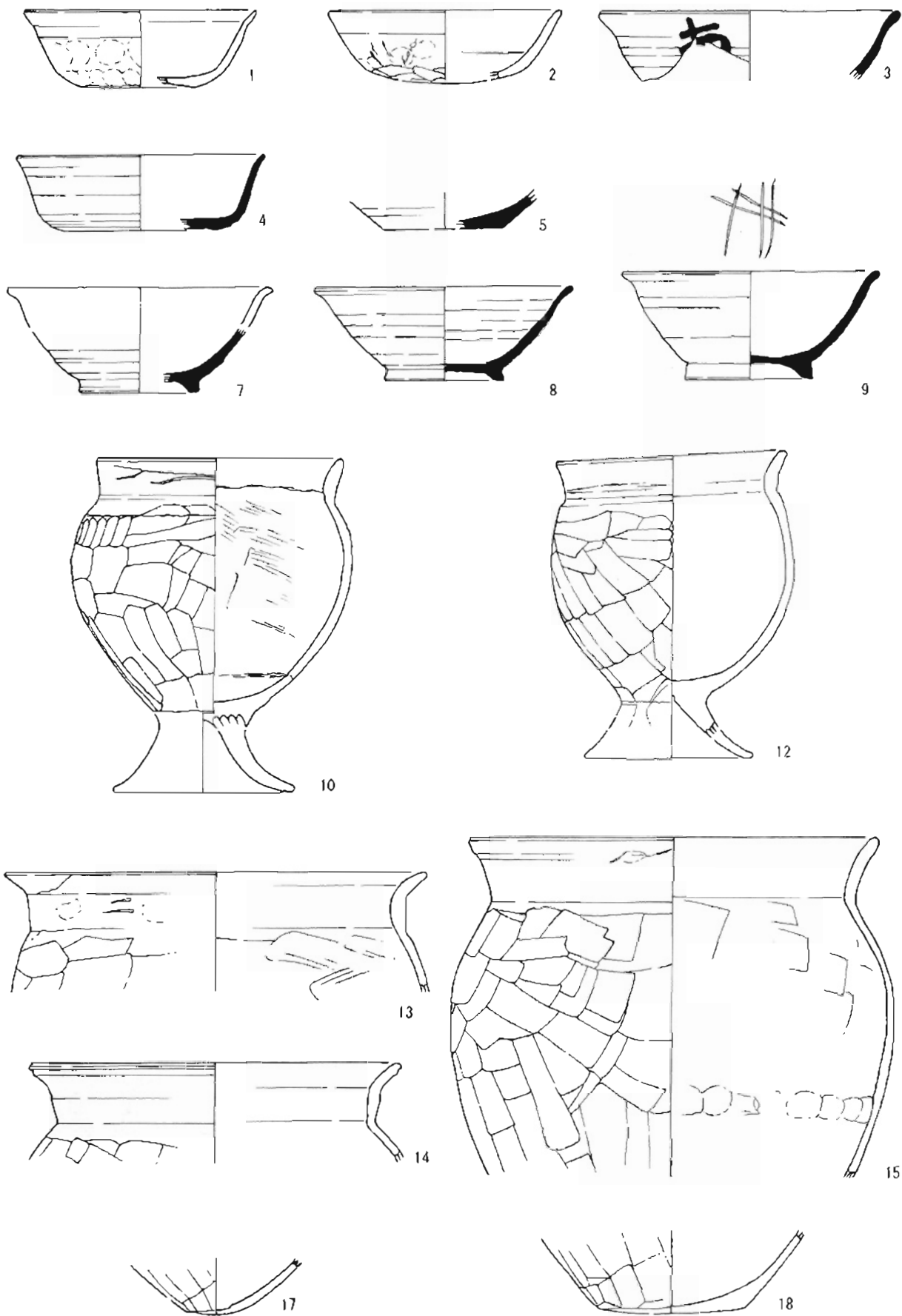
第20図 3号竖穴住居跡カマド



第21図 3号竪穴住居跡遺物分布状況

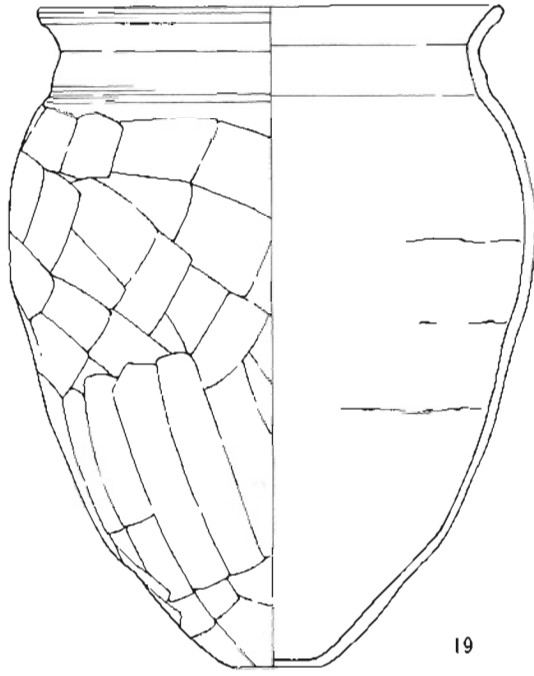
3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(12.2)	4.1	6.0	赤褐色	普通	石英、酸化鉄粒	図示45%	カマド
2	坏	(12.1)	(3.9)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石	図示30%	図示
3	高台甕	(15.6)	《3.7》	-	赤褐色	普通	石英、片岩、酸化鉄粒	図示65%	カマド、体部に墨書、酸化燧、末野
4	坏	(13.0)	4.0	(9.5)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示20%	覆土、底部回転ヘラ削り、末野
5	坏	-	《2.1》	6.1	明灰色	普通	石英、黒色粒	図示50%	カマド、底部回転糸切り未調整、末野
6	高台甕	-	《3.4》	(6.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、チャート	図示35%	図示、末野
7	高台甕	(13.3)	4.9	(6.2)	灰橙褐色	不良	石英、片岩、酸化鉄粒	図示25%	カマド、酸化燧、末野
8	高台甕	13.3	5.7	(6.6)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、黒色粒、細礫	図示90%	図示、内底部にヘラ記号あり、末野
9	台付甕	12.8	《14.3》	-	暗赤褐色	良好	石英、長石、砂粒	図示90%	カマド
10	台付甕	12.0	《15.0》	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、砂粒	図示70%	カマド
11	甕	(22.1)	《6.4》	-	暗赤褐色	普通	石英、砂粒、酸化鉄粒	図示20%	図示
12	甕	(19.3)	《5.2》	-	橙褐色	良好	石英、角閃石、砂粒	図示25%	覆土
13	甕	-	《3.0》	(3.0)	橙褐色	普通	石英、白色粒、微砂粒	図示70%	図示
14	甕	(21.2)	《18.0》	-	橙褐色	普通	石英、チャート、砂粒、酸化鉄粒	図示30%	カマド
15	甕	-	《4.3》	(7.6)	黒褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示30%	図示
16	甕	(18.2)	(24.7)	(7.7)	暗橙褐色	普通	石英、長石、砂粒、酸化鉄粒	図示40%	カマド
17	甕	19.3	27.5	3.7	暗赤褐色	良好	石英、長石、砂粒、酸化鉄粒	図示70%	図示
18	小形甕	15.3	《11.8》	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、パミス、砂粒	図示70%	カマド、歪みややあり
19	小形甕	(14.3)	14.3	(8.4)	赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母	図示45%	図示
20	甕	-	《33.3》	(14.4)	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示20%	図示

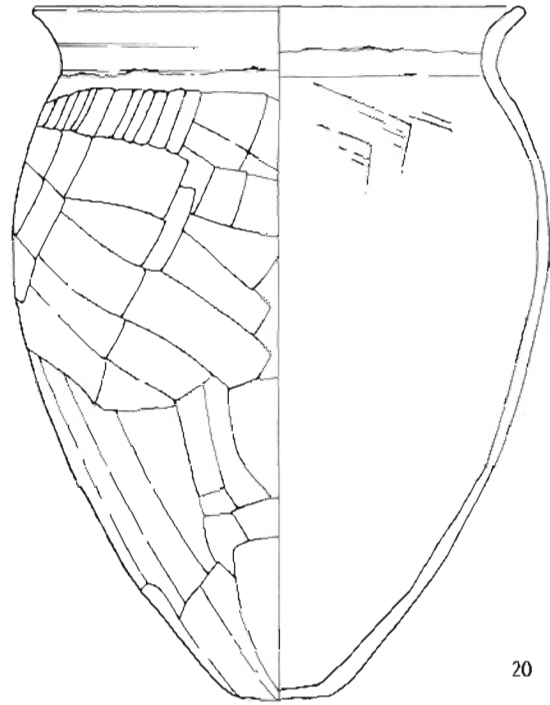


第22図 3号竖穴住居跡出土遺物(1)

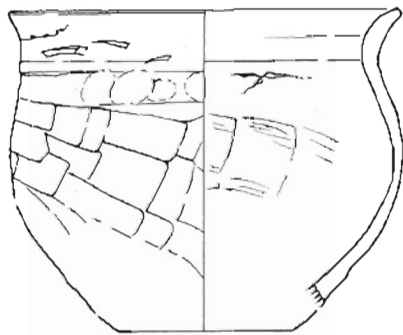
0 10cm



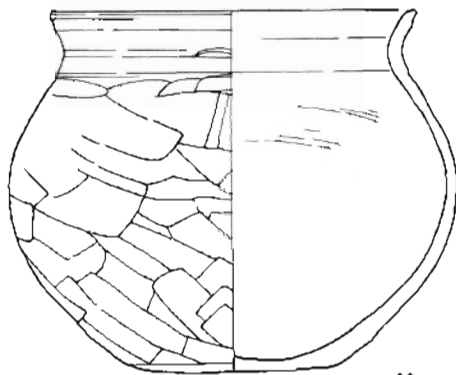
19



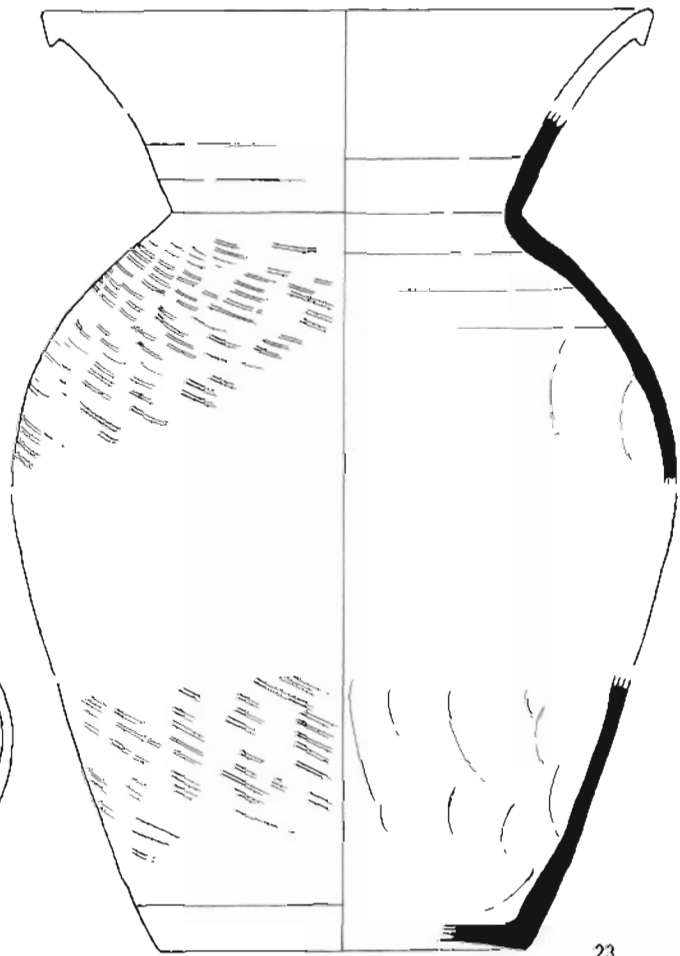
20



21



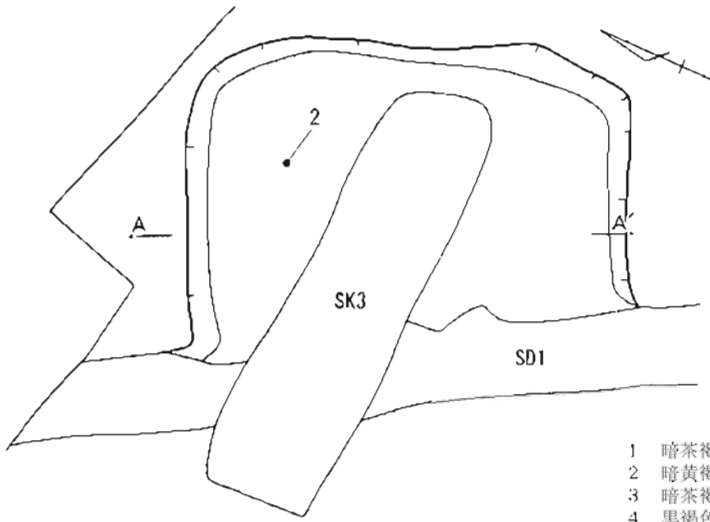
22



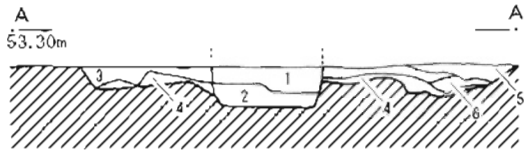
23

第23図 3号竖穴住居跡出土遺物(2)

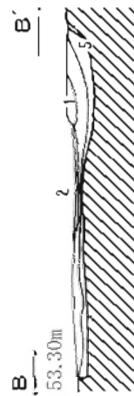
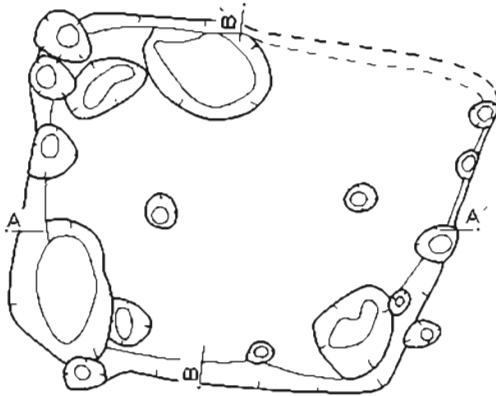
0 10cm



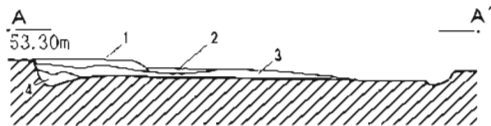
- | | | |
|---|-------|-------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ロームブロック若干、パミス、ローム粒少量含む。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒多量含む。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒多量含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | 炭化物、ローム粒少量含む。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |



第24図 1号竪穴遺構

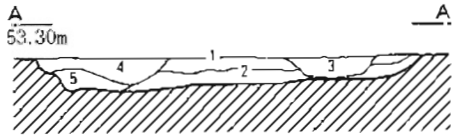
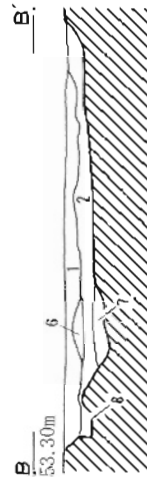
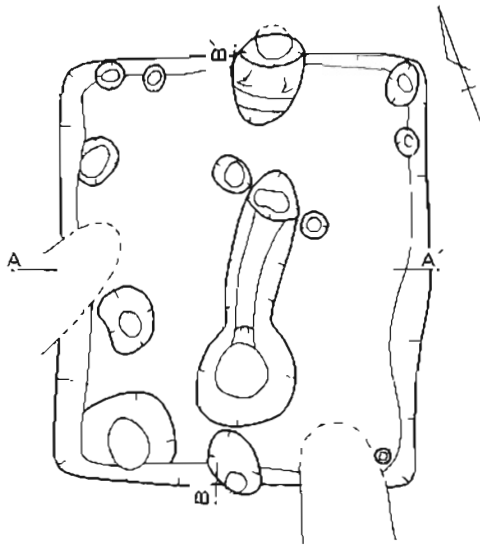


- | | | |
|---|-------|---------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒、パミス少量含む。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | 現代の攪乱。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒多量含む。 |



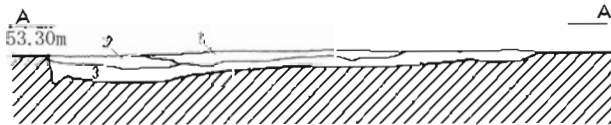
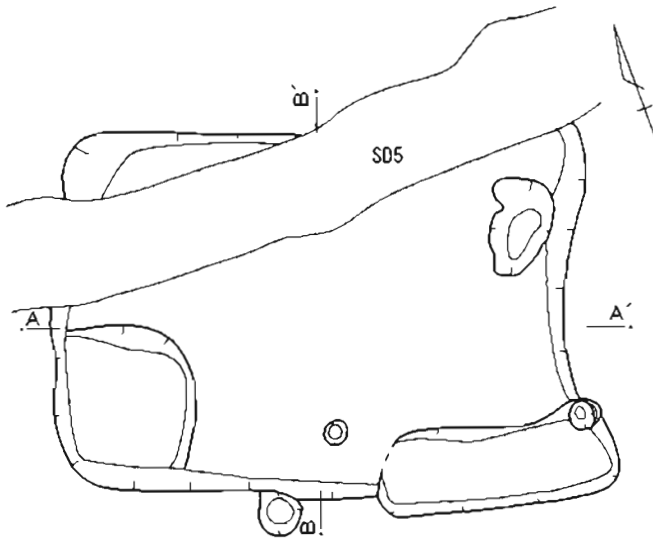
第25図 2号竪穴遺構





- | | | |
|---|-------|---------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 2 | " | ロームブロック若干、ローム粒多量含む。 |
| 3 | 明茶褐色土 | ロームブロック若干、ローム粒少量、パミス多量含む。 |
| 4 | " | 浅間A軽石多量、ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | ロームブロック若干含む。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 8 | " | ローム粒少量含む。 |

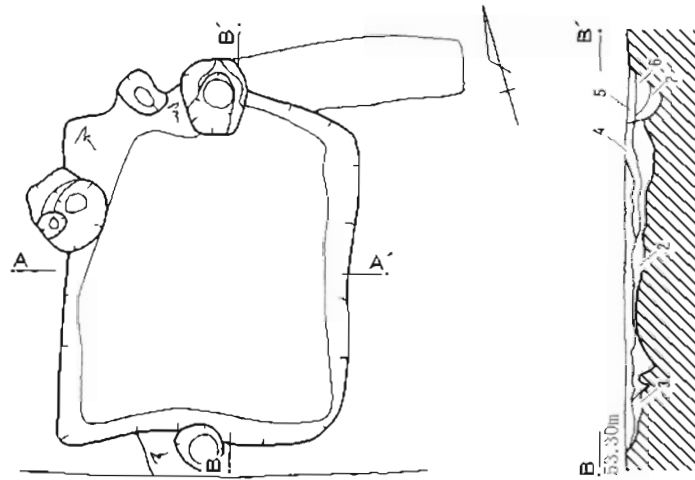
第26図 3号竖穴遺構



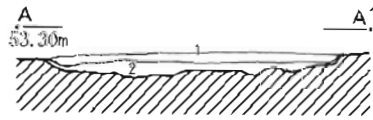
- | | | |
|---|-------|---------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 2 | " | ロームブロック若干、ローム粒多量含む。 |
| 3 | 明茶褐色土 | ロームブロック若干、ローム粒少量、パミス多量含む。 |
| 4 | " | 浅間A軽石多量、ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | ロームブロック若干含む。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒、ロームブロック少量含む。 |
| 8 | " | ローム粒少量含む。 |

第27図 4号竖穴遺構





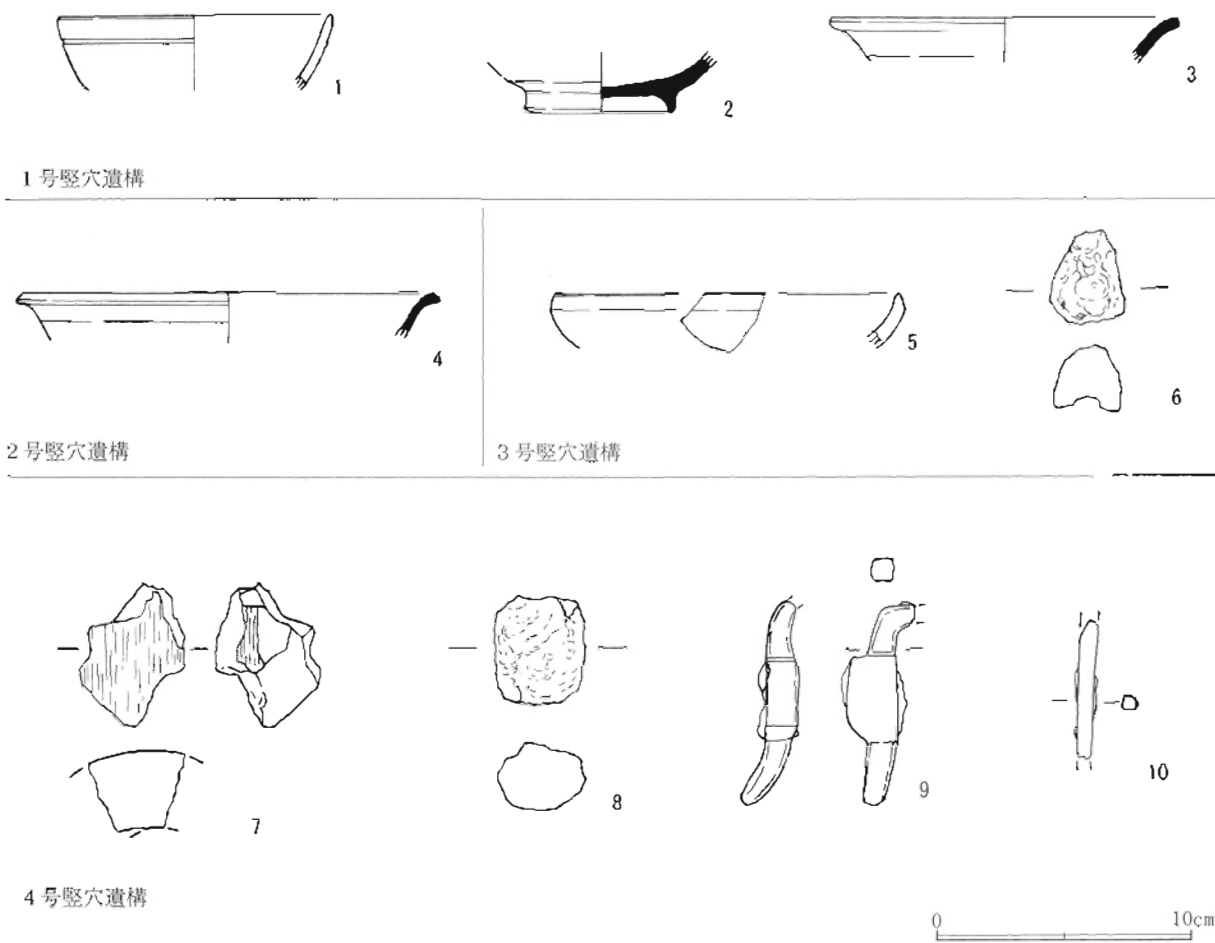
調査区域外



- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 黒褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 3 | " | ロームブロック、ローム粒多量含む。
ロームブロックの混入は、2層より少ない。 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロック、ローム粒少量含む。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | 浅間A軽石少量含む。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒少量含む。 |

0 2m

第28図 5号竖穴遺構



第29図 堅穴遺構出土遺物

1号堅穴遺構遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(10.9)	《3.0》	-	淡赤褐色	普通	石英、角閃石	図示13%	覆土、口縁外面に浅い沈線
2	高台壇	-	《2.4》	5.9	褐色	やや悪	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示95%	図示、末野産
3	高台壇	(13.6)	《1.7》	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土、末野産

2号堅穴遺構遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
4	高台壇	(16.1)	《1.8》	-	明灰色	普通	片岩、黒色粒	図示10%	覆土、末野産

3号堅穴遺構観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
5	坏	(13.5)	《3.3》	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示5%	覆土
6	鉄滓	長さ(cm) 2.4	幅(cm) 2.0	厚さ(cm) 1.8	重さ(g) 10.6	磁着度 中	-	-	覆土、若干発泡、鉄塊系遺物?

4号堅穴遺構観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着度	胎土	残存率	備考
7	羽口	5.6	4.0	3.0	-	-	微砂粒、スサ	破片	図示
8	鉄塊系遺物	2.8	2.3	1.8	16.8	強	-	-	覆土、若干の気泡、亀裂
9	不明鉄製品	5.3	1.4	0.8	10.5	-	-	破片	覆土、片側端部屈曲、中央部幅広
10	不明鉄製品	3.6	0.4	1.4	1.4	-	-	破片	覆土、断面方形で棒状、釘?

C. 土壙

A～C区で検出されている。切り合い関係等からすべて中世に属するものと推定されるが明確な時期等は不明である。出土遺物は、堅穴遺構 同様少量であり、古代のものも含んでいるが、混入品である。規模、主軸方位等は以下のとおりである。

土壙群のうち、明らかに近現代とされるものについては、省略する。

【1号土壙】

A区東部に位置する。C-7～8グリッドにあたる。2号土壙と重複しており、本遺構が新しいことが確認された。

規模は、長軸3.90m、短軸84cmを測る。主軸方位は、N-13°-Eである。平面形は長方形を呈する。確認面からの深さは48cmを測る。

【2号土壙】

A区東部に位置する。C-8グリッドにあたる。2号土壙は、1号土壙より古いものである。西部は1号土壙により切られているが、平面形は、楕円形が想定される。規模は、長軸（現存長）1.26m、短軸が1.14mである。確認面からの深さは18cmである。

【3号土壙】

A区東部に位置する。C-8グリッドにあたる。1号溝と切り合い関係を有し、本土壙の方が新しいことが確認されている。規模は、長軸3.6m、短軸90cmを測る。主軸方位は、N-90°-Eである。平面形は、長方形を呈する。確認面からの深さは42cmである。西壁の立ち上がりは直であり、東壁はなだらかである。土層堆積は、西方から流れ込んだ状態が確認されている。

【4号土壙】

A区東部に位置する。D～E-7グリッドにあたる。5号土壙と重複しており、本遺構が新しいことが確認された。遺構の一部が調査区域外に延びているため、全体像は不明である。規模は、長軸（現存長）5.16m、短軸90cmを測る。主軸方位は、N-5°-Eである。土壙底面には段差があり、さらに重複がある可能性があるが、断面では把握できなかった。土層堆積状態は、自然堆積というよりも人為的なものである可能性が高い。

【5号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。5号土壙は、4号土壙より古いものである。規模は、長軸（現存長）2.22m、短軸1.62mを測る。平面形は不整形を呈する。主軸方位は不明である。

【6号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。7号土壙と重複しているが、新旧関係については未確認である。平面形は長方形である。規模は、長軸4.32m、短軸92cmである。主軸方位はN-10°-Eである。確認面から底面までの深さは48cmである。

【7号土壙】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。6号土壙と重複しているが、新旧関係は未確認である。平面形は長方形である。規模は、長軸4.32m、短軸72cmである。主軸方位は、N-11°-Eである。

【8号土壙】

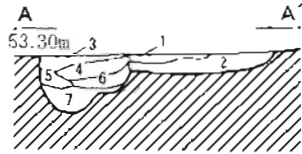
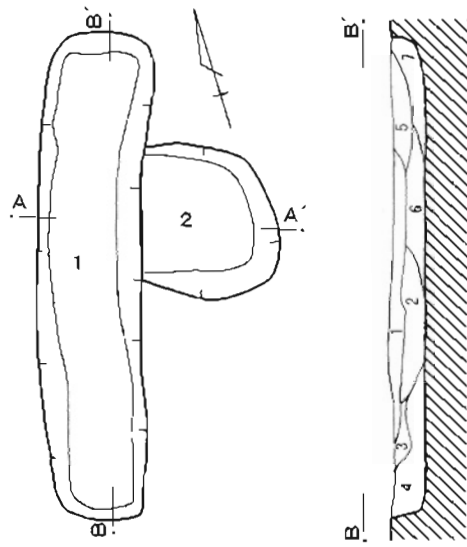
A区東部に位置する。C-7グリッドにあたる。9号土壙と重複関係にあり、9号土壙の下層に存在することが確認されている。規模は長軸（現存長）2.58m、短軸96cmである。平面形は長方形である。主軸方位は、N-80°-Wである。確認面から底面までの深さは30cmである。

【9号土壙】

A区東部に位置する。C-7グリッドにあたる。8号土壙と重複関係にあり、本遺構は8号土壙の上層にのる。規模は長軸2.40m、短軸1.20mである。平面形は長方形である。主軸方位は、N-16°-Wである。確認面から底面までの深さは12cmである。

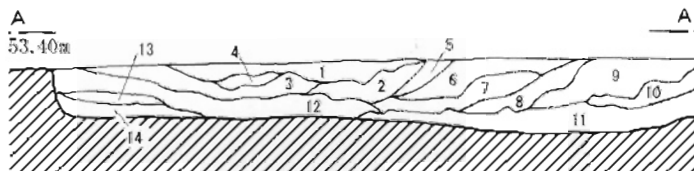
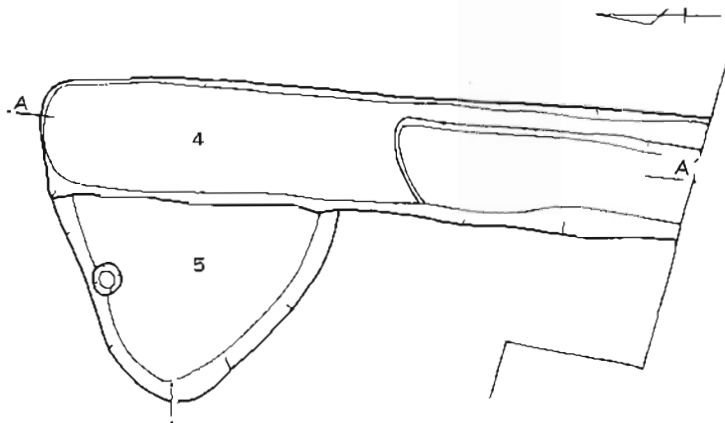
【10号土壙】

A区東部に位置する。C～D-6グリッドにあたる。2号溝と重複関係を有し、本遺構が新しいことが確認されている。北端は調査区域外に延びており、南端は2号溝に切られているため全体像は不明である。また、本遺構南部付近では、別の土壙との重複関係があると想定されるが、新旧の関係等不明である。長軸（現存長）3.12m、短軸90cm

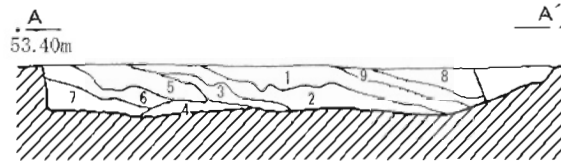
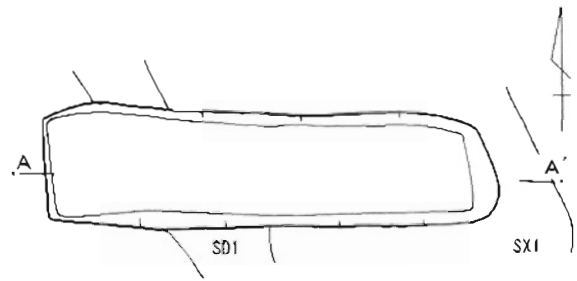


- | | | |
|---|-------|--------------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒、ロームブロック、ハミス多量に含む、黒色土若干含む。 |
| 2 | " | ローム粒、ロームブロック多量含む。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ハミス多量含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロック多量含む。やや軟質。 |
| 5 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 7 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量。 |

第30図 1・2号土壌



第32図 4・5号土壌



- | | | |
|---|-------|-----------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒、ロームブロック多量、焼土粒、ハミス少量含む。 |
| 2 | " | ローム粒、ハミス多量に含む。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 4 | " | ロームブロック多量含む。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒少量含む。 |
| 6 | 茶褐色土 | ローム、ハミス多量に含む。 |
| 7 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量。 |
| 8 | 暗茶褐色土 | ローム粒、ロームブロック若干含む。 |
| 9 | " | ローム粒、ロームブロック少量含む。 |

第31図 3号土壌



- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 1 | 茶褐色土 | ローム粒、ロームブロック、ハミス多量含む。 |
| 2 | " | ローム粒多量、ロームブロック少量、黒色土若干含む。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック若干含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒多量、炭化物少量含む。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |
| 7 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量、粘性あり。 |
| 8 | 暗黄褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 9 | 暗茶褐色土 | ロームブロック、ローム粒、炭化物少量含む。 |
| 10 | 暗黄褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 11 | 茶褐色土 | ロームを主体とする。 |
| 12 | 黒褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量、炭化物若干含む。 |
| 13 | 暗黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 14 | " | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |



である。主軸方位は $N-10^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは5cmと浅い。

【11号土壌】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。2号溝と重複関係を有し、本遺構が古いことが確認されている。10号土壌同様、北部は調査区域外に延びており、南部は2号溝に切られているため全体像は不明である。規模は長軸（現存長）3.00m、短軸85cmを測る。主軸方位は $N-11^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは5cmと浅い。

【12号土壌】

A区中央部に位置する。C-6グリッドにあたる。近現代の土壌と切り合い関係を有し、本土壌が古いことが確認されている。

規模は長軸（現存長）2.70m、短軸1.38mを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位は $N-90^{\circ}-W$ である。確認面からの深さは24cmである。

【13号土壌】

A区西部に位置する。C-3～4グリッドにあたる。規模は長軸3.12m、短軸1.14mを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位は $N-72^{\circ}-W$ である。確認面からの深さは24cmを測る。

【14号土壌】

A区西部に位置する。C-4グリッドにあたる。規模は長軸（現存長）3.54m、短軸99cmを測る。本遺構の北方は、調査区域外に延びており、遺構の全体像は不明であるが、平面形は、ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方位は $N-20^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは30cmを測る。土層断面の観察から、南方から埋め戻されたものと推定する。

【15号土壌】

A区西部に位置する。C～D-5グリッドにあたる。規模は長軸（現存長）2.88m、短軸78cmを測る。本遺構の南方は、調査区域外に延びており、遺構の全体像は不明であるが平面形は、ほぼ長方形を呈するものと思われる。主軸方位は $N-20^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは30cmである。

【16号土壌】

A区東部に位置する。D-6～7グリッドにあたる。規模は長軸2.70m、短軸1.80mの不整楕円形を呈する。主軸方位は $N-45^{\circ}-W$ である。ピット2基と重複しているが新旧関係は不明である。確認面からの深さは18cmである。

【17号土壌】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は、長軸2.28m、短軸2.16mである。平面形は円形に近い。主軸方位は $N-60^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは20cmを測る。

【18号土壌】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は、長軸3.12m、短軸2.28mを測る。平面形は、楕円形である。主軸方位は $N-75^{\circ}-W$ である。確認面からの深さは30cmを測る。

【19号土壌】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、長軸1.68m、短軸1.56mを測る。平面形は不整形である。主軸方位は $N-4^{\circ}-E$ である。確認面からの深さは12cmを測る。

【20号土壌】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、径1.14mを測る。平面形は円形である。2号溝と重複関係があり、本遺構の方が古いことが確認されている。確認面からの深さは18cmである。

【21号土壌】

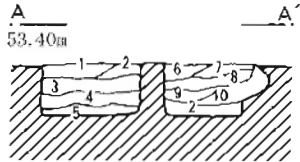
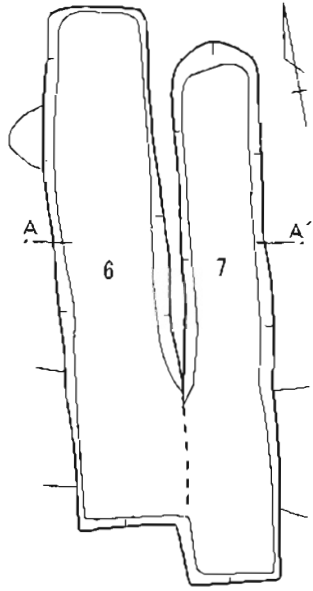
A区東部に位置する。D-8グリッドにあたる。規模は、径1.14mを測る。平面形は円形である。確認面からの深さは12cmである。

【22号土壌】

A区東部に位置する。D-8グリッドにあたる。規模は、長軸1.26m、短軸90cmである。平面形は楕円形を呈する。確認面からの深さは18cmである。

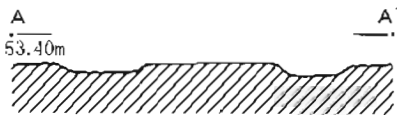
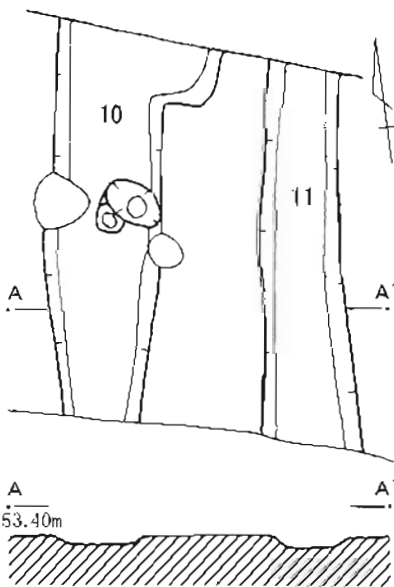
【23号土壌】

A区東部に位置する。D-7グリッドにあたる。規模は、長軸1.41m、短軸1.26mである。平面形

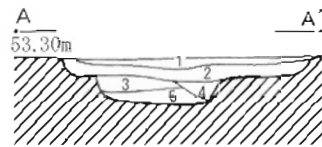
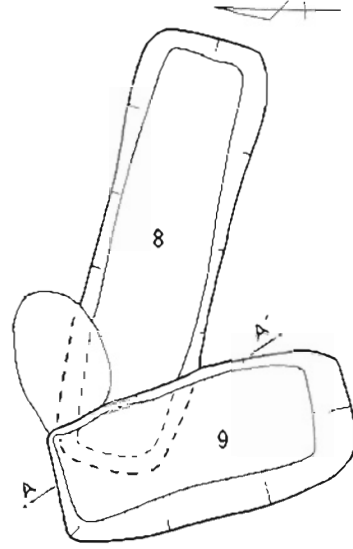


- 1 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む。
- 2 " 1層に近似するが、色調やや暗。
- 3 " ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 4 " ロームブロック多量含む。硬質である。
- 5 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。
- 6 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロック若干、ローム粒多量含む。
- 8 暗茶褐色土 ロームブロック多量含む。
- 9 " ロームブロック少量含む。
- 10 " ローム粒多量含む。

第33図 6・7号土壌

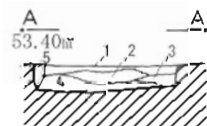
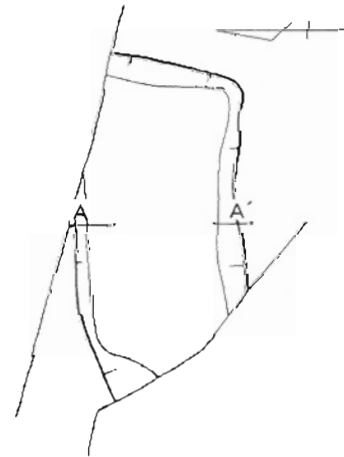


第35図 10・11号土壌



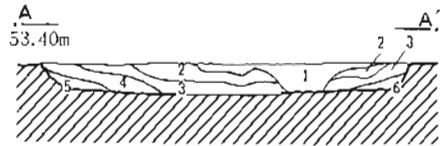
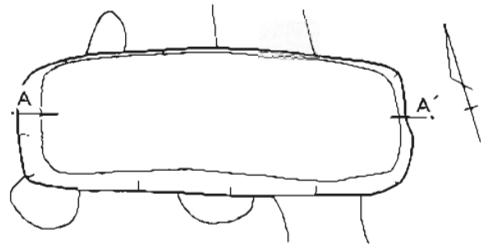
- 1 黒褐色土 バミス多量、ロームブロック若干含む。
- 2 " ローム粒、ロームブロック多量含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック多量を含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 5 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。

第34図 8・9号土壌



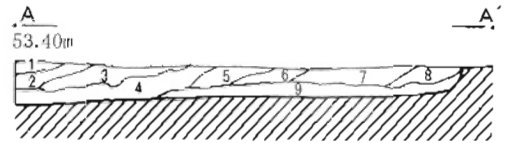
- 1 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。
- 2 " ロームブロック多量含む。
- 3 " ロームブロック、ローム粒若干含む。
- 4 " ロームブロック多量含む。
- 5 黄褐色土 ロームを主体とする。

第36図 12号土壌



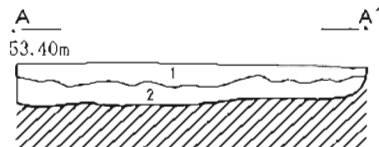
- 1 茶褐色土 浅间A軽石、ローム粒多量、ロームブロック若干含む。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック若干含む。
- 3 " ローム粒、ロームブロック少量含む。
- 4 " ローム粒、ロームブロック多量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック主体。

第37図 13号土壌



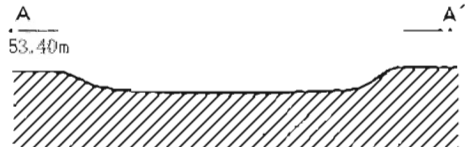
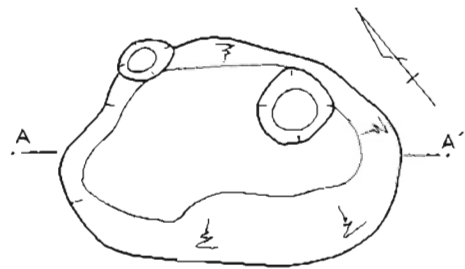
- 1 黒褐色土 バミス多量、ロームブロック若干含む。
- 2 " ローム粒、ロームブロック多量含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 5 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 6 明茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック主体とする。
- 8 " ロームブロック多量含む。
- 9 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。

第38図 14号土壌



- 1 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
ロームブロックは1層より大きい。

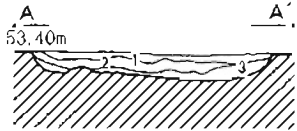
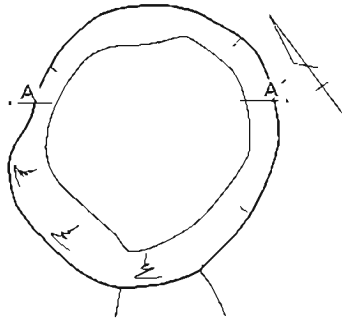
第39図 15号土壌



- 1 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。
- 2 " ロームブロック多量含む。
- 3 " ロームブロック、ローム粒若干含む。
- 4 " ロームブロック多量含む。
- 5 黄褐色土 ロームを主体とする。

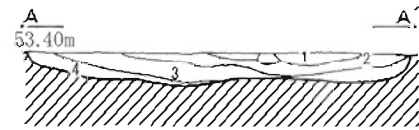
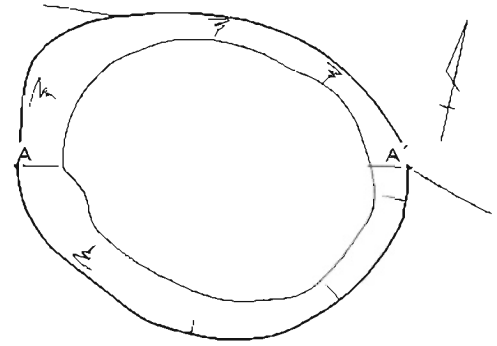
D 2m

第40図 16号土壌



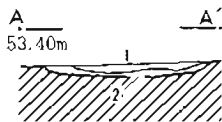
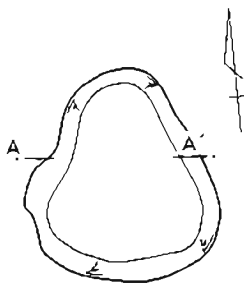
- 1 暗茶褐色土 ロームブロック若干、ローム粒、パミス多量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 3 " ロームを主体とする。黒色土若干混入する。

第41図 17号土壌



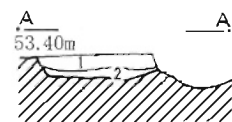
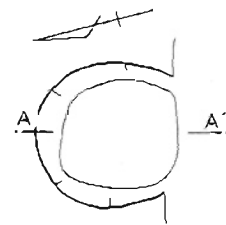
- 1 暗茶褐色土 ロームブロック若干、ローム粒、パミス少量含む。
- 2 " ロームブロック、ローム粒多量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第42図 18号土壌



- 1 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒若干含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第43図 19号土壌



- 1 黒褐色土 ロームブロック若干含む。
- 2 " ロームブロック、ローム粒多量含む。

第44図 20号土壌



は、不整形円形を呈する。確認面からの深さは10cmである。

【24号土壌】

A区東部に位置する。D-6グリッドにあたる。規模は径84cmである。平面形は円形を呈する。確認面からの深さは5cmである。

【25号土壌】

A区東部に位置する。D-5～6グリッドにあたる。規模は長軸1.80m、短軸1.26mを測る。平面形は不整形である。5箇所にピットが確認されている。確認面からの深さは18cmである。

【26号土壌】

A区東部に位置する。D-5グリッドにあたる。規模は長軸1.38m、短軸1.20mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。平面形は、不整形円形である。確認面からの深さは12cmである。

【27号土壌】

C区中央部に位置する。F-1グリッドにあたる。規模は長軸3.00m、短軸1.62mを測る。平面形は、不整形である。確認面からの深さは60cmである。

【28号土壌】

C区南部に位置する。F-1～2グリッドにあたる。29、31号土壌と重複しており、本土壌が最も新しい段階のものであることが判明している。

規模は、長軸2.04m、短軸96cmを測る。平面形は長方形である。主軸方位はN-83°-Wである。確認面からの深さは49cmを測る。

【29号土壌】

C区南部に位置する。F-1～2グリッドにあたる。28、31号土壌と重複しており、本土壌は、31号土壌より新しく、28号土壌より古い。

規模は長軸（現存長）2.04m、短軸96cmを測る。平面形は、長方形である。主軸方位はN-83°-Wである。確認面からの深さは、20cmを測る。

【30号土壌】

C区南部に位置する。F-1グリッドにあたる。29号、34号土壌と切り合い関係を有す。本土壌は

29号土壌より新しく、34号土壌より古いことが確認されている。また、30、35号土壌上層には、別の長方形土壌が存在していたことが、土層断面C-C'より確認できるが詳細は不明である。

規模は長軸（現存長）2.90m、短軸90cmを測る。平面形は、長方形である。主軸方位はN-80°-Wである。確認面からの深さは、15cmを測る。

【31号土壌】

C区南部に位置する。F～G-1グリッドにあたる。29号土壌と切り合い関係を有し、29号土壌より古いことが確認されている。29号土壌に壊されているため、全体像は不明である。規模は、長軸（現存長）3.80m、短軸1.10mを測る。確認面からの深さは、20cmである。

【32号土壌】

C区南部に位置する。29、30、33号土壌と重複している。33号土壌より新しく、29、30号土壌より古いことが確認されている。

規模は、長軸（現存長）2.88m、短軸1.08mを測る。確認面からの深さは、10cmである。

【33号土壌】

C区南部に位置する。29、30、32号土壌と重複している。32号土壌より古く、29、30号土壌より新しいことが確認されている。規模は長軸（現存長）1.56m、短軸80cmを測る。

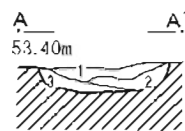
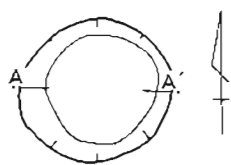
【34号土壌】

C区南部に位置する。F～G-1グリッドにあたる。30、35、36号土壌、ピットとの重複関係を有し、これらの土壌より新しいことが確認されている。ピット2基との重複関係は不明である。

規模は長軸4.56m、短軸1.58mである。主軸方位はN-10°-Eである。確認面からの深さは、35cmを測る。

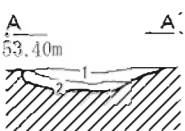
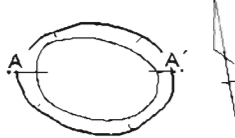
【35号土壌】

C区南部に位置する。F-1グリッドにあたる。34号土壌より古いものである。規模は長軸2.40m、短軸（現存長）60cmを測る。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-10°-Eである。



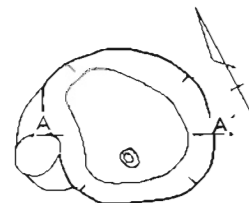
- 1 暗茶褐色土 ロームブロック若干、ローム粒多量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量含む。
- 3 " " ロームブロック、ローム粒多量含む。

第45図 21号土壌



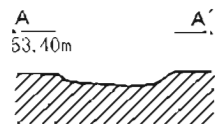
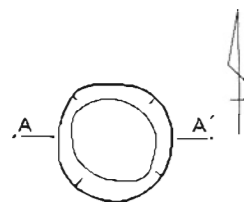
- 1 明茶褐色土 ロームブロック、ローム粒若干含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。

第46図 22号土壌

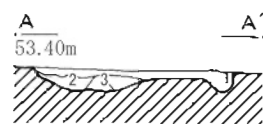
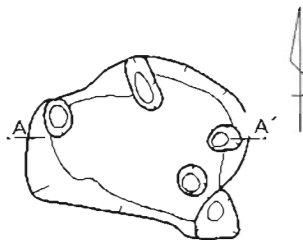


- 1 明茶褐色土 ローム粒、パミス少量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第47図 23号土壌

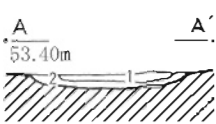
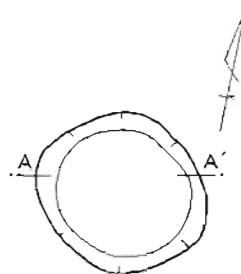


第48図 24号土壌



- 1 暗茶褐色土 ローム粒、パミス多量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロック主体。

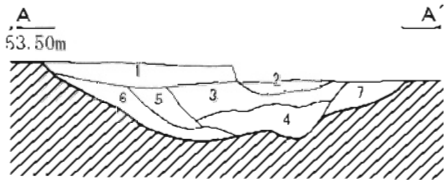
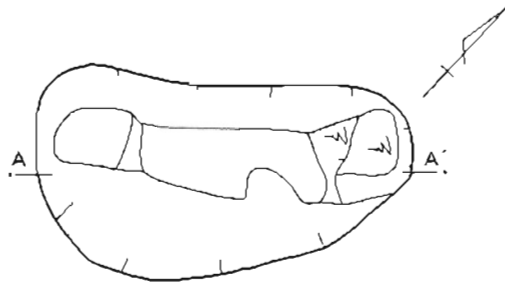
第49図 25号土壌



- 1 暗茶褐色土 ローム粒、パミス少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック主体。

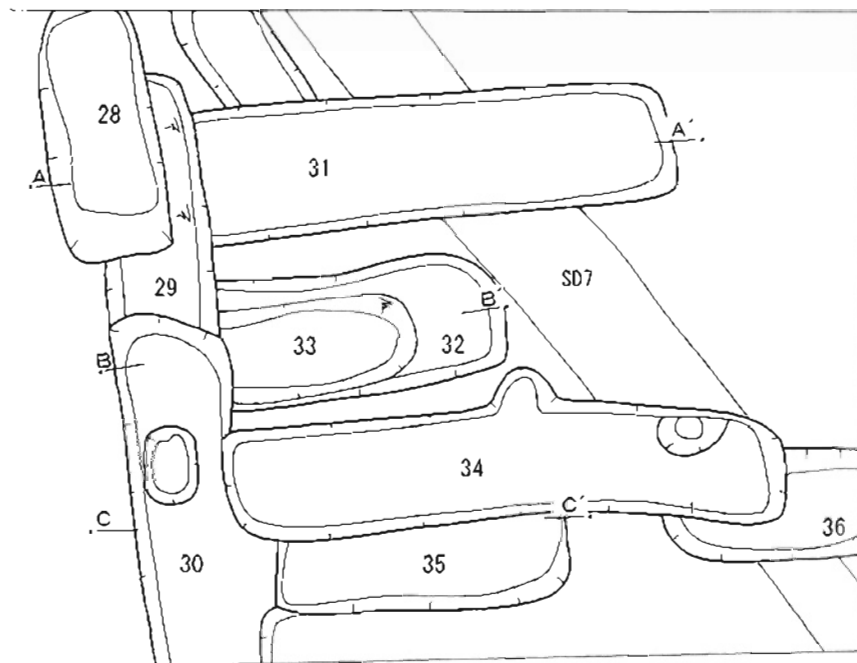
第50図 26号土壌



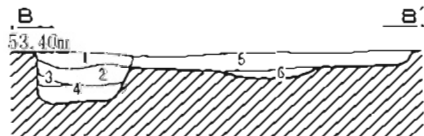
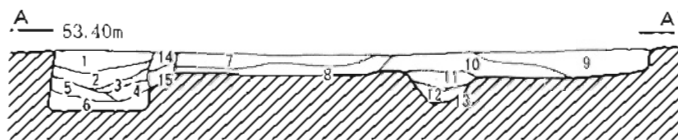


- A-A'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量、白色パミス多量、ロームブロック若干含む。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒少量含む。
 - 3 暗茶褐色土 焼土粒若干含む。ローム粒、ロームブロック若干含む。
 - 4 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
 - 5 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 6 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

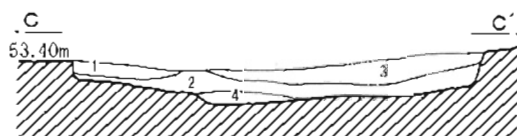
第51図 27号土壌



- A-A'
- 1 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量、炭化物若干含む。
 - 2 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒多量含む。
 - 4 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
 - 5 黒褐色土 ロームブロック若干、ローム粒少量含む。
 - 6 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
 - 7 暗茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。
 - 8 暗黄褐色土 炭化物少量、ロームブロック少量含む。
 - 9 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。
 - 10 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 11 暗茶褐色土 ローム粒多量含む。
 - 12 暗茶褐色土 ローム粒多量含む。
 - 13 黄褐色土 ロームブロック主体。
 - 14 暗茶褐色土 ローム粒多量含む。
 - 15 暗茶褐色土 ロームブロック (径1cm) 少量含む。

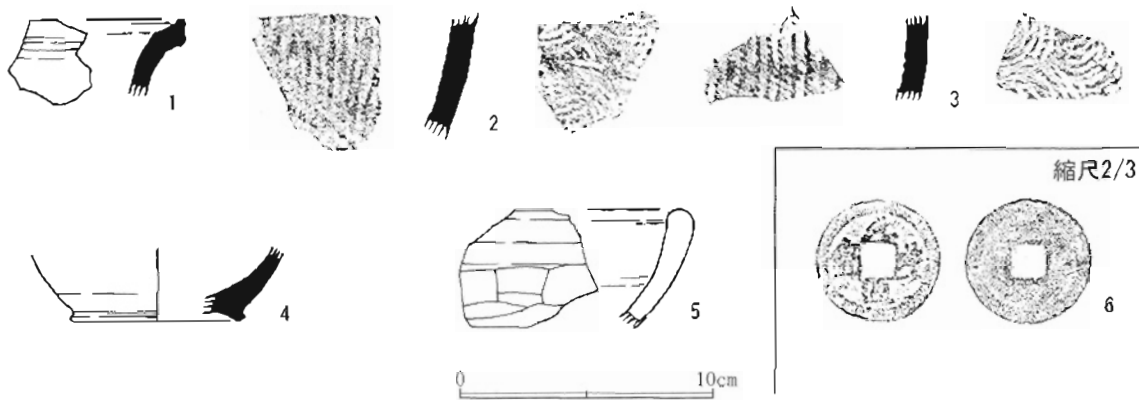


- B-B'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量、白色パミス多量、ロームブロック多量含む。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒少量、白色パミス少量、ロームブロック多量含む。
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。



- C-C'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロック多量含む。
 - 2 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック少量含む。
 - 3 暗茶褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量含む。
 - 4 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第52図 28~36号土壌



第53図 土壇出土遺物

土壇出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	SK-1
2	甕	-	-	-	灰白色	不良	石英、微砂粒	破片	SK-1、外面平行、内面青海波、末野
3	甕	-	-	-	灰白色	不良	石英、長石、片岩	破片	SK-1、外面平行、内面青海波、末野
4	高台壇	-	《2.9》	(6.6)	明灰色	普通	長石、片岩、黒色粒	図示15%	SK-4、末野
5	鉢	-	-	-	灰白色	不良	石英、角閃石	破片	SK-18、瓦質土器
6	錢貨	外径(cm) 2.46	内径(cm) 1.89	内郭径(cm) 0.65	外縁厚(cm) 0.12	文字厚(cm) 0.08	重さ2.4g、材質(銅製)	100%	SK-14、元豊通寶(初鑄年1078、北宋)

【36号土壇】

C区南部に位置する。G-1グリッドにあたる。34号土壇より古い。長軸(現存長)1.62m、短軸96cmを測る。主軸方位はN-10°-Eである。

D. 溝跡

1号溝

調査区東部に位置し、C~D-8グリッドにあたる。溝は、直線的に走行し、1号堅穴遺構、3号土壇、2号溝と重複している。走行方位は、N-30°-Wである。全長14.28mにわたり検出されており、確認面からの深さは15~30cmである。

2号溝

調査区東半部に位置し、D-6~9グリッドにあたる。溝は、クランク状に走行し、6~7号土壇等と切合い関係を有する。溝の東端は、調査区東部付近で確認できた。この東端部から、西コーナーまでの距離は、約28.80mであり、走行方位はN-75°-Wである。コーナー部から南北方向へほぼ直角に屈折し、4.2mにわたり走行する。その後、再び屈折し、調査区外へと延びている。

3号溝

調査区西部に位置し、C-3~4グリッドにあたる。溝は直線的に走行し、4号溝と併走する形となる。土層堆積状況から、3、4号溝は、同時期のもの

のか近接した時期のものと考えられる。走行方位はN-65°-Eであり、全長11.88mにわたり検出されている。確認面からの深さは30cmである。

4号溝

調査区西部に位置し、C-3~4グリッドにあたる。溝は直線的に走行し、3号溝と併走する形をとる。走行方位はN-65°-Eであり、全長11.58mにわたり検出されている。確認面からの深さは32cmである。

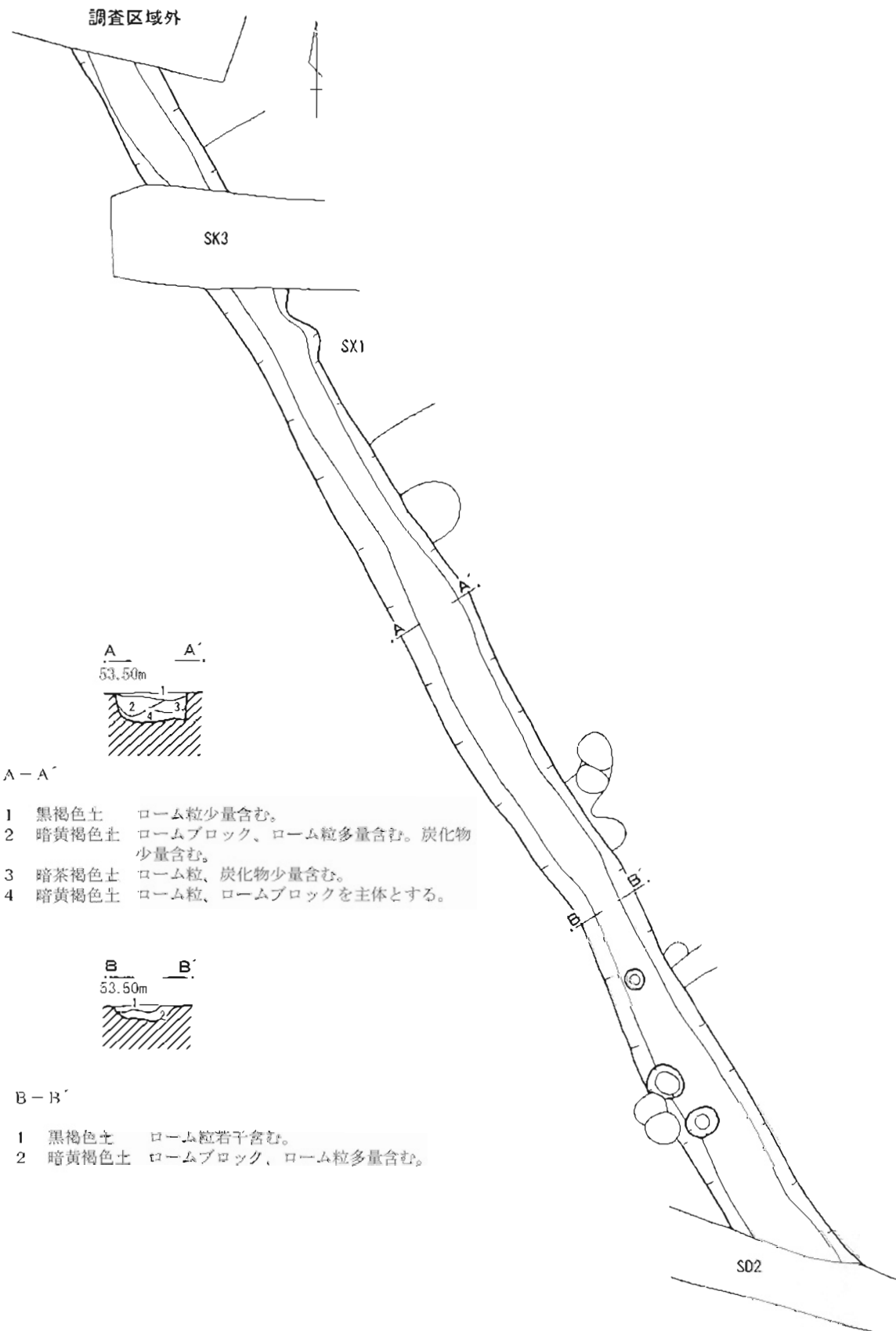
5号溝

調査区西部に位置する。1号住、3~4号堅穴遺構等と切合い関係を有し、溝跡の方が新しいことが確認されている。

溝跡の東端は、3号堅穴遺構付近で途切れており、西端は、調査区域外に伸びている。溝は、やや蛇行気味であり、全長12.90mにわたり検出されている。走行方位は、調査区東部ではN-80°-E、西部は、N-75°-Wである。

6号溝

調査区中央部に位置する。15号土壇等と重複している。溝自体も土壇を連結したような形状となっている。走行方位はN-70°-Eであり、11.1mの範囲にわたり検出されている。確認面からの深さは15cmである。



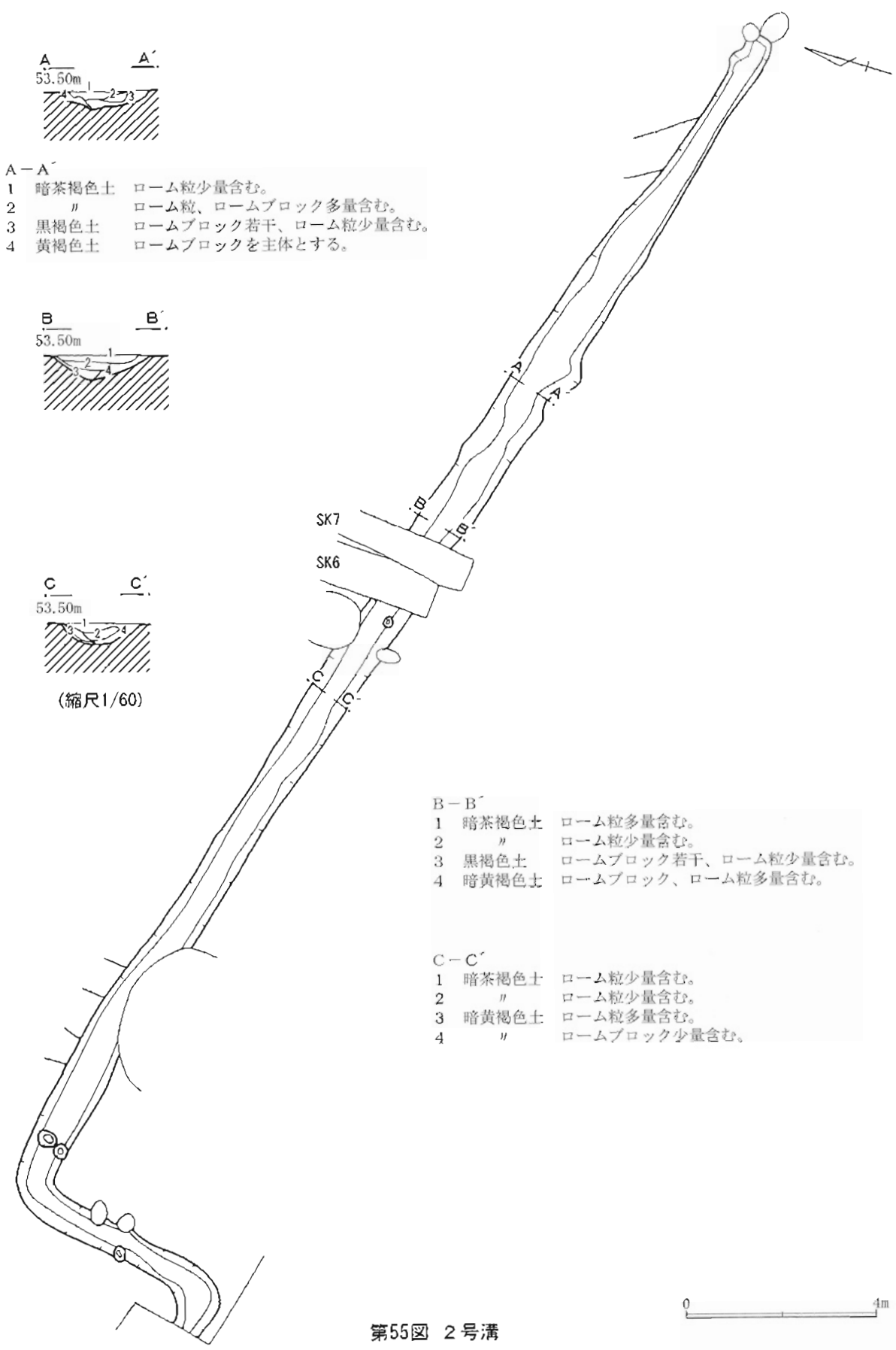
A-A'

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。炭化物少量含む。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物少量含む。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを主体とする。

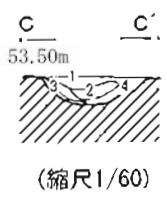
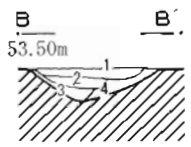
B-B'

- 1 黒褐色土 ローム粒若干含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量含む。

第54図 1号溝(縮尺 1/60)



- A-A'
- | | | |
|---|-------|---------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 2 | 〃 | ローム粒、ロームブロック多量含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | ロームブロック若干、ローム粒少量含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | ロームブロックを主体とする。 |

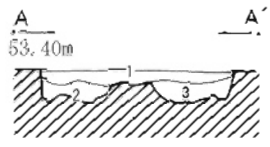
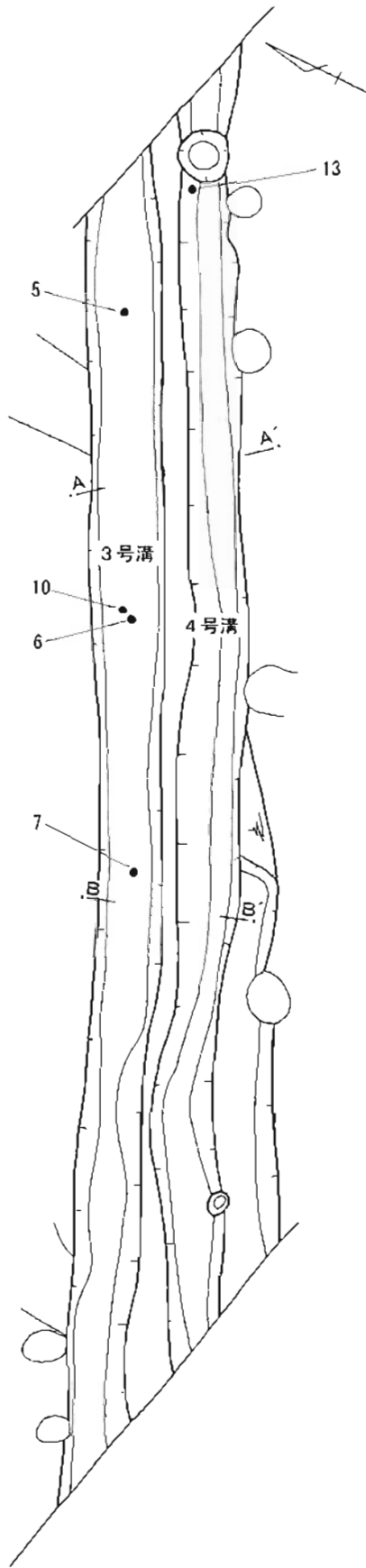


- B-B'
- | | | |
|---|-------|---------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 2 | 〃 | ローム粒少量含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | ロームブロック若干、ローム粒少量含む。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒多量含む。 |

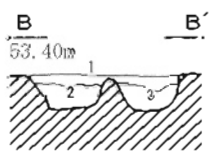
- C-C'
- | | | |
|---|-------|--------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 2 | 〃 | ローム粒少量含む。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 4 | 〃 | ロームブロック少量含む。 |

第55図 2号溝

0 4m



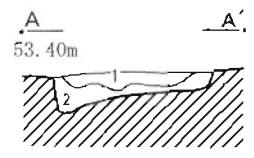
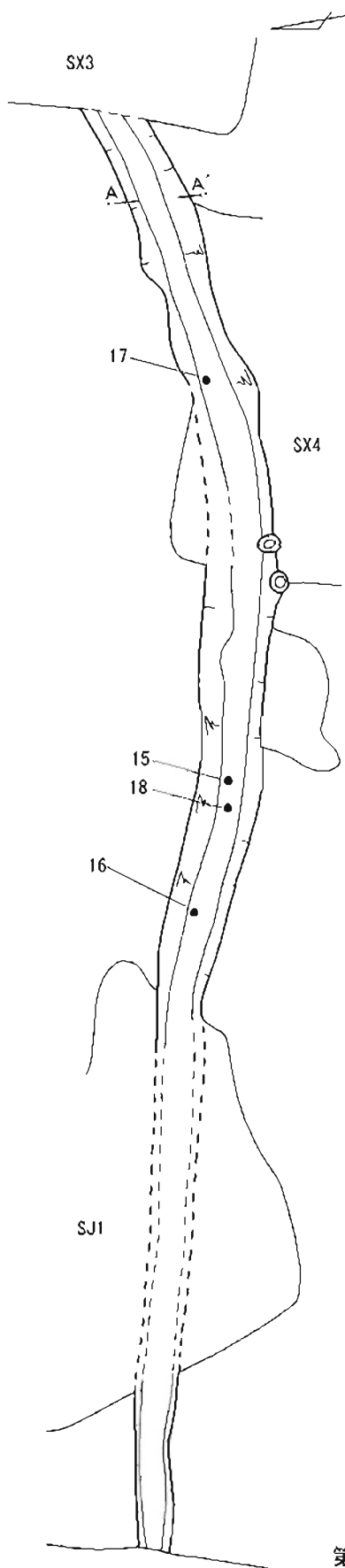
- A-A'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子多量。
 - 2 " ローム粒、ロームブロック多量含む。
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック若干、ローム粒少量含む。



- B-B'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量含む。
 - 2 " ローム粒少量含む。
 - 3 黒褐色土 ロームブロック若干、ローム粒少量含む。



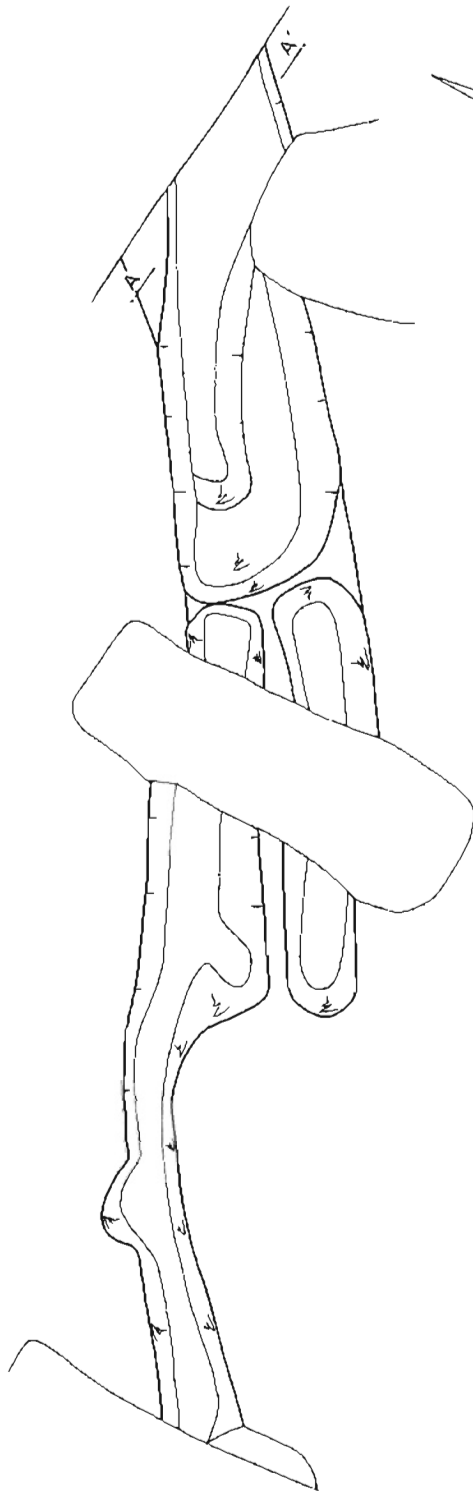
第56図 3・4号溝



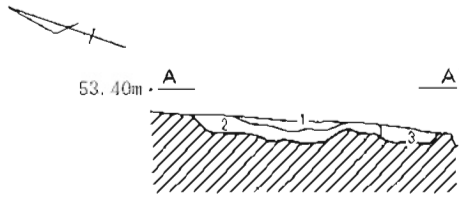
(縮尺1/40)

- A-A'
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック若干含む。
 - 2 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第57図 5号溝(縮尺1/80)



第58図 6号溝 (縮尺1/60)

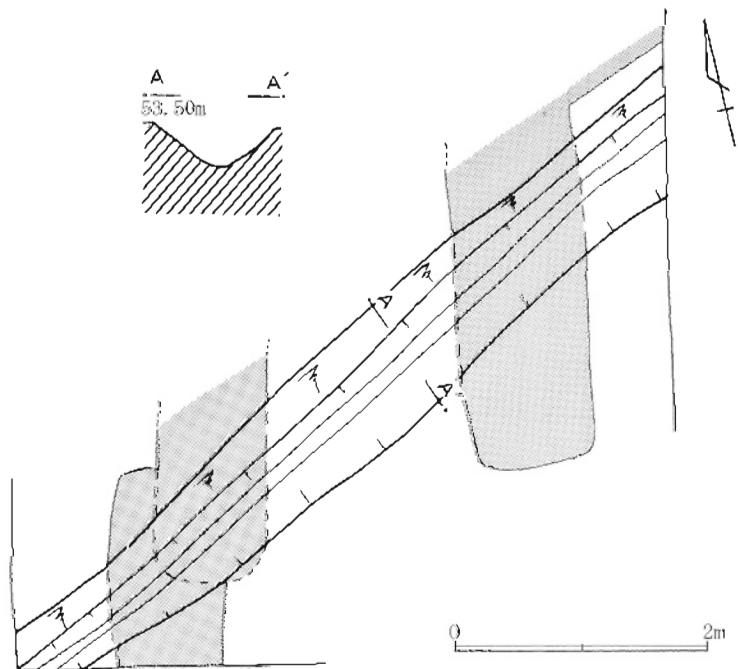


A-A'

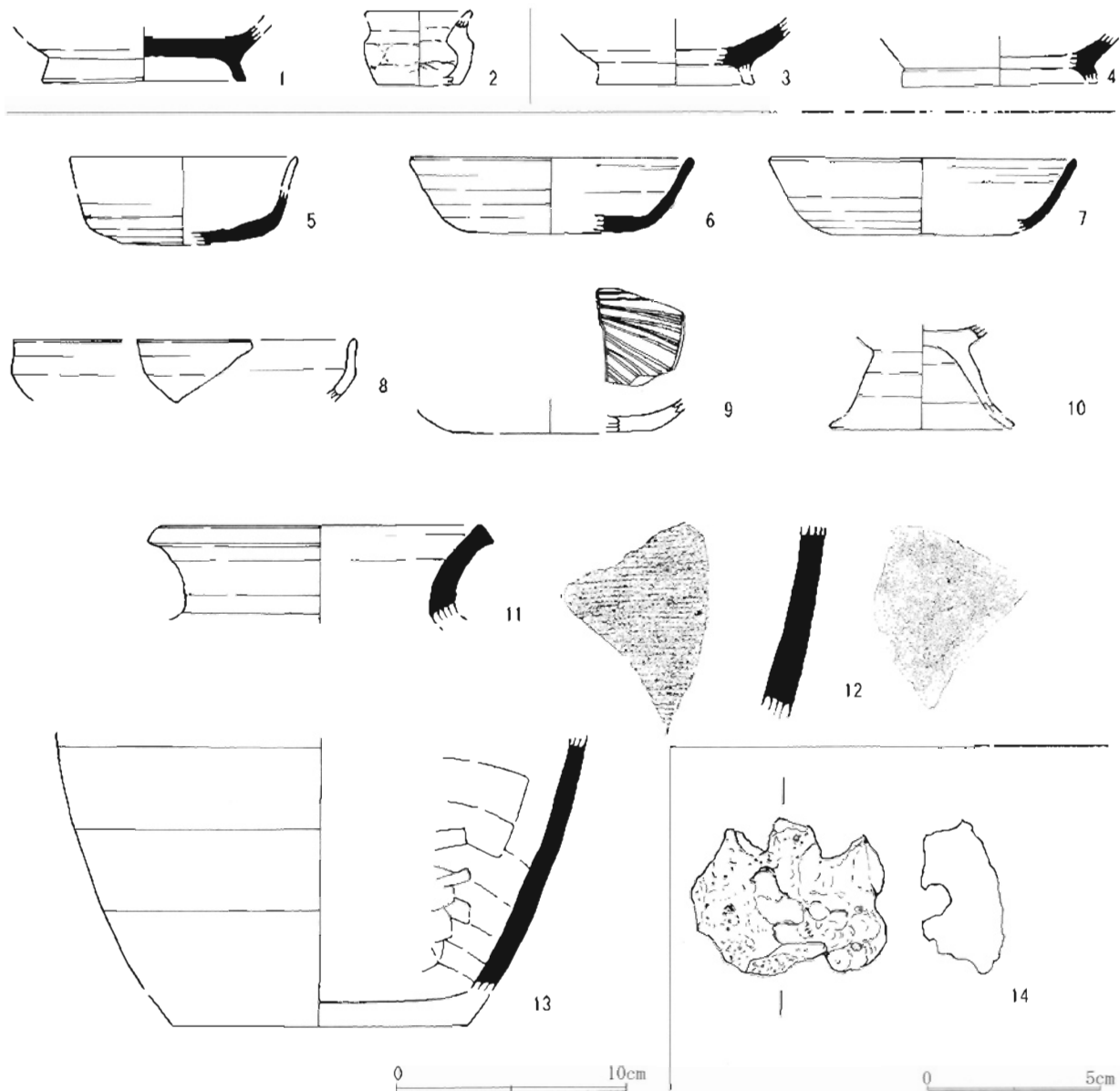
- 1 暗茶褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量含む。

7号溝

C区に位置する。F-2~G-1グリッドにあたる。31・34・36号土壙と切合い関係を有し、いずれの土壙も本溝跡の上層にのることが確認されている。全長6.75mにわたり検出された。主軸方位はN-62°-Eである。断面はV字形に近い。確認面からの深さは、約40cmである。



第59図 7号溝



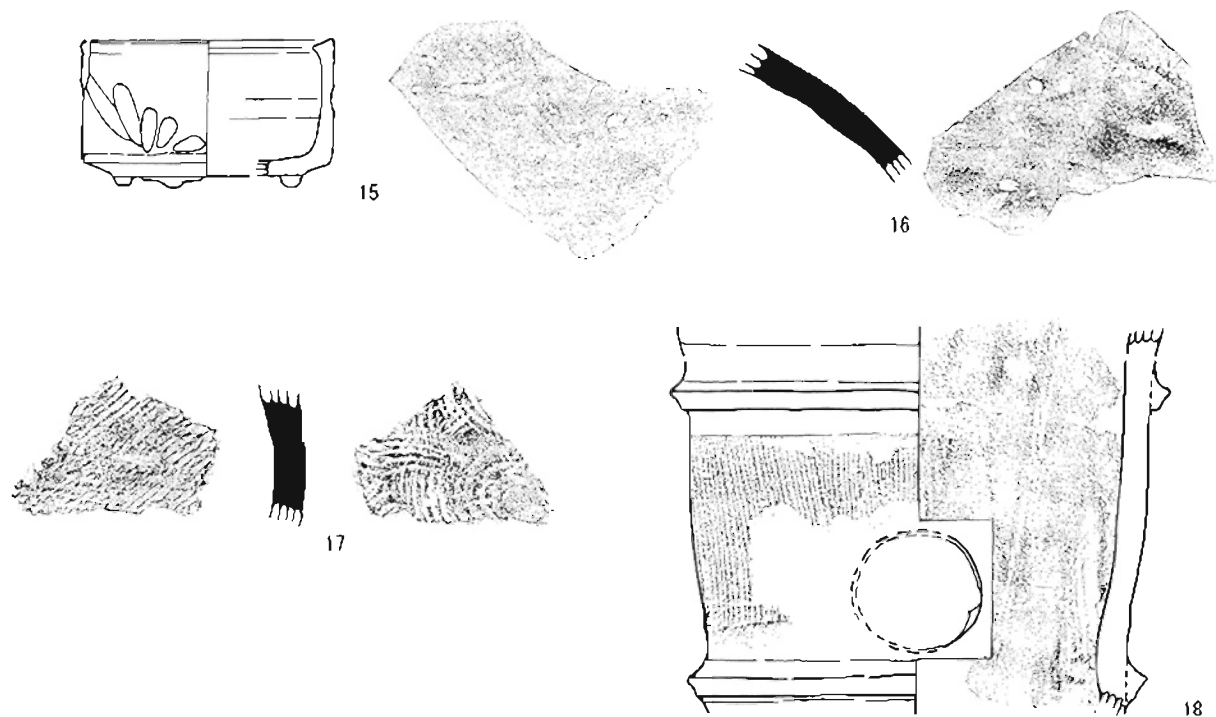
第60図 溝出土遺物(1)

1号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	高台埴	-	《2.4》	8.7	淡灰色	やや悪	石英、雲母、微砂粒	図示50%	覆土
2	小形土器	(4.5)	(3.2)	(3.5)	灰橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示30%	覆土、ミニチュア

2号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
3	高台埴	-	《2.4》	(6.8)	明灰色	普通	石英、黒色粒、白色粒	図示20%	覆土、末野
4	高台埴	-	《2.1》	(8.3)	明灰色	普通	黒色粒	図示15%	覆土、末野



第61図 溝出土遺物(2)

0 10cm

3・4号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
5	坏	-	《2.4》	(8.1)	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示25%	図示、底部全面回転ヘラ削り、群馬?
6	坏	(12.1)	3.3	(7.2)	明灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	図示25%	図示、底部周辺回転ヘラ削り、末野
7	坏	(13.1)	(3.4)	(7.8)	明青灰色	良好	石英、海綿骨針、(精良)	図示15%	図示、南比企
8	坏	(14.7)	《2.8》	-	橙色	普通	石英、微砂粒	図示10%	覆土
9	坏	-	《1.5》	(8.5)	明赤褐色	良好	石英、角閃石、(精良)	図示10%	覆土、内面放射状暗文
10	台付甕	-	《3.9》	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示90%	図示
11	甕	(13.8)	《4.4》	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	図示15%	覆土、末野
12	甕	-	-	-	暗灰色	普通	長石、チャート、片岩	破片	図示、外面平行叩き
13	甕	-	《11.2》	-	明灰色	良好	石英、長石、片岩	図示15%	図示
14	鉄滓	長さ 5.6cm	幅 4.6cm	厚さ 2.4cm	重さ 60.6g	磁着度弱	-	-	覆土、凹凸が目立ち、発泡している

5号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
15	火容れ	(9.7)	5.9	(7.2)	緑褐色	良好	素地土は精良で黒色の吹き出し微量	図示25%	図示、鉄軸・陶器、瀬戸・美濃系
16	甕	-	-	-	灰白色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	図示、外面平行叩き後回転ナデ、末野
17	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	図示、外面平行叩き、内面青海波

番号	種別	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	残存率	備考
18	円筒	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、パミス	縦ハケ6本/cm	横ハケ4本/cm + ナデ	図示15%	図示

IV お手長山古墳の調査

(1) 発掘調査・確認調査の経緯

お手長山古墳は、岡部町指定文化財（史跡）として昭和54年度指定を受けている。旧榛沢郡域では、寅稻荷塚古墳と並ぶ大型の古墳として知られてきた。墳丘の一部は大きく削平されており、墳形について、不明な部分が多かった。また、地元の伝承では、墳丘削平の際、銅椀の出土があったとされるが、その所在は明確ではない。

町の史跡指定に先立つ昭和50年には、本庄高等学校考古学部による墳丘測量調査成果が報告されており、学術的検討がなされた。

昭和63年度には、古墳南方に個人住宅の建設が予定され、これに先立ち周溝の一部の発掘調査が実施されている。

発掘調査では、後円部の状況が明らかとなった。また、この際、周溝からは土師器甕、須恵器破片等が出土している。

その後、平成2年度に社員寮建設に伴う熊野遺跡立堀地区（発掘調査時は立堀遺跡）の発掘調査が実施されることとなったが、開発予定地には、お手長山古墳の周溝が延びていることが確実であり、詳細な状況を把握するため、土地所有者である新神戸電機株式会社の協力を得、町教育委員会による確認調査を実施することとなった。

確認調査は、熊野遺跡立堀地区の調査と併行して実施した。調査期間は、平成2年11月1日～平成2年12月27日である。お手長山古墳周溝付近に第1～第3トレンチを設定し、周溝の状況を確認した。

(2) 発掘調査・整理報告書作成の経過

お手長山古墳の発掘調査は、昭和63年5月1日～5月15日にかけて実施された。発掘調査は、重機による表土の除去から行った。表土除去後、遺構の確認を実施した。確認の結果、縄文時代の住居跡1軒及びお手長山古墳周溝が検出された。

その後、お手長山古墳周溝の掘り下げを実施した。周溝内には、土師器・須恵器・石室の残骸と推定される角閃石安山岩が比較的まとまって出土した。縄文時代の住居跡からも縄文土器1個体が床面上から検出されている。

整理・報告書作成については、昭和63年度の調査以後、岡部町史一原始・古代資料編等で、成果

の一部を掲載していたが、平成18年4月1日より本格的に開始した。出土遺物の水洗・注記・接合・実測作業は、昭和63年度中に終了しており、遺構図の整理作業から着手した。その後、トレース・執筆作業等を順次行い、平成18年12月28日に、そのすべてが終了した。その後、印刷会社との契約を締結し、報告書刊行がなされたのは、平成19年2月28日のことであった。

(3) 昭和63年度の発掘調査で発見された遺構と遺物

【お手長山古墳周溝】

お手長山古墳周溝は、後円部のうち約16%が検出された。確認面からの深さは60cm～80cm程である。周溝底面及び立ち上がり部分にかけてピット、土壌が検出されている。古墳に伴うものと推定されるが、その性格については不明である。

周溝の立ち上がりは、内周部分は比較的緩やかで若干の段差を有す。外周部分はやや急である。

また、外周付近には、2箇所の攪乱が存在しており、遺構の一部が壊されていた。

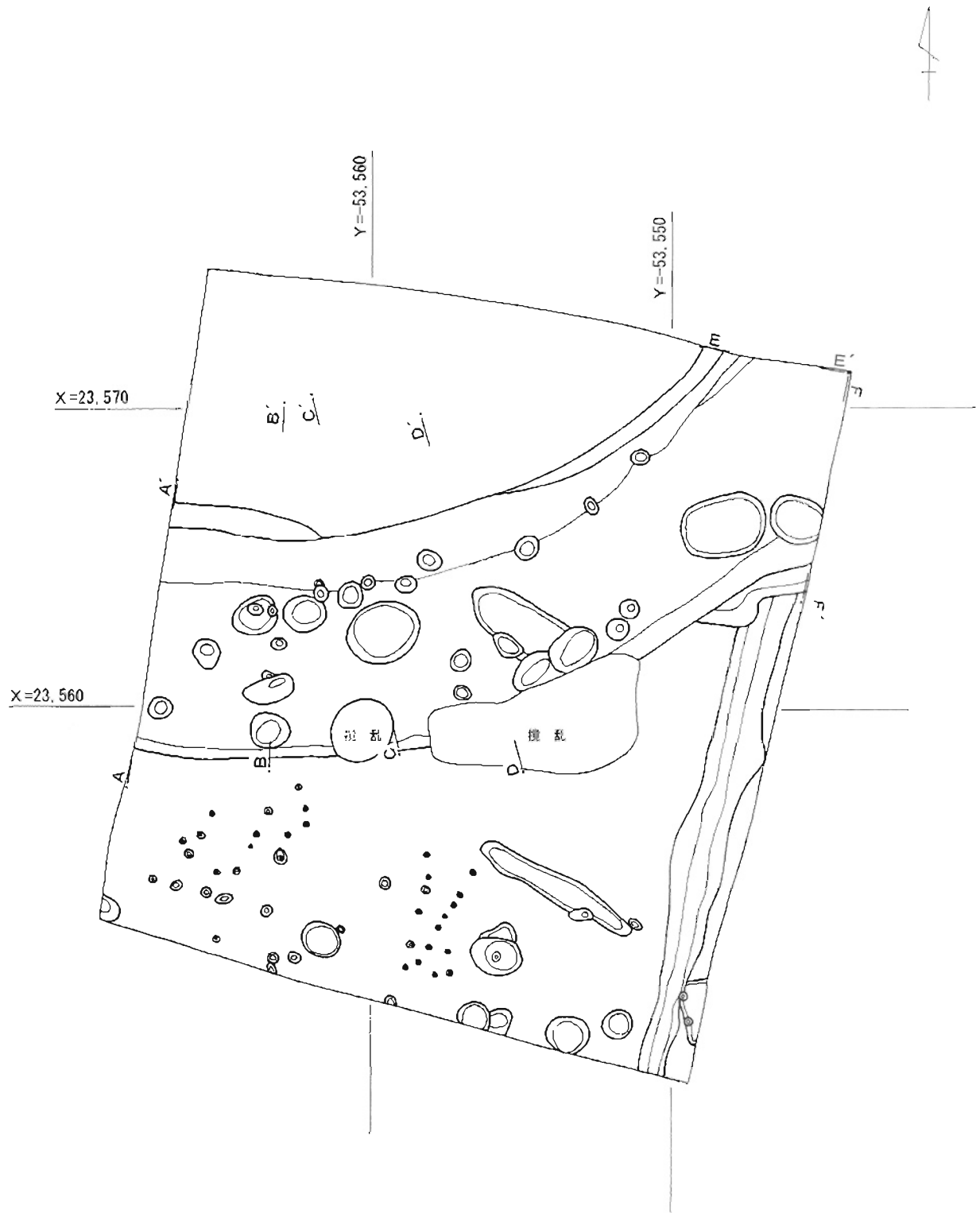
旧表土については、土層断面を見る限り確認できなかった。この点については、発掘調査直前まで耕作がなされていたことによるものであろう。

出土遺物については、古墳時代～近世に至るまで年代幅のある遺物が出土している。図示しなかったが、周溝内より角閃石安山岩が比較的まとまって出土している。

【その他の遺構】

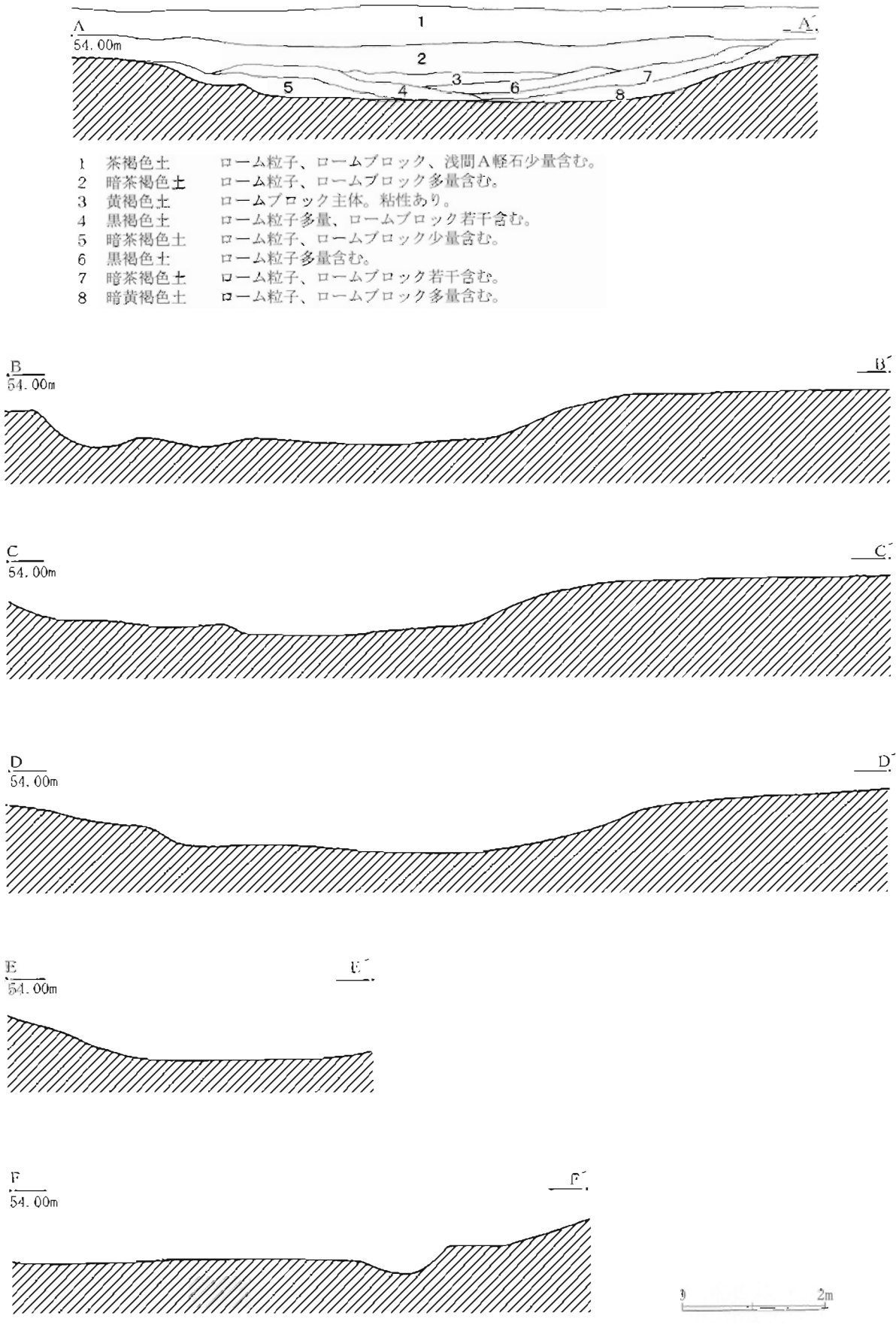
その他の遺構として縄文時代の住居跡1軒が検出されている。遺存状態は悪く、柱穴及び炉跡が確認されたのみであった。炉跡周辺から出土した縄文土器片から諸磯a期頃の所産と推定される。炉跡は、地床炉である。

また、周溝外側に土壌、溝跡等が検出された。これらの遺構については、覆土等の状況から近現代の所産と考えられる。

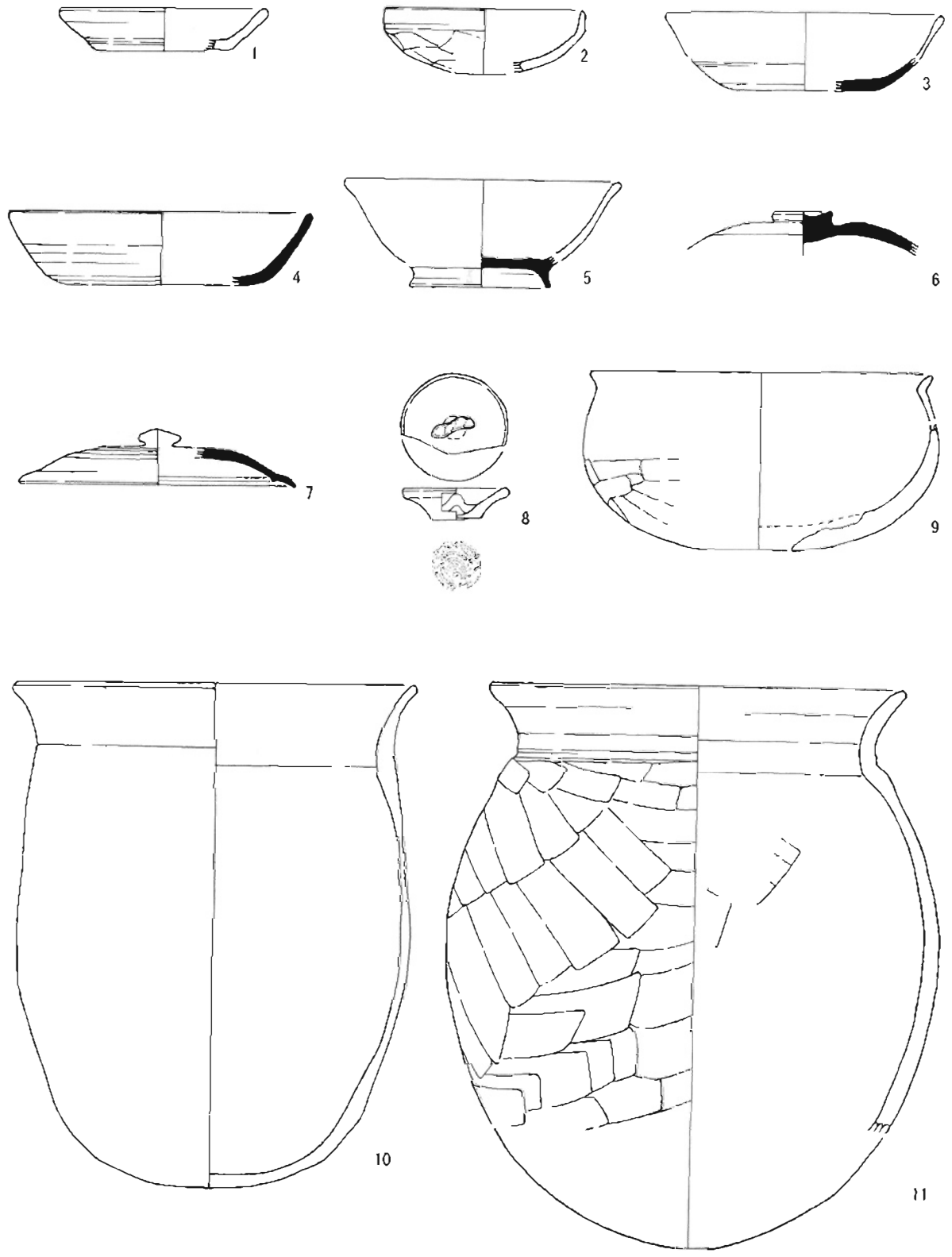


第62図 お手長山古墳発掘調査全測図（昭和63年度調査）

0 5m

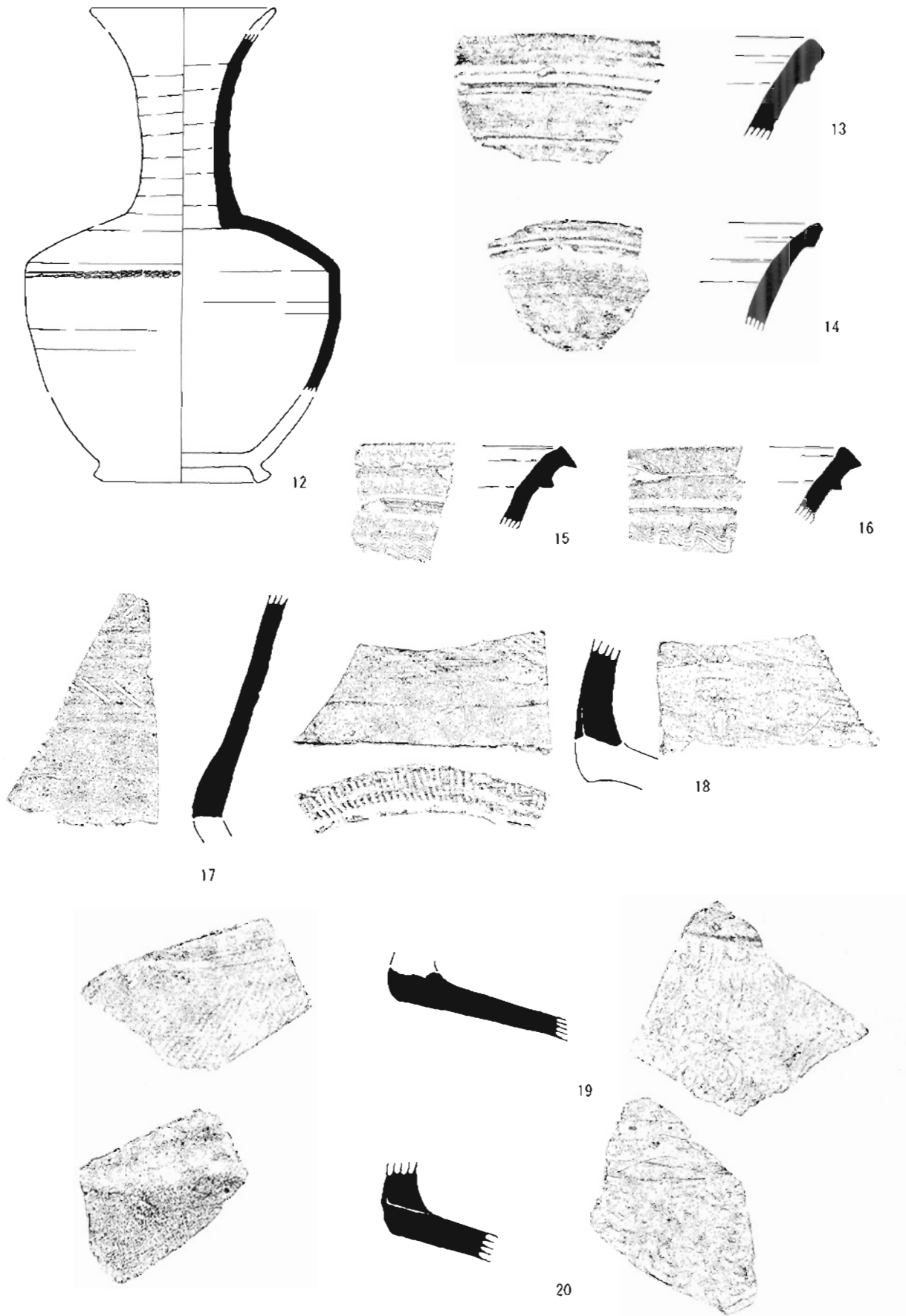


第63図 お手長山古墳土層断面図・エレベーション図



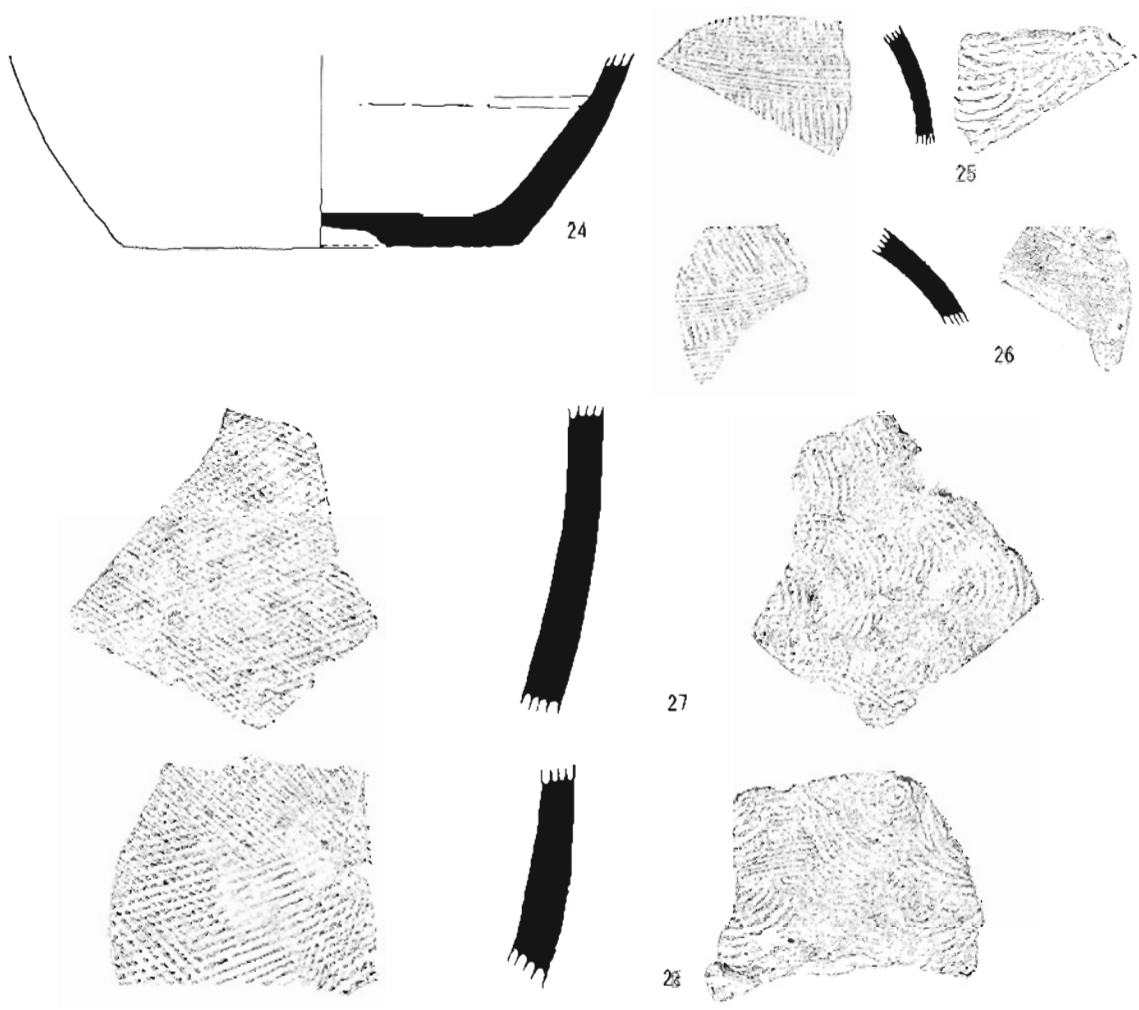
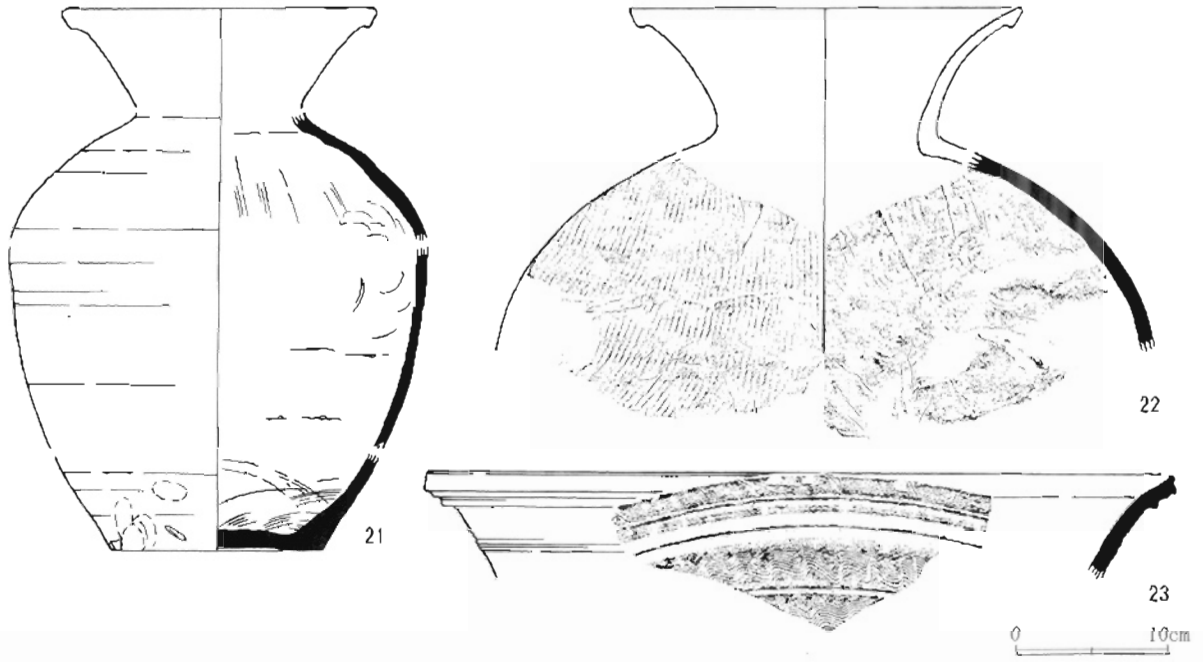
第64図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査）

0 10cm

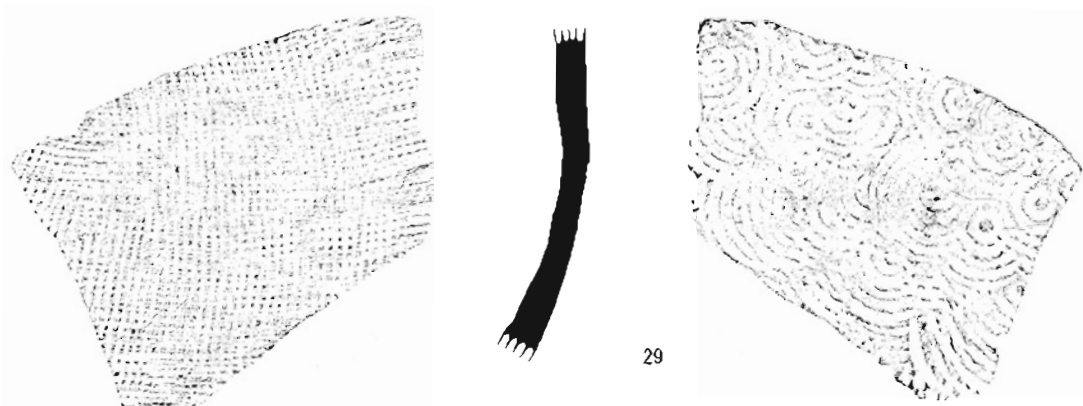


第65図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査）

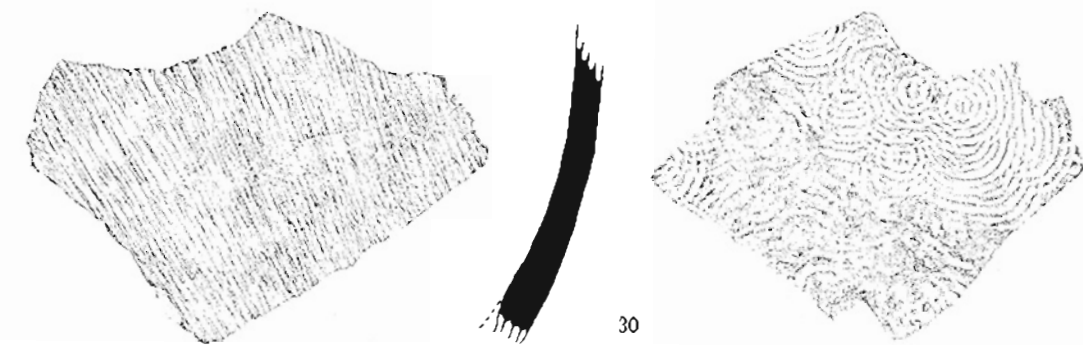
0 10cm



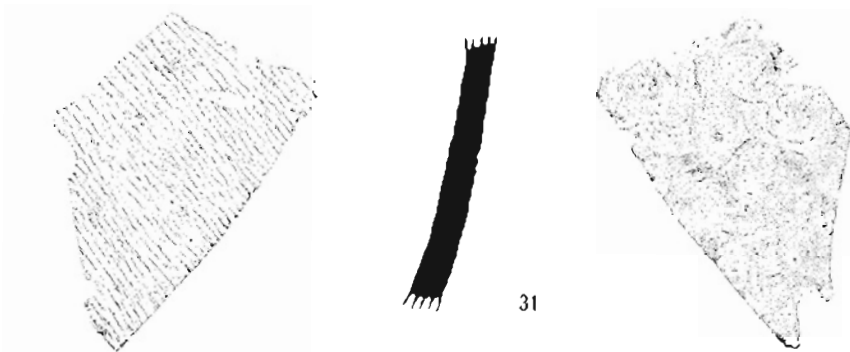
第66図 お手長山古墳周溝出土遺物（昭和63年度調査） 0 10cm



29



30



31



32

33

第67図 お手長山古墳周溝出土遺物 (昭和63年度調査)

0 10cm

周溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小皿	(10.0)	2.1	(6.8)	黄灰色	やや悪	石英、角閃石、褐色粒	図示25%	覆土、土師質土器、回転糸切り未調整
2	坏	(9.7)	(3.3)	-	茶褐色	良好	石英、角閃石	図示25%	覆土
3	坏	-	《1.7》	(7.0)	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示15%	覆土、回転糸切り未調整、末野
4	坏	(15.0)	3.7	(9.1)	明灰色	普通	石英、長石、チャート、海綿骨針	図示25%	覆土、底部回転範ケズリ、南比企
5	高台塊	-	《1.6》	6.9	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	図示90%	覆土、末野
6	蓋	-	《2.3》	-	黄灰色	不良	石英、長石、チャート、片岩	図示40%	覆土、磨滅あり
7	蓋	(13.7)	《1.9》	-	明灰色	普通	長石、黒色粒	図示10%	覆土、末野
8	蓋?	5.1	1.6	2.5	灰黄褐色	良好	素地土は精良、堅緻	図示70%	覆土、内面に取っ手、自然釉微量
9	碗	-	《6.6》	-	黄灰～灰黒	やや悪	砂粒、バミス多量(ザラつく)	図示30%	覆土、剥離及び磨滅あり
10	甕	(19.9)	25.5	-	明橙褐色	やや悪	石英、角閃石、砂粒	図示25%	覆土、磨滅が著しい
11	甕	(20.5)	《22.1》	-	茶褐色	普通	石英、角閃石、長石、砂粒	図示25%	覆土
12	長頸壺	-	《19.3》	-	灰色	良好	石英、片岩、長石粒多量(粗い)	図示30%	覆土、肩部に縄目1条、末野
13	甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面に沈線、末野
14	甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、磨滅あり、末野
15	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、波状文櫛歯6本、末野
16	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破片	覆土、波状文櫛歯6本、末野
17	甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面に斜位の線刻文、末野
18	甕	-	-	-	灰褐色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、平行叩き、頸接合面に叩き痕
19	甕	-	-	-	灰褐色	良好	長石、白色粒	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
20	甕	-	-	-	灰色	良好	長石、片岩	破片	覆土、平行+回転ナデ、内面青海波
21	甕	-	《29.0》	(14.0)	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示15%	覆土、外面回転ナデ、底部雑な手持範
22	甕	-	《13.5》	-	淡黄灰色	不良	長石、片岩、黒色粒	図示15%	覆土、平行+回転ナデ、内面青海波
23	甕	(49.4)	《7.0》	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示10%	覆土、波状文櫛歯10本、末野
24	甕	-	《7.7》	(15.6)	灰白色	不良	石英、長石、片岩、チャート	図示40%	覆土、磨滅が著しい
25	甕	-	-	-	灰色	普通	長石、片岩	破片	覆土、外面平行+横ハケ、内面青海波
26	甕	-	-	-	灰色	良好	長石、片岩	破片	覆土、外面平行+横ハケ、内面青海波
27	甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
28	甕	-	-	-	灰～橙褐	普通	石英、長石	破片	覆土、未還元、外平行、内青海波
29	甕	-	-	-	暗灰褐色	良好	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
30	甕	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
31	甕	-	-	-	暗灰色	良好	長石、片岩、堅緻	破片	覆土、外平行、内青海波+ナデ末野
32	甕	-	-	-	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野
33	甕	-	-	-	明灰色	良好	長石	破片	覆土、外面平行、内面青海波、末野

(4) 平成2年度の確認調査で発見された遺構と遺物

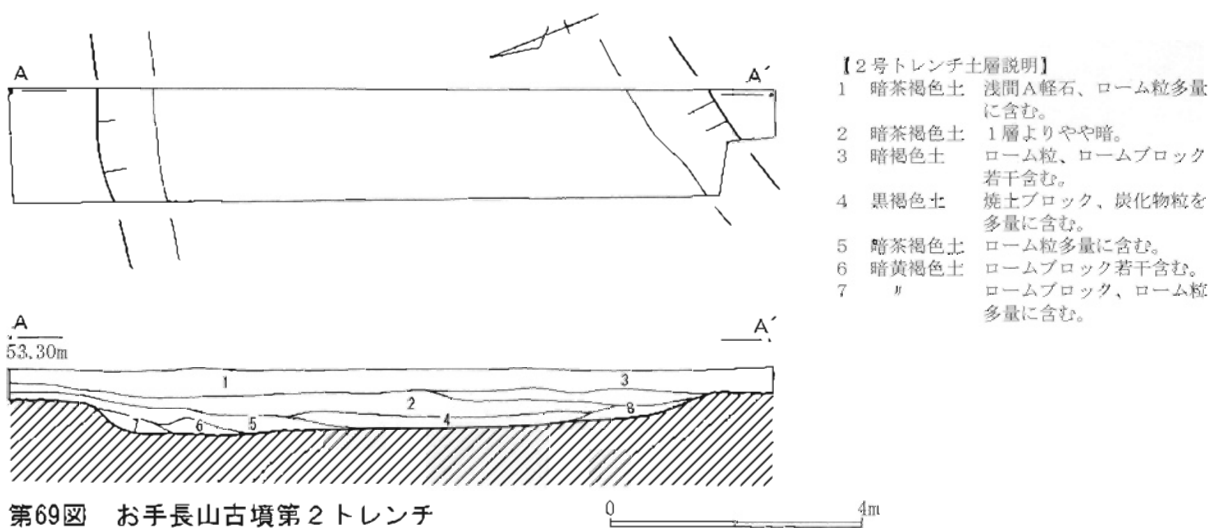
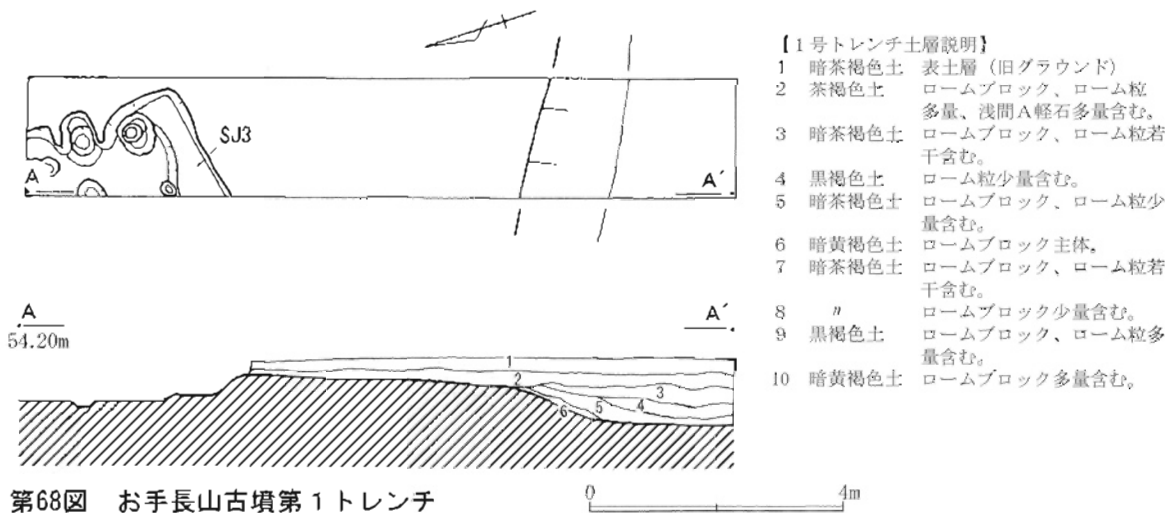
【第1トレンチ】

お手長山古墳後円部周溝外周の確認を行うために設定したトレンチである。調査では、予想どおり周溝外周の立ち上がりを確認することができた。トレンチは、幅2.0m、長さ11.4mにわたる。表土から確認面までは、重機による掘削である。

トレンチ内には、周溝の他、竪穴住居跡1軒が

検出されている。この竪穴住居跡は、熊野遺跡（立堀地区）3号住居跡として取り扱う。当住居跡からは、9世紀後半代の土師器・須恵器類が大量に出土している。

周溝は、地表下15~30cmのソフトローム面において確認されている。確認面からの深さは、40cmである。外周の立ち上がりは緩やかである。周溝内からの出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。



【第2トレンチ】

お手長山古墳後円部の規模と周溝外周の確認を行うために設定したトレンチである。トレンチは、幅2m、長さ12.5mにわたる。表土から確認面までは重機による掘削である。

トレンチ内では、周溝内周・外周それぞれの立ち上がりを確認することができた。周溝は、地表下40～50cmのソフトローム面において確認されている。内周、外周ともに立ち上がりは緩やかであり周溝底面は、墳丘側の方がやや浅くなっている。

トレンチ設定は、括れ部付近を想定したものであったが、後円部径が予想に反して大きく、想定した箇所とは異なるものであった。

出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。

【第3トレンチ】

お手長山古墳前方部の状況を確認するためのトレンチである。ほぼL字形に設定した。トレンチの規模は、南北方向で長さ15.6m、東西方向で長さ12.24mであり、幅2mである。表土から確認面までは、重機による掘削である。

トレンチ内では、前方部北コーナーの状況を確認することができた。コーナー部には、長軸3.9m（東西）、短軸2.5m（南北）の長方形の突出部が付随することが明確となった（短軸については北限が確認できなかつたため推定値である）。この突出部は、前方部から一段低くなっている。周溝は、地表下40～50cmのソフトローム面において確認されている。

周溝は、南北方向のトレンチでは、比較的急傾斜をもって立ち上がり、東西方向では緩やかな傾斜である。底面は比較的平坦である。

出土遺物は、土師器・須恵器等であるが、いずれも古墳築造時のものとは異なる。

(5) 発掘調査・確認調査から推定されるお手長山古墳の規模と年代

昭和63年度の発掘調査・平成2年度の確認調査により、墳丘の形状及び周溝の状況等が、ほぼ確定した。これらの調査成果によれば、後円部径37m、前方部長12.5m、計49.5mの後円部の短い帆立貝式古墳であることが判明し、現存する墳丘から想定される墳形とは大きく異なるものであった。これらの規模から、当古墳は、旧榛沢郡域において6世紀後半代の築造と推定される寅稻荷塚古墳に次ぐ規模を有することが明確となった。

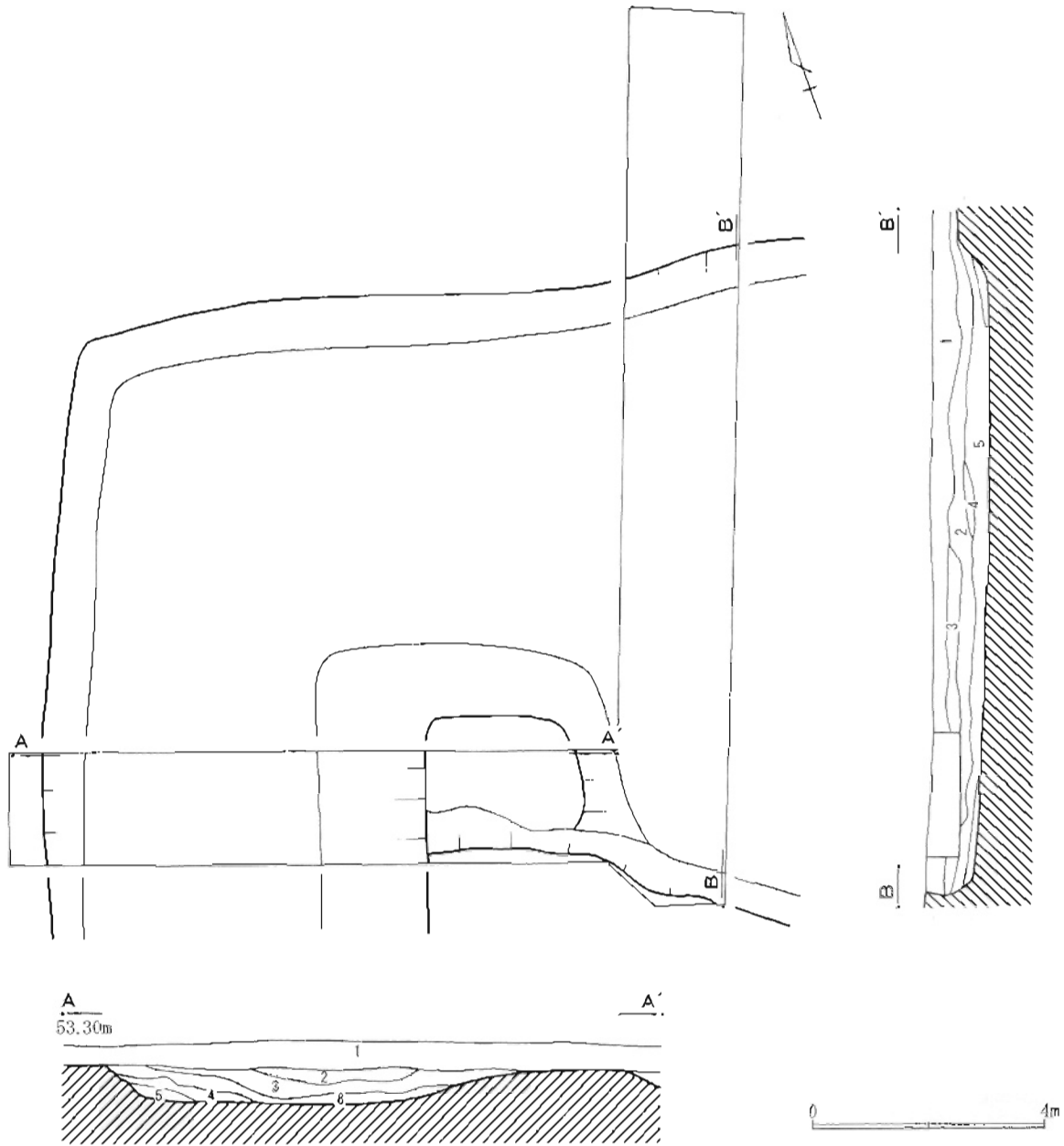
出土遺物については、時期を明確に確定するのは少ない。古墳時代後期の遺物としては、第64図Na.10の土師器甕等が該当する。また、埴輪については、発掘調査・確認調査あわせて皆無であった。このことから、本古墳については、埴輪を伴わない時期のものと判断した。

また、石室の残骸と推定される角閃石安山岩が現在も散乱していること、銅椀出土の伝承があること、埴輪が樹立されないこと等を勘案すると、6世紀末～7世紀初頭頃の古墳と想定する。

周溝から出土した遺物については、その多くが7世紀末～中世にかけての所産であり、古墳築造を示す遺物とは考えられず、周辺の住居跡等からの流入か、古墳築造後、墳丘周辺で行われた行為によるものと推定されるのである。

また、当古墳に近接する熊野遺跡（立堀地区）1号住居跡は、住居跡自体の時期は、古墳築造時期とはかけ離れているものであるが、カマド補強材として使用されている埴輪は注目に値する。

これらの埴輪については、発掘調査・確認調査において埴輪の出土がみられないことから、お手長山古墳に樹立されたものというより、周辺古墳から採取されたものと考えている。



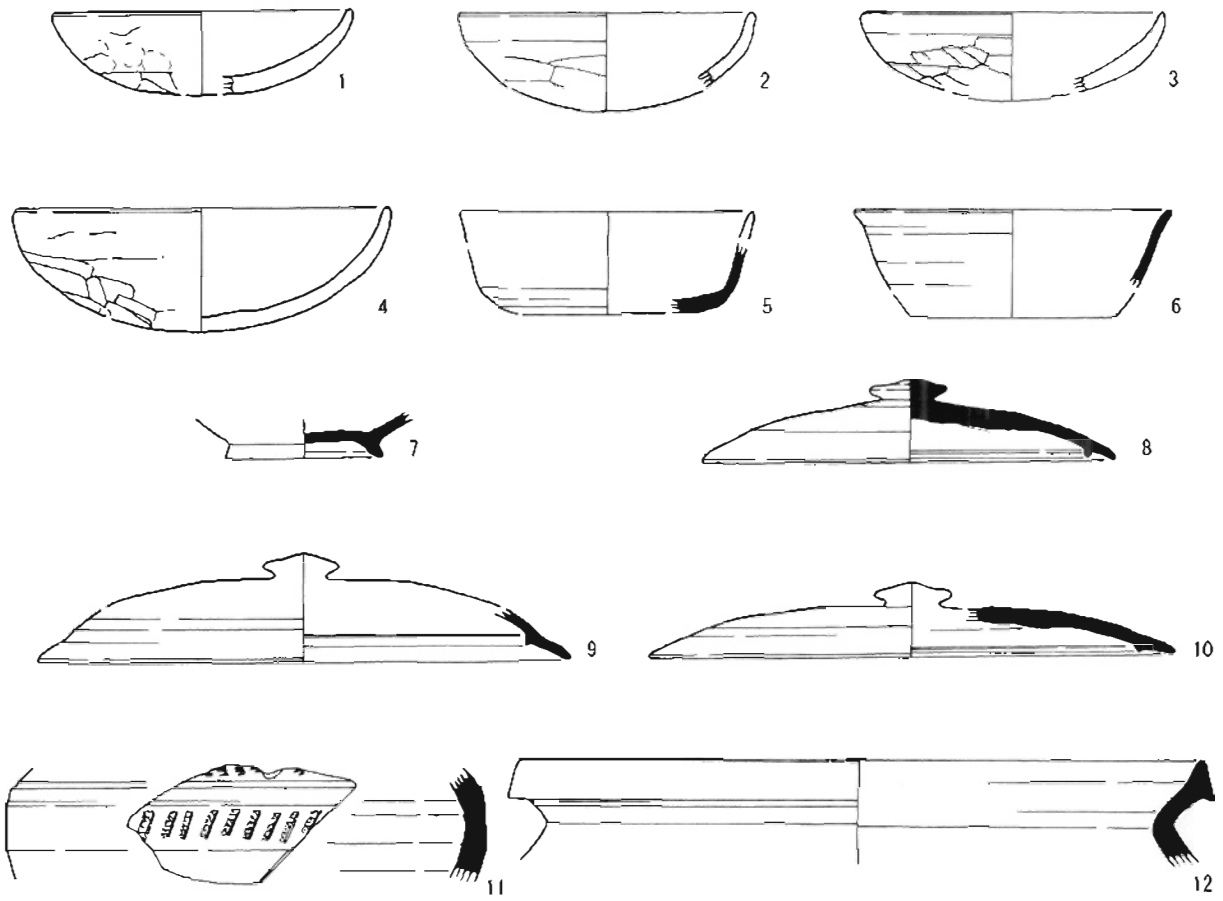
第70図 お手長山古墳第3トレンチ

【A-A'土層説明】

- 1 暗茶褐色土 表土層（旧グラウンド）
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、焼土粒若干含む。
- 3 " " ローム粒少量、2層より色調暗。
- 4 " " "、ロームブロック少量含む。
- 5 暗茶褐色土 ロームブロック主体。
- 6 茶褐色土 ロームブロック主体。
- 7 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒少量含む。

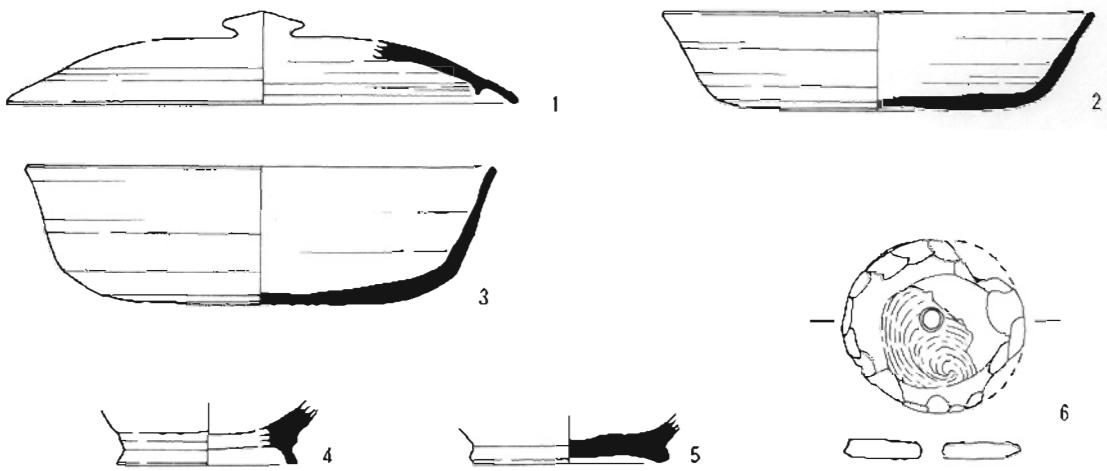
【B-B'土層説明】

- 1 暗茶褐色土 浅間A軽石、ローム粒多量含む。
- 2 暗茶褐色土 2層よりやや暗。
- 3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック若干含む。
- 4 黒褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含む。
- 5 " " ローム粒多量含む。軟質。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック若干含む。
- 7 " " ロームブロック、ローム粒多量含む。



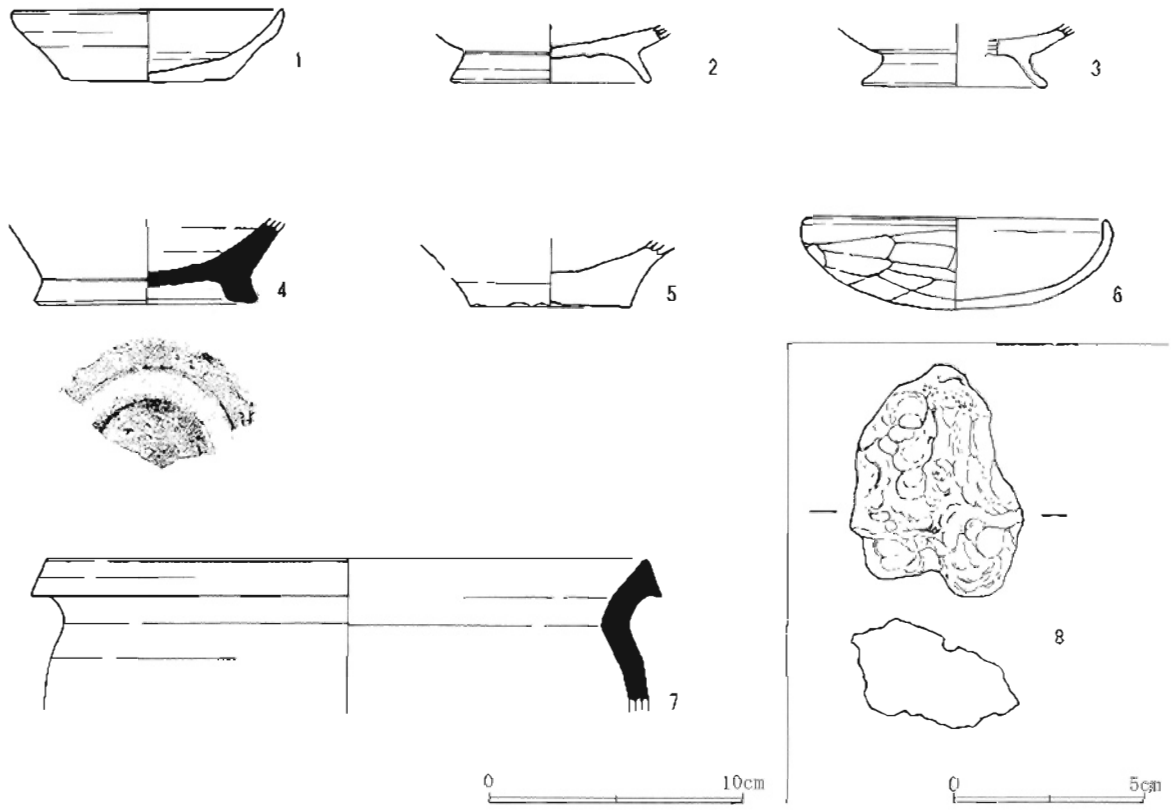
第71図 お手長山古墳第1トレンチ出土遺物

0 10cm

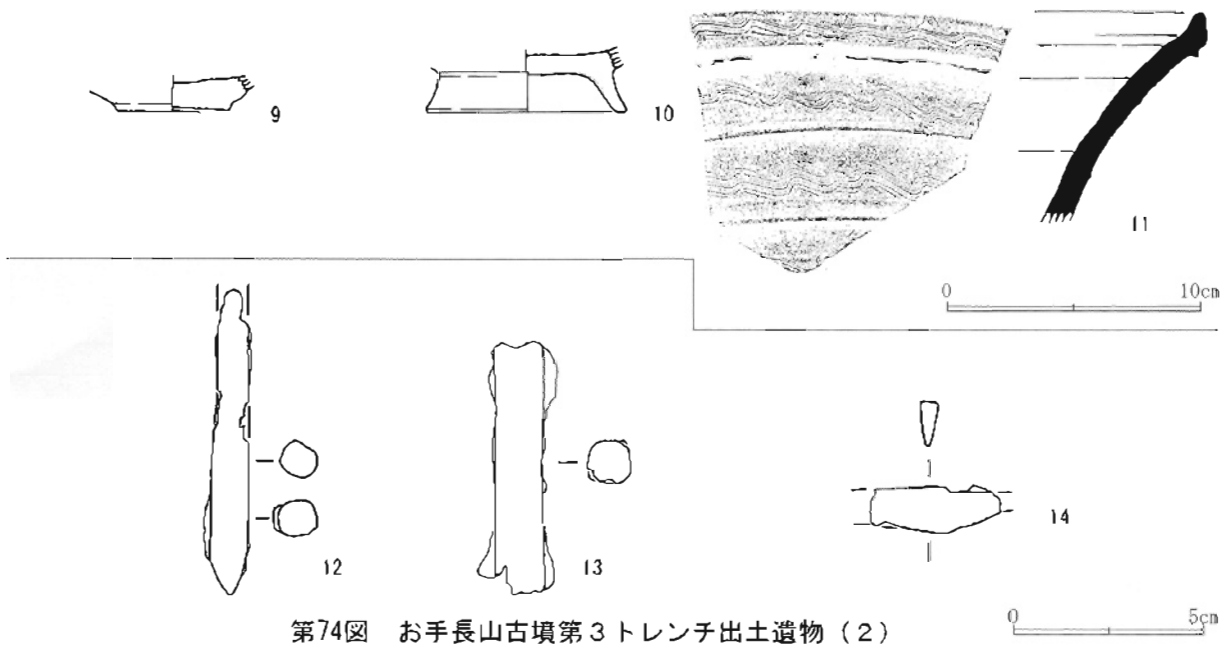


第72図 お手長山古墳第2トレンチ出土遺物

0 10cm



第73図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物（1）



第74図 お手長山古墳第3トレンチ出土遺物（2）

第1トレンチ出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(11.7)	3.3	-	褐色	普通	石英、角閃石	図示25%	図示
2	坏	(11.6)	3.9	-	茶褐色	良好	石英、角閃石、(精良)	図示20%	一括
3	坏	(11.8)	(3.5)	-	灰橙褐色	普通	石英、長石、角閃石	図示20%	図示
4	坏	(14.7)	4.9	-	暗褐色~茶褐色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示40%	一括
5	坏	-	《2.8》	(8.9)	明灰色	良好	石英、長石	図示10%	図示、底部無調整、末野
6	坏	(12.5)	《3.3》	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	一括、末野
7	高台埴	-	《1.8》	(6.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示45%	図示、末野
8	蓋	(16.2)	3.3	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	一括、末野、鈕は擬宝珠
9	蓋	(21.1)	《2.1》	-	明灰色	良好	石英、片岩	図示23%	図示、末野
10	蓋	(20.6)	《1.9》	-	淡灰色	良好	石英、片岩、黒色粒	図示20%	図示、末野
11	ハソウ	-	《4.6》	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	一括、櫛歯状工具の押し引き文
12	鉢	(27.0)	《4.2》	-	淡灰色	良好	石英、長石、片岩	図示10%	一括、末野

第2トレンチ出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	蓋	(19.7)	《2.5》	-	淡灰色	良好	石英、長石、片岩	図示10%	図示、末野
2	坏	(16.8)	3.8	(12.4)	淡灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	図示30%	図示、底部全面回転ヘラ削り、末野
3	坏	(18.2)	5.4	(15.5)	灰白色	不良	石英、長石、砂粒	図示30%	一括、底部全面回転ヘラ削り、末野
4	高台埴	-	《2.5》	(7.9)	明灰色	不良	微砂粒、酸化鉄粒	図示15%	一括、末野
5	高台埴	-	《1.9》	(7.2)	灰白色	やや悪	長石、片岩	図示20%	一括、末野
6	紡錘車	長さ 6.9cm	幅 7.1cm	厚さ 0.7cm	明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	80%	一括、須恵坏の底部を転用、南比企

第3トレンチ出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小皿	10.7	2.8	6.6	明橙褐色	普通	石英、微砂粒、酸化鉄粒	図示90%	周溝内、土師質、回転糸切り未調整
2	高台埴	-	《2.3》	(7.7)	灰橙~灰黒	やや悪	石英、角閃石、パミス、酸化鉄粒	図示40%	周溝内、土師質、内面黒色処理
3	高台埴	-	《2.5》	(7.1)	橙褐色	やや悪	石英、長石、砂粒	図示20%	周溝内、土師質、磨滅あり
4	長頸瓶	-	《3.4》	(8.5)	淡灰色	良好	長石、黒色粒	図示25%	周溝内、底部にヘラ記号、群馬産?
5	鉢?	-	《2.7》	6.3	淡灰褐色	普通	石英、雲母、微砂粒(精良)	図示95%	図示、土師質、回転糸切り未調整
6	坏	(11.8)	3.6	-	灰橙褐色	不良	石英、角閃石、砂粒(粗い)	図示90%	周溝内+4トレンチ内、歪みあり
7	鉢	(23.7)	《6.2》	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩、黒色粒	図示10%	図示、末野
8	鉄滓	長さ 6.2cm	幅 4.6cm	厚さ 3.0cm	重さ 98.1g	磁着度弱	-	-	一括、発泡、凹凸が目立つ

第3トレンチ出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
9	小皿	-	《1.4》	4.4	灰褐色	普通	石英、雲母、(精良)	図示80%	図示、土師質、回転糸切り未調整
10	高台埴	-	《2.5》	(7.8)	明黄赤色	やや悪	石英、角閃石、酸化鉄粒、微砂粒	図示30%	図示、土師質
11	甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、片岩	破片	図示、波状文5~7条・4段、末野
12	釘?	長さ 8.0cm	幅 1.0cm	厚さ 1.0cm	重さ 12.8g	-	-	破片	一括、先端部尖る
13	不明鉄製品	長さ 6.7cm	幅 1.3cm	厚さ 1.1cm	重さ 25.5g	-	-	破片	一括、亀裂が著しい
14	刀子	長さ 3.5cm	幅 1.2cm	厚さ 0.4cm	重さ4.2g	-	-	破片	一括、刃部と茎部先端部欠損

V まとめ

(1) 熊野遺跡立堀地区の調査

本調査では、A～C地点において、遺構・遺物が検出されている。

古代の主要遺構として堅穴住居跡3軒がある。

1号住居跡は、A地点の調査区西端に位置する。出土した遺物は、土師器・須恵器の他に埴輪片がカマドの補強材として使用されていた。

土器類は、年代幅が広く堅穴住居跡の年代は、明確ではないが、9世紀末～10世紀前半を想定する。

また、カマドの補強材として使用された埴輪は、貼付口縁を有する特徴的なものである。この種の埴輪は、前橋市綿貫観音山古墳、同金冠塚古墳、藤岡市七輿山古墳など上毛野方面に散見される。

さらに、本住居跡出土の埴輪の胎土に共通するのは、角閃石安山岩を混入するという点である。主に上毛野から武蔵北部の利根川流域に分布する一群であり、以上の点から埴輪が樹立された古墳被葬者は、上毛野方面との強い関連性を窺うことができる。当住居跡出土の埴輪が樹立された古墳については明確ではないが、角閃石安山岩の混入から6世紀後半以降の年代が想定されるものである。近接するお手長山古墳もその候補となるが、2次にわたる周溝の調査では埴輪が全く検出されなかったこと、現在においても埴輪の採集ができないこと等を考慮した場合、その可能性は低いものとする。

2号住居跡からは比較的まとまった遺物が出ており、土師器・須恵器・鉄製品・砥石等がある。土師器は、底部平底のものが主体であり、底部の縮小傾向、体部が大きく開く等の特徴から、富田編年Ⅶ期に該当するものである。また、体部が大きくへら削り調整されるNo.1、3等の存在は北武蔵型杯の型式組列の最終段階に近いものであろう。土師器甕は、前段階に比較しコの字の形態が崩れ気味となっている。須恵器高台碗は、ほぼ末野産であり、土師器の年代観と齟齬はない。

3号住居跡は、お手長山古墳第1トレンチで確認された住居跡である。土師器杯・甕、須恵器杯・甕等が出土している。それぞれの器種の形態等から2号住居跡に近い年代が想定される。

(2) お手長山古墳の発掘・確認調査

お手長山古墳の調査は、昭和63年の発掘調査・平成2年の確認調査と2次にわたる調査において墳形が確定した。これらの調査成果によれば、後円部径37m、前方部長12.5mの「帆立貝式古墳」であることが明確となった。また、先述したように埴輪を伴わない古墳であること等を考慮した場合、7世紀前後の年代を想定してよいであろう。

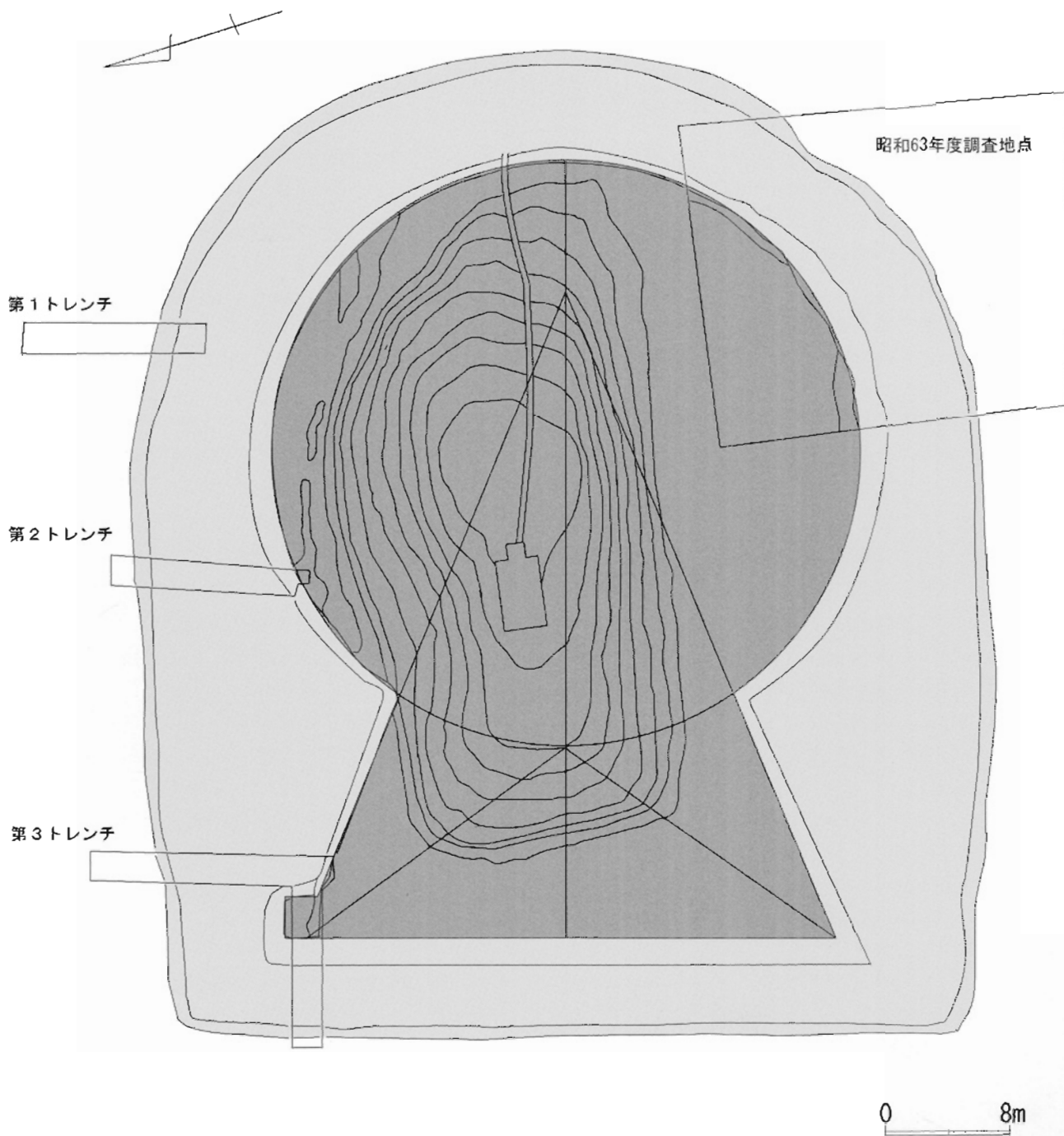
周溝覆土からは、多量の土師器・須恵器類が出土したが、明らかに時代の異なるものが多く、古墳築造段階の遺物については明確ではない。この点は、当古墳周辺で、祭祀等が後世においても行われていた可能性を暗示するものである。

榎挽台地北縁部の古墳に関する発掘調査は、昭和63年度のお手長山古墳を嚆矢とし、僅かながらであるが、進展しつつある。この間、熊野・中宿遺跡をはじめとする榛沢評・郡家関遺跡群の調査も実施し、古墳時代から律令期への移行について論ずる土台が整いつつあることは、旧岡部町時代からの発掘調査の大きな成果と言えるであろう。

本地域の首長墓の変遷は、横柄板鋳留短甲・五鈴付鏡板を出土した四十塚古墳築造(5世紀末頃)以降から明確化する。その後、6世紀後半に寅稻荷塚古墳(前方後円墳51m)、7世紀前後の時期にお手長山古墳(帆立貝式古墳49.5m)、7世紀前半代に内出八幡塚古墳(円墳33m)、7世紀中頃に愛宕山古墳(方墳37m)という変遷を辿る。

このような連続的な首長墓の系譜を迎える地域は、榛沢郡域では、当地域のみであり、古墳時代首長の伝統的勢力基盤のもとに、榛沢評・郡家が成立することが考えられるものである。

今後、当地域における有力古墳の内容について、さらに確認作業を行い、より綿密な首長墓系列を調査することが大きな課題となろう。



第75図 お手長山古墳墳丘測量図(縮尺1/400)

写 真 图 版



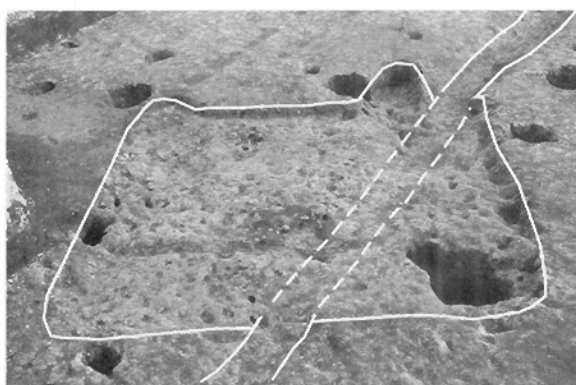
A区全景



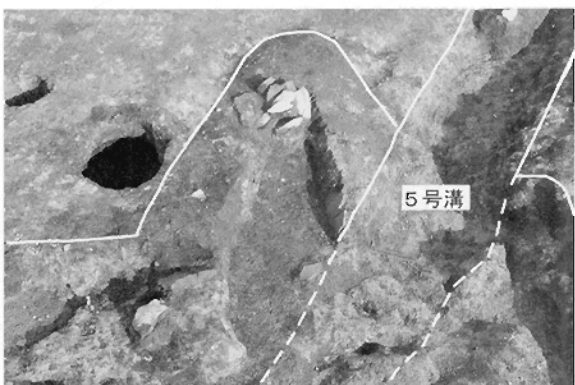
調査風景 (南より)



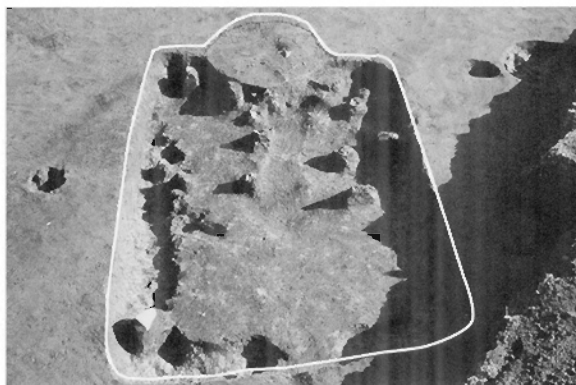
A区西部の遺構群



1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡カマ下遺物出土状況



2号竪穴住居跡遺物出土状況

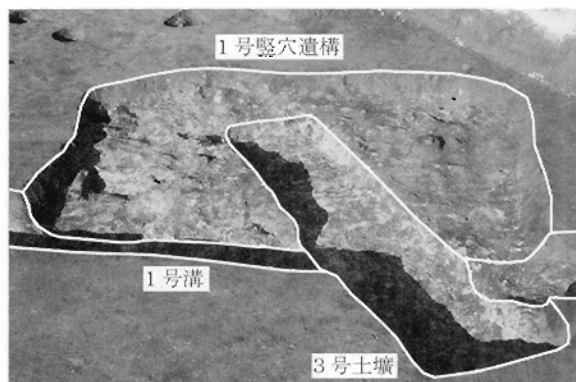


3号竪穴住居跡遺物出土状況

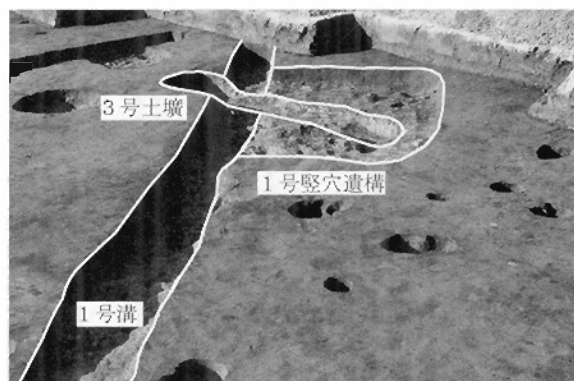


3号竪穴住居跡カマ下遺物出土状況

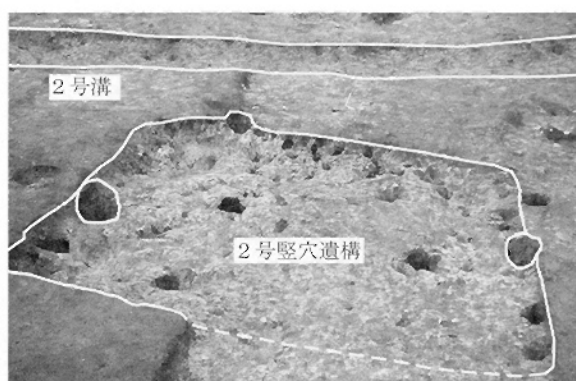
図版 2



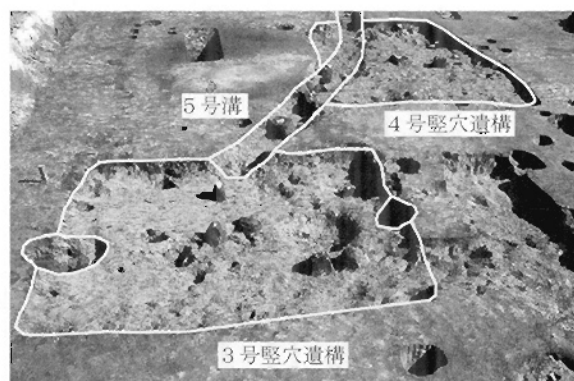
1号堅穴遺構・1号溝・3号土壇（西方より）



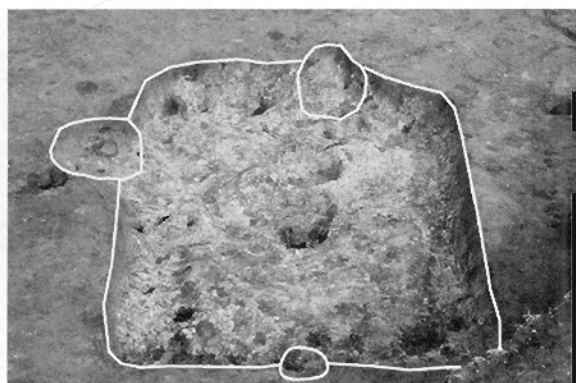
1号堅穴遺構・1号溝・3号土壇（南方より）



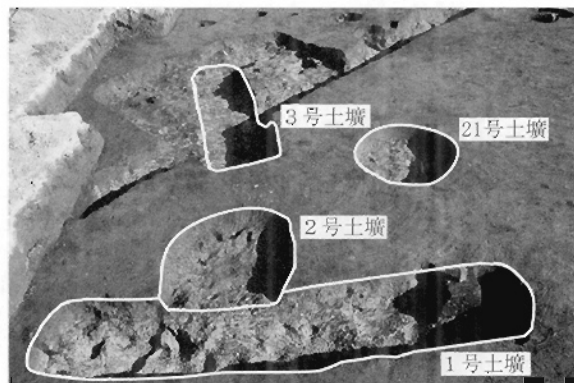
2号堅穴遺構



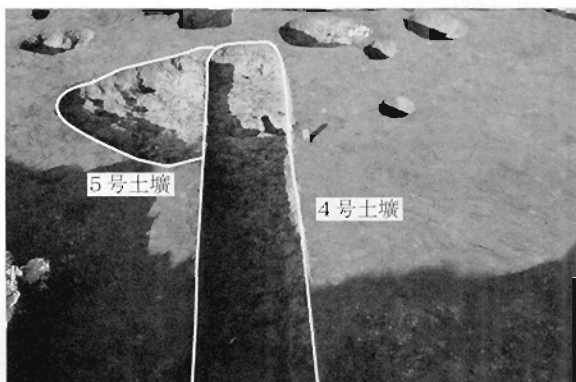
3・4号堅穴遺構



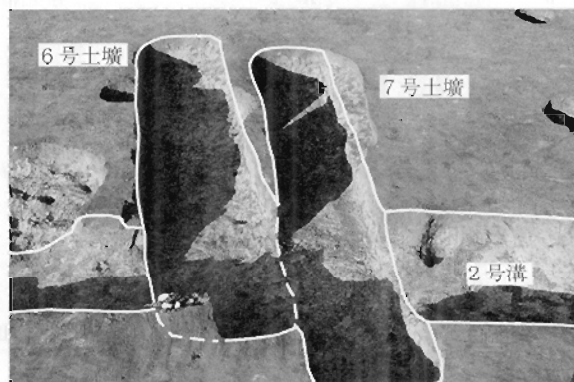
5号堅穴遺構



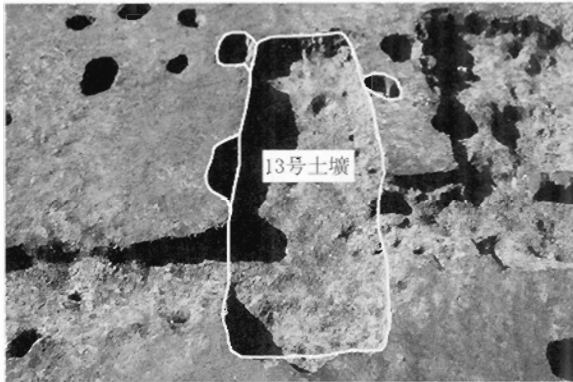
1～3・21号土壇



4・5号土壇



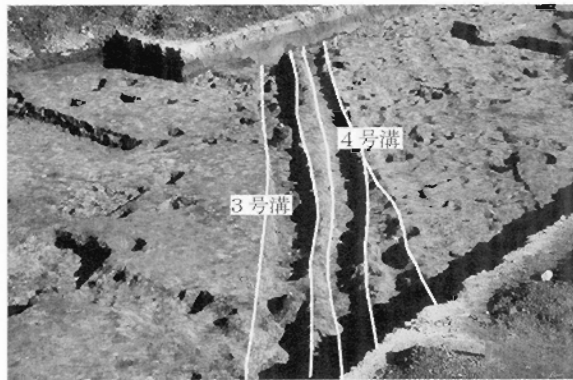
6・7号土壇・2号溝



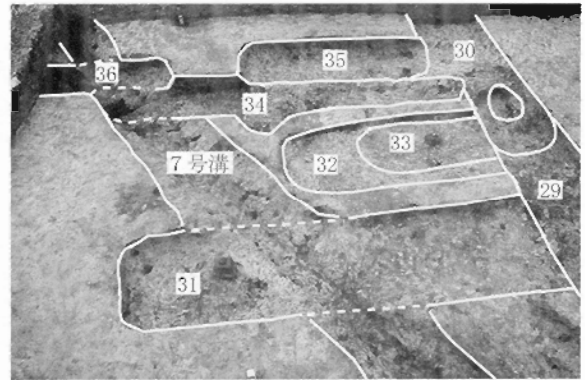
13号土壇



2号溝跡



3・4号溝

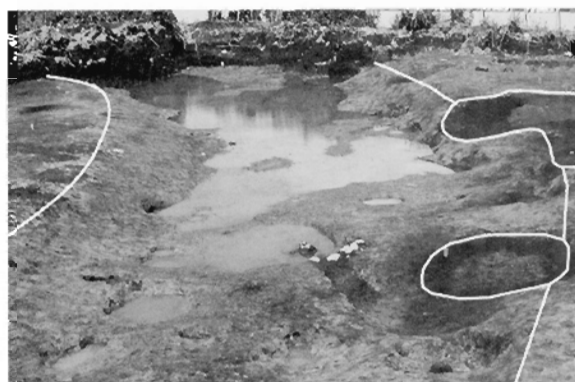


C区土壇群と7号溝



お手長山古墳現況

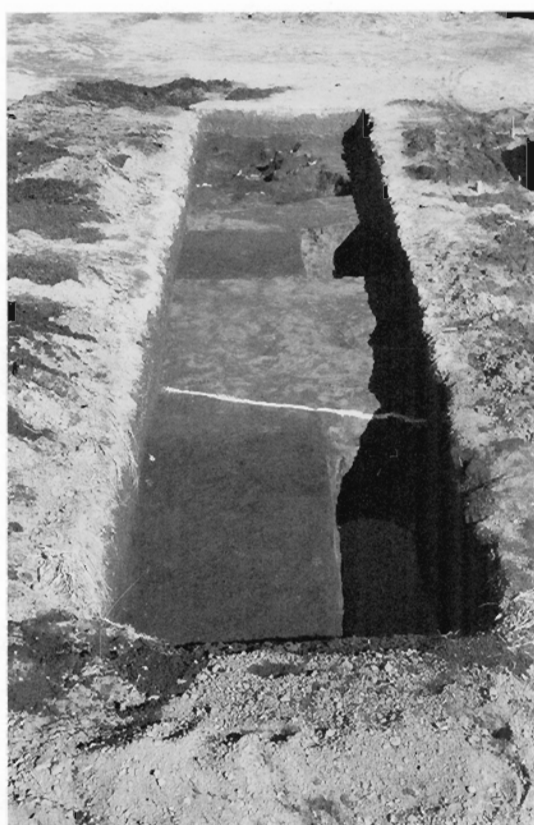
図版 4



周溝完掘状況（西方より・昭和63年度）



周溝完掘状況（北方より・昭和63年度）



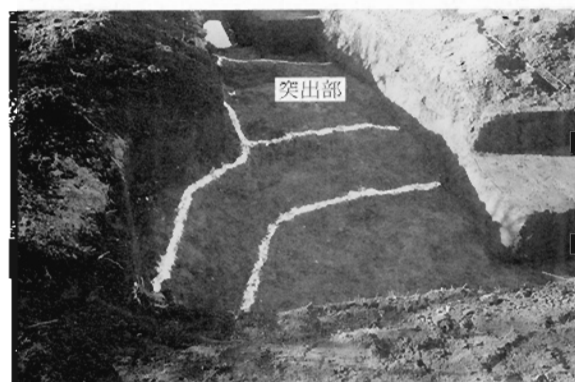
第1トレンチ（南方より）



第2トレンチ（北方より）



第3トレンチ（北方より）



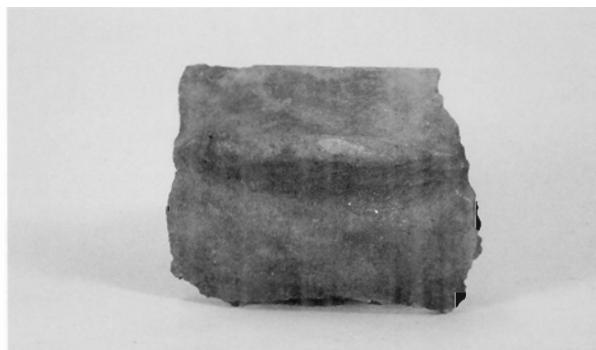
第3トレンチ突出部確認状況（東方より）



第3トレンチ突出部確認状況（西方より）



1号住居跡 (No. 1)



1号住居跡 (No. 3)



1号住居跡 (No.12)



1号住居跡 (No.15)



1号住居跡 (No.16)



1号住居跡 (No.14)



1号住居跡 (No.20)



1号住居跡 (No.24)

図版 6



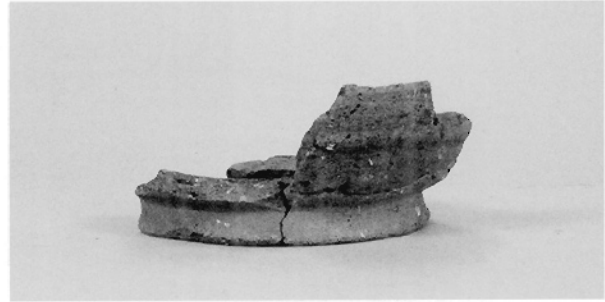
2号住居跡 (No.1)



2号住居跡 (No.7)



2号住居跡 (No.8)



2号住居跡 (No.9)



3号住居跡 (No.1)



3号住居跡 (No.2)



3号住居跡 (No.8)



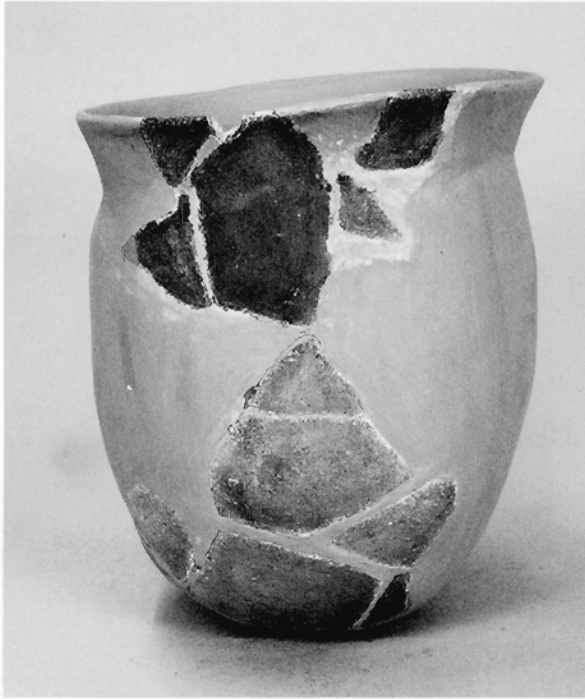
3号住居跡 (No.8・内面の線刻)



3号住居跡 (No.9)



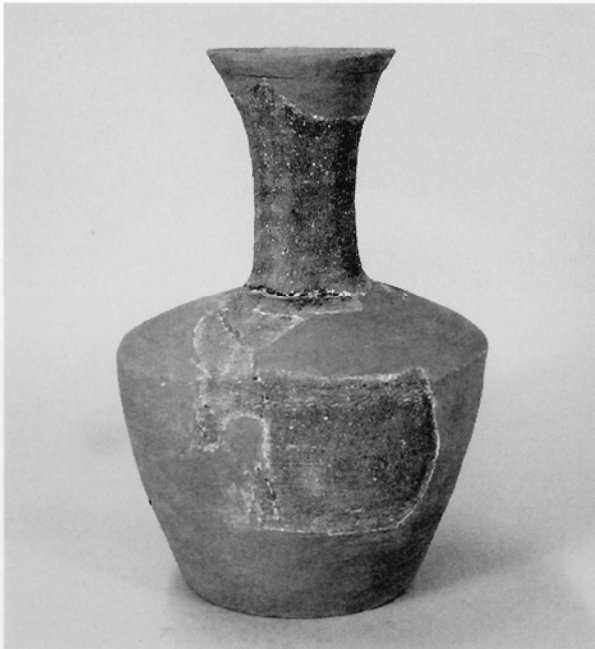
3号住居跡 (No.10)



お手長山古墳周溝出土遺物 (No.10)



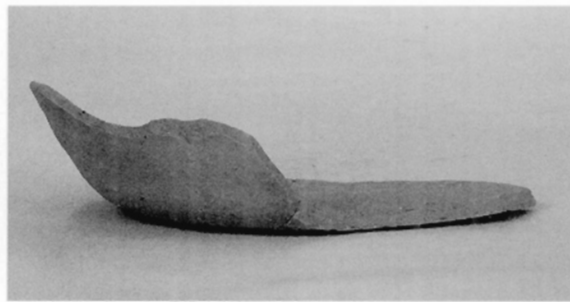
お手長山古墳周溝出土遺物 (No.11)



お手長山古墳周溝出土遺物 (No.12)



第1トレンチ (No.8)



第2トレンチ (No.2)



第2トレンチ (No.3)



第2トレンチ (No.6)

報告書抄録

ふりがな	くまの いせき (立堀地区) おてながやま こふん (お手長山古墳)							
書名	熊野遺跡Ⅶ(立堀地区の調査)・お手長山古墳(発掘調査/確認調査)							
副書名								
シリーズ	深谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	第83集							
編著者名	鳥羽政之							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3番地 Tel048(572)9581							
発行日	平成19年2月28日							
しょしゅういせき 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
くまのいせき 熊野遺跡 (立堀地区)	さいたまけん ふかやし 2003番地	11405	17	36° 14' 03"	139° 12' 53"	平成2年11月1日から 平成2年12月27日まで	A区850㎡ B区145㎡ C区75㎡ 計1,070㎡	工場建設
おてながやまこふん お手長山古墳 発掘調査	さいたまけん ふかやし 2007-4番地	11405	18	36° 12' 51"	139° 14' 03"	昭和63年5月1日から 昭和63年5月15日まで	487㎡	個人住宅
おてながやまこふん お手長山古墳 確認調査	さいたまけん ふかやし 2003番地ほか	11405	18	"	"	平成2年11月1日から 平成2年12月27日まで	95㎡	範囲確認
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
くまのいせき 熊野遺跡 (立堀地区)	集落跡	奈良～ 中世	竪穴住居跡 竪穴遺構 土壇 溝跡		土師器 須恵器 埴輪 かわらけ		A～C地点の調査。竪穴住居跡は いずれも平安時代のものである。竪 穴遺構は、中世に属する。	
おてながやまこふん お手長山古墳 発掘調査	古墳	古墳～ 中世	周溝		土師器 須恵器		後円部周溝の発掘調査。	
おてながやまこふん お手長山古墳 確認調査	古墳	古墳～ 中世	周溝		土師器 須恵器		トレンチ3本を設定し墳形を確認し た。この調査により全長49.5mの帆 立貝式古墳であることが判明した。	

熊野遺跡（立堀地区）

お手長山古墳（発掘調査/確認調査）

2007年2月28日

編集発行 深谷市教育委員会

埼玉県深谷市本住町17-3番地